

明治俠客傳

特

091461-000-1

特13-29

明治俠客傳

日吉堂

M23

DBN-2381



No 2074/23

明治俠客傳序

施耐庵の脚色は官を以て賊とし賊を以て官に換  
 自己世を憤り辭を筆頭に洩らす業にて虚中かの  
 の實あり菅のや主人水滸百八の鳥合を取らず明  
 の初世と際し忠を重し義と勇み命を綴り文武相  
 以て快しとをる俠客劍者の願未を綴り文武相  
 相競ふ二十年前の今日と異なる人情を示し開智  
 鑑とす昔日の豪傑目下の英雄と其趣を異にすれ  
 慣り義にはやりて痴の如く狂の如きは俠者の自  
 所る編者能く此意と則りて此編成れり看客の佳  
 にある歟熟讀して文意を味へ





明治侠客傳

明治の初め、東京の大田区に響き名に聞えし千葉桃井  
 神原と並んで、一時英名を轟かしたる、彼豊前國中津の藩士、閃跳傳真影流の達人  
 吉田半介、傳記として記事、安政の始めに起り、明治元年のすぬ了れる随分おもろき詰柄  
 なり、先づの發端を尋ねるに、「維新前江戸沙留」に於て（今の蓬萊社の處なり）宏大なる屋  
 敷を構へし、豊前の國中津の城主、奥平大膳太夫殿が藩中にて吉田半介と云る武士あり、此人馬  
 廻の役柄にして忠直なる人物なりしが、其一子半介（と云ふ）と云るは性質猛く腕力強く、劍道は  
 眞影流にて非凡の開高かりしが、惜ひ哉事に臨みて一度斯と思ふ時は飽きでも執拗して彼  
 強情を張、抜癖あり然れば、兩親とも之れを憂ひ、時として折檻し、時として諭せど、彼れ遂  
 ひも改心せず、折をり血氣の所業、及びて後悔を及ぶなり、斯て一日の事なりしが、  
 奥平殿、半介を召れて機嫌よくしく打笑たまふ、奈半介、其方が一子の半介と稱する者は、尙房住  
 傳の老年ながら、天晴なる武藝ありて、殊に力量凡ならず、近習もが申すを聞しが、我今日は閑  
 暇なまて甚はだ、自然に堪ざるゆゑ、其半介を召出し、武藝のほど、力量こそ試みんと、思ふ故ま  
 其方立歸りて、俱來れよ、急ぎいへ、と仰せあるに、吉田半介、頓首して、誠有がたき御意に、  
 仰せの如く、半介儀は生れ得て少々ばかり、力量を備へ居り、且武藝、好める道、よて太刀、抜ば、か  
 五りは心得居れども、ナニが扱て、若年者ゆゑ、恐れ多くも、御直々の御覽に入る杯と、申す、然る見、  
 五りは心得居れども、ナニが扱て、若年者ゆゑ、恐れ多くも、御直々の御覽に入る杯と、申す、然る見、



六のいへき此義の平に御免を蒙り何か別相催はして今日の御徒然を慰さめ奉まつらんト  
辭退するを奥平殿許したまはず然れば無益の謙遜より若年者を養成するには予が折をり直覺  
して武藝の程を試験こそ者共が勵まに成り道の成就を促かを理れば立地召連來れトある  
再應の君命に準人も今は因辭かねけん然らば御意は隨がはんとて澁く退席したるが體  
て一子半介を召連來り親子君前へ膝行して暫時拜伏して居たりしとぞ

第二回

吉田準人君命に依て我子半介を召連參り君前近かに拜伏するを奥平殿近習をして之を問近  
く召寄たまひ先半介の骨柄いかよと呼起して見たまふは彼は當年十五と雖ども丈合恰大さ  
くして色白く目元清しく童顔最ども愛嬌あり且筋骨逞まし氣に相貌凛々しき少年なるにぞ  
奥平殿も社とて御膝ちかく召寄給ひ「半介能ぞ參りたるな我豫々聞及びしに其方は力量  
ありて且劍道を能るよし未想もしく思ふ程は尙此上ども勉勵して益々武藝出精あるべ  
し然るは古人の言葉も百聞は一見に如すとやせば我今日其方が武藝を試験みんと思ぞや  
奈は近習と庭前に於て一勝負いたす可かと懇切に問せたまふを父準人承まはりて詳慎で答  
ふるやう再應の御沙汰ながら半介こと若年と申し殊に粗暴の氣性あるゆゑ此事甚だ氣遣  
しくし且古今來君前に於て武藝の試合つかまつるもの多くは是より遠恨を合み決闘等いた  
す者その先例少なからず最ども右等は心得なき嗚呼の白痴が所爲なれども壯年血氣の輩徒  
には往々ある習慣にいなれば始め御興わらせられても後御不興の起らんこと恐れ多き次第  
なるゆゑ何卒此義は御免ありて只彼が力量だけを御笑覽在せられたく偏に願ひ奉つるト云

父が苦心の言上に奥平殿點頭たまひ奈にも親の情より云思ふは最もなり、今日は豫定の  
儀式にあらず只荷旦の座奥にどて思ひ起せし事なれば其方が申すを容て武藝の試合は後日  
の事とし然らば腕力を試べし者共用意いたせトあるよど迎習の面々心を得て纏て輕き石重  
き石、或ひは甚盤抱銃など居側へ推並べしかば半介は畏まりて君前へ退どきつ、座したる  
儘に件の器物を輕々と搔把わへす或ひは投げ或ひは受とめ果は四斗俵の端を掴みて片手に  
突と持揚ながら身を捻ひけて傍らの出入の柱へ二たび三たび腕力に任せて突當たるよ其響  
き最凄まじく床へ備へし置物花瓶も響く應て退出し倒る、實に未曾有の怪力に並居近習我  
を忘れて是はとばかり驚き呆れ感歎の聲を斷ざるよど況て之を熟覽ありたる奥平殿は手  
持たまひし扇子を握と推開かれて「ヤア半助天晴く最早腕力を止めいへ我最初より心中  
に斯ばかりとは思はざりしが意外の大力感心せり卒近々進いへ近々ト召たまふよど半  
介の容儀を正して御前へ前み拜伏せしかば大膳殿打笑たまひて只管之を歎賞あり且今日の  
賞美として何なりとも其方が所望の物を遣はすべし遠慮なくせと有にぞ半介は拜承して  
然らば仰は相從が御前か毎に帶たまふ其宗近の御佩刀を拜領仕まつり度いト仰りもなく  
申し上るに元來件の名劍は常家相傳の重寶なるよど是はいかにと呆れたまひし大膳思はず  
傍の準人と面を見合せ言句を詰られ暫時黙して居たまひしとぞ

第三回

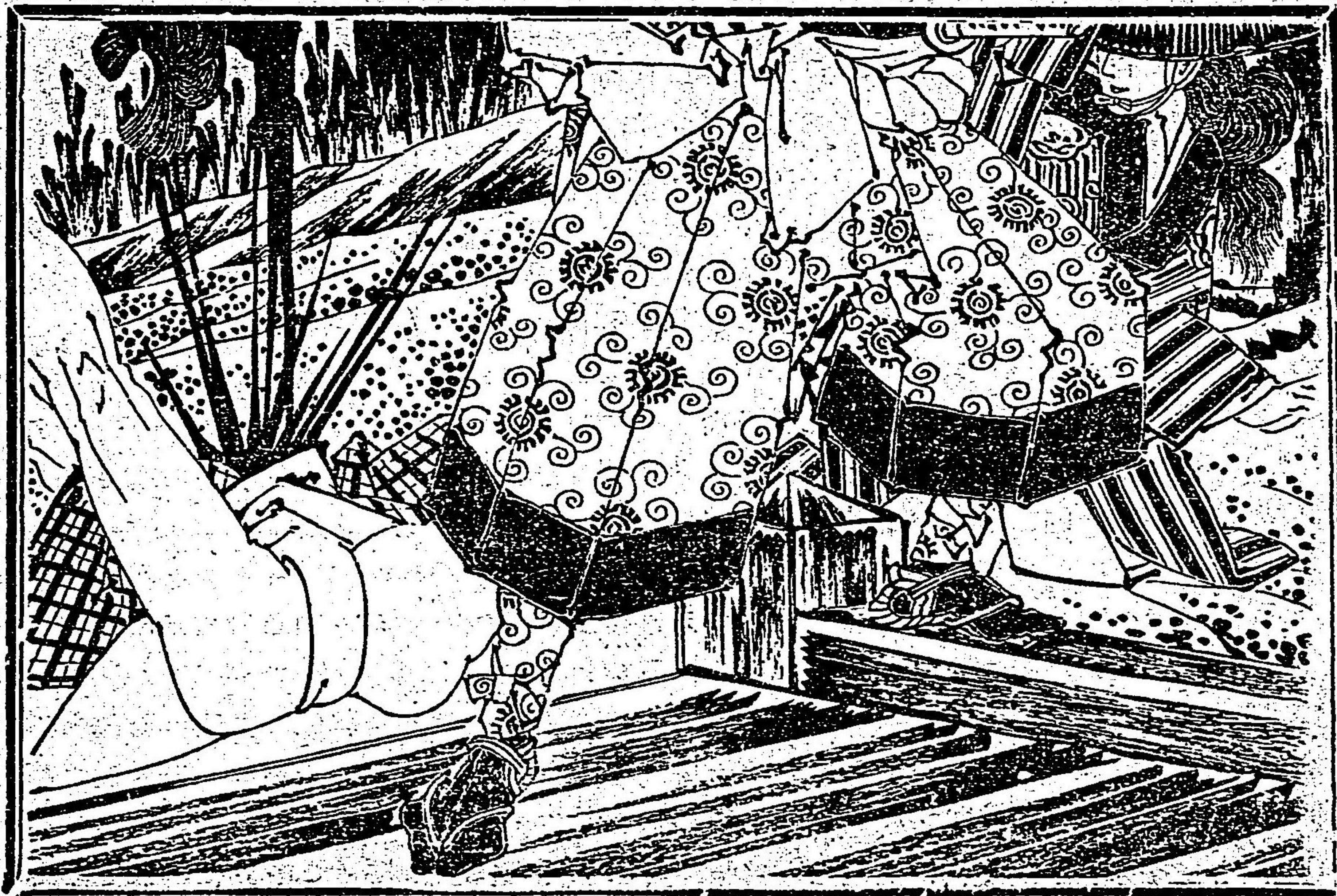
時に奥平公沈黙されて胸中に思ひたまふやう我半介が怪力を感賞の餘り口をたらし賞譽所  
七望に任せんと云たれども彼は尙子供の事ゆゑ有難に宗近を所望せんとは千萬思ひ掛さし

八が意外の請願當惑したり然りとて今と成り食言せんこと宜しからず實に宗近の一口が我手に得たる物ならば之を與ふこと易けれども右は當家累代の重寶にして大切な品なれば之を手放すこと祖先へ對して相濟ざる次第なりハテ奈にせんと屈托あるを吉田隼人推察して半介を破たど疾視一汝若年の升際として僅かの腕力を誇り顔に勿休なくも御家の寶劍宗近を請申す杯とハ言辭同斷失敬至極、テモ大胆なる白痴かな卒速かに暇申して退出いたせト叱り返るも與平制したまひ「隼人暫時扣居よ是は半介が悪きに非ず我只今彼に向つて其怪力を感ずる餘り褒美は所望に任せんと云たり是此一言聊も及ばず今は何をか惜むべき喃半介所望に任せて宗近を與す可し然れども此刀劍は其方も常々知りつらんが是を當家の重寶なれば我とて我私し手放さんこと祖先へ濟す就ては與へず與ふる程に餘は其方宜し致せ且隼人よ、我尙別用事あるゆゑ今夜は彼を宿直させて其方等は退そくべし大儀で有心心得たるかと徐々云せてたまひ聽て與へぞ入せられける仔細あり氣な御言葉に隼人日ハット畏れども思ひ難つ、疑惑して再び我子を疾視まはし「奈なる御用か辨まへ誰れと今夜其方を止め置て宿直せしめよとの御沙汰なれば呉々も謹慎して粗忽なきや相勤めま決して例の強情なる我慢の心を懐べからず熟々慎しむ肝要なるを熟心得よト再三介は人なき廣間の中央へ大の字なりに段反かへり「やれ、究屈極不在た何は兎もわれ我君が彼宗近の一刀を與ふと云れたは是盜どの謎々だ有難し忝けなし平常親父の話よ聞て欲ひくと思つて居たが今夜圖らず頂戴するとはハテ嬉しくやト我を忘れて夏虫の

獨りホク、既こび居たる折から日も長暮はてつ聽て茶坊主の案内に隨がひ、宿直房へ入たれども心と想ひ居けん睡りつ覺つ寐も遣らで今かくと俟わかすに思はずも時を過して漏刻の音遙か聞ぬ夜は最且更と成たるより半介急ぎ臥床を立出で御寐所へ密び入しに常には呂が枕邊に備へ置る、宗近を遙隔て、轉ばしありたり扱社得たんと擡取し其下緒へ一封の金さへ纏ありたるよぞ有難の半介感激して主の寐所を再拜し金を納め太刀を横依雌雄足殿中を密び出つ、堀を越ぬ屋敷の戸外へ出ると其ま、汐留橋まで走り來つホツト一息つさながら後ろの方を見顧る折から黎明の天明渡りて東の方より白み初けり、維時安治の元年三月はじめなりしと云ふ

第四回

俠重説吉田半介は彼宗近の劍を強取て忽地屋敷を出奔したるが途中心中と思ふや「我圖らずも力量を謀はし就て主君の默許に依り此名劍を得たれども所業盜賊に均しければ假令主君は許さども御家法と親父とは決して許す可まらず然ればこそ主君にも此寶劍を強盜なら疾く過ると云はぬ斗りよ金さへ添て下されたは是を路用に爲るの事か返すも有傳がたさ御厚恩感激いたり、嗚呼親父にも阿母も只一口の刀の爲に別れて行とは不孝よして申し譯なき事、から我物情が生てより六十餘州を経廻りて武者修業を爲るものと晝夜意中一懸て居たれと良佩刀も路用も無れば今日まで猶豫して居たが何れ一度は五六年別れる所存ありしなれば今ぞ樹し時節到來是より諸國を巡歴するなり然れば此寶劍も劍道修業成就九して目出たき歸り來る日に奉還いたす了簡なれば暫時拜借する迄なり斯れば不孝も不忠義



も暫時の間と思ふもの、物堅き親父殿が我此心中を知らずして怨も爲ん怒も爲し然れば一通認ためて親父へ仔細を明して行へし卒々ト獨言しつ暫時四下を見廻す折から密もよし我屋敷へ常出入する酒屋の小僧の三吉と云ふが來りしかば半介得たりと呼止て其腰に爲し矢達を借り懐紙を引延して件んの所存を一五一十さらさらと書認ため之を我家へ届けしと云ふと折文よして渡しながら錢一握を與ふるに三吉は異儀なく受取り懸て準人へ届けしと云ふ一半介は爰に至つて心安しと打悦こび急がはし氣立去しが何處とて當もなければ先は北越を廻らんと下板橋を心當に年古郷を後としつ勇み悦こび若駒の足元かるく走り去けり扱半介が事は暫時措て、爰に飛彈國高山の城下に種油米穀惣ての諸色の相場を打て家業と爲つる外木由衛門(三十一)と云ふ豪商あり妻は疾く亡なりて娘只一個ありう名をお七(十六)と稱たるが容色頗る美はしく且性質やさしきにぞ由衛門は天にも地にも復なき者と愛育みて之を樂しみに慕ひけるが斯て或日の事なりしとぞ由衛門親子は要用ありて加賀の藩原まで行たる途中飛彈街道唐澤より蟻寺へと渡る處ろに例の番渡しの難所あるが此邊の人は事どもせずして由衛門と七とは離れて定例の賃錢を拂ひ先供人を前に渡して後には親子二つの番へ推並んで打乗つ、數十丈の谷の上を真中程まで來れる折から忽地兩岸騒がしく此邊つての大忠黨飛彈の金太と云る奴が衆多の手下を引卒へて突然と現はれ出で東西齊しく此邊をて宛りて先番番と由衛門が供人を追ばらひつ金太長柄の斧を把て岸の岩角に立起り斧具類に振舞して山衛門が打乗たる番細目掛て切落さんと勢ひ猛く身構へたりとぞ

第五回

元來奈なる仔細ありて彼惡漢飛彈の金太が外木由衛門へ抗敵しと云ふに抑るも金太と云る奴は心奸けし性質にて一年三百六十日推借強求博奔亂暴總て惡業を以て世を凌ぐ虎狼に均しき曲者なるよぞ近郷近在到る處ろ人皆怖れて尊敬したるが儼り外木由衛門は少しも彼を意と爲こことなく是まで幾度強求に來たれと鑑一文も貸與へず手酷しく擯し故金太これを遺恨と思ひて時もあらば彼を殺し熱腸冷を爲んものと限狙ひ居たりし處ろ今日圖らずも由衛門父子が番渡しに掛ると聞て天に慨こび地に歡こび同類衆多集め來り之を渡しの兩岸に伏おき我は長柄の斧を把て自から此隊の大將と成り今由衛門が番に乘て谷の中程まで到りしとき双方突然起り立て事の爰及及びしなりとぞ、是此騒ぎの來歴なり當下外木由衛門は後を屹と振かへりて打驚ろさつ、聲を勵ましこれ一金太暫時まで全体向の遺恨が有て非道な事を働らくぞ是マア待よ仔細を聞ふ若金づくで濟事なら己が家の身代を殘らず與て遣はさよ命だけは免して呉ろ免して呉ろト聲高く呼はる言葉を聞も果す金太から一打笑ひ「姿を見ろ耄祿親父今殺される因縁は聞すと汝に覺が有らふ勿体なくも己様が是まで度々御出馬あつて僅かの錢を強求てもツイ一文半片ら費ねへ斗か傲慢で生粹な小言を云した其熱腸冷に今日の今汝を千尋の谷底へ切落して往生させ其お七女は勢一杯荒淫でから賣積りだ愚頭く云すに死ばれくハア宣姿だト斧を立て腹を抱て打笑ふを由衛門開了り天を仰いで歎息「然しやア金太何しても己を殺す了簡か、エ、残念なお七が可愛ばかりで今の様に特と言葉を低くして一通り説たもの、情のなの字も知らぬ奴、何せ死さふ善は巨十なソレお七「何事も約束づくしや己が死んだらおまごけ彼奴等が云に随がつて兎も角も



四十 生存らへよト云かけるを打消てれ七の潜然涙を流し「否じや〜目の前よお前の死ぬのを見過して何として存へませうぞ彼金太奴が意地わるく私の脊を落さぬなら直飛込で死ぬばかり、お前を殺すが私や術なひア、何ぞして助けたひモシ金太を拜みます腹が立なら私し殺して願ぞ親父を助けて下さいモシ此通りト掌を合せ泣つ口説つ打説るを馬平な聞ぬ虎狼の金太「遮莫汝も死ぬ氣なら親父と一緒に殺して遣ふソレ切ぞよ覺悟しろ念佛しろと云もあへず復振鬚す斧の刃に奮切んとする折から此時遅く彼馬速く後よ時立岩陰より汝れと云さま飛出たる一個の壯士が此体みるより跳り蒐つて板打よ振返りたる金太が左手を、水も溜らす切落し復打んとする白刃の下を金太遠て、飛退機會に足を外しつ千尋の谷底ふかく斗筋うつて真逆さまに陥入しもパツと沖たる谷霜に押包まれてうたかたのわはやと見る間に見へずなりけり

第六回

客 當下件んの壯士は飛彈の金太を切落したる血刀ひらりと振鬚して驚ろき騒ぎ且怒り打て蒐れる金太が手下を前後左右に斬倒し切拂ひつ、追まくるに手下もは當り難けん轉つ輾ひつ笹壁の蜘蛛の兒を散すが如く皆八方へ逃ゆく体に向ふの岸よ見渡し居たる手下共も怖れ騒ぎて同じく先を争うひつ、是も忽地北亡しかば壯士は打笑ひて刃を拭ひ鞘に納め手疾く奮繩の端を把り由衛門とれ七の脊を徐々よ手繰寄るが否や親子諸共下立て走り寄つ、壯士の左右の手を仰り押戴だき暫時感涙よ暮たりしが夏あつて由衛門地上へ顔を掲着して「ヤレ有難い忝けない何方様か存じませぬが私し事は由衛門と申し當國高山よ住まざるもの又是

なるは一個娘名ヲ七と申し升もの又只今貴公様が此谷底へ切落したは飛彈の金太と稱れる悪漢扱此事の起りと申すは右金太奴が先頃より私し方へ推て参り錢を貸の金と貸の度々強求升たれと一度貸たら未々まで崇を遣そ奴と存じ参る度び一眺つて斷はつて遣ましたを彼奴が遺恨よ思ひ升て斯いふ騒ぎに成ました若貴公様のお助なくば親子一緒に此谷へ切命を助かり升たヤレ難有い〜ト云ふ語を繼でお七も摺首只今親父が申す通り惡漢金太よ二人とも殺されようど爲また處ろを貴公様のお情で不思議な命を助かり升た有難ふ存じ申す就ましては貴公様は何處のれ方かれ名前何と仰せられ升かお聞せ成されて下され升ト思ひ入て尋ぬるを壯士は熱々聞き名告も大層至極なれと拙者は豊州中津の藩よて吉田半介と云ものなり、拙者も此處を渡らんとて先刻迎り参りし處ろ岸の岩よ立たる下郎が其方達と問答して此奮繩を切んと爲を嚴の蔭より見聞し右の下郎が惡漢なるを疾く承知いたしたゆゑ惡を斃し善を助る世に武士の本分を聊か盡せし迄の事にて深く謝するよ及ばぬ事なり、然らば告別申すぞよ復惡漢が來らぬうち疾く高山へ歸りしへ拙者も亦用心よ道を變て参るべし卒々ト云捨て既足疾よ行んと爲を親小述て、取廻り成程うれは然でもらふらふ然し私し親子の爲よは命の親の貴公様切て今宵のれ宿を致し尙徐々ど御禮を申上ねば心が濟ぬ先暫時ト引袖を此方は拂つて打笑ひ「武者修業が道中にて人の難儀を相助け其者の宅へ連て拙者は斯る瓜田の内へ靴を容へる者ならず惡止されては迷惑なり縁も有らば復わはふ然

六十 暖千本杉の並木を指て飛が如くに走り去を親子は今更追かねて感激すること大方ならず其  
は大地へ平伏しつ去ゆく人の後影を見へず成まで伏拜み伏拜みつ、見送りたりとぞ

第七回

明 潮問よ吉田半介は彼日屋敷を出奔して北越を志ざし下板橋より踏出せしが元より急がぬ旅  
なれば夜も宿り日歩行て初め松平右京殿の城下上州高崎に於て一ト修業し其より木曾の  
街道を辿り、板倉伊豫殿が安中城内藤豊後殿が岩村田、上田小諸松本など行つ戻りつ城  
下へ宿を投り落士と試合或は勝或は負して又飛弾の高山へ到り夫より能州加州を  
指て打廻る途中國らずも、前回も説たる由前門親子を蟹寺の番渡しにて救ひ取たるものな  
り云ふ、是は話しの筋條にて強がら記を可き程の廉は有らねど、凡ろ小説を綴るもの  
其人物の言葉に托し或は書形の助に依りて其筋條を省くものは是粗漏の書方にして今  
人多く之に依れど右は説處ろ不足なるゆゑ多小看官の想像を費さしめねば、話しの段取  
からずして煩ふる不深切の書方なる故假令うるさしと云ふ人あるとも可候は之に隨がはず  
簡短に其筋條を記せり尙此末の書方も重複に似たる處ろあれど右の主意なり了解ありたし  
去る程半介は日を積み月を重ねつ、北越を廻り盡して是より西へ志ざし京大坂より中國  
筋を長州下の關まで到り尙九州の内裡へ渡り本國中津を遙かよ臨め立寄らずして小倉へ  
出で筑前筑後を打廻り薩摩を指て進み行くと是は此鹿兒島ころ音も聞えし強國なれば半介  
武藝を鍛鍊するに屈強の土地なりと思ひ彼地へ進み行るものにて又本國豊前の中津へ立

客 寄らすして過たるは是宗近の一條に依り遠慮したるもの成べし斯りし程に半介は日を經て  
鹿兒島へ到着せしにぞ同藩勇士の聞へ高き彼有村治左衛門が門を叩き、姓名を告げ來意を  
告て教導を頼しかば治左衛門感心して之を我家へ滞留させ先長途の勞を休ませ同藩刺客の  
甲乙へ傳ひて日毎に半介を道場へ伴ひ半年ばかり勉強さするに元より臨む處ろなれば半  
介は爰を詮度と思ふ限り勉勵せしかば劍道大ひに上達して天時達人と成しと云ふ斯て一日  
明 のこと治左衛門は半介を呼寄て明日は常藩の大劍客大石伊佐美と試合せんが彼は非凡の剛  
力にて太やかなる竹刀の中へ鐵の丸棒を仕込れくゆる術ある者も其竹刀は打挫がれ後を取  
こは是迄も屢々あり因て足下も心して立合ひへの教示を聞き半介は心を得て其日市中を  
奔走しつ直徑一尺餘りもある大鐔を製し來りて之を竹刀へ箆て引寄せ道場へ出たりしかば見  
るもの何も驚ろら果れ道は何故と打見やるに況て相手の大石伊佐美は且果れ且腹立ち、斯  
客 る白痴た竹刀立て立合んどは卑怯なり今日は某がし断はるトて其儘退ぞき出んと爲しにぞ  
半助遽て、引止め卑怯とい足下が事なり先々暫らく待たまへ云ふ事ありト立塞がりて只管  
傳 これを止めたるにぞ伊佐美も我を卑怯と云し其一言の仔細を聞んと聽て元の座へ復り入た  
り、扱是より兩勇士が口論試合の勝負等は尙引續て次回に説べし月中申す有村は安政の初め  
江戸に居て此頃鹿兒島に居ざりしと云者あれども番渡しの話と共に暫らく聞得たる儘話  
し置

第八回

七十 心たけく力つよく敢爲勇進の氣性に富とも生來淡泊剛直なる之薩摩武士の常なるが故に大

八十 石伊佐美も半介が卑怯なりと呼はつたる其一言を聞答めてツカノと歸り入にぞ半介は打  
笑ひ「拙者只今御邊へ對して卑怯二字を蒙むらしたは是御邊が遣ふ處ろの竹刀の中よは  
鐵棒ありて其鐵棒の重量を憑 人に勝を得たまふよし聞及びては右等は器械の作用を借  
て暴を遂るの外ならず是拙者が御邊を指て卑怯なりと申せし譯なり若御邊今日より其器械  
を打捨られ眞の竹刀木劍にて眞の試合を爲たまふとならば拙者感服して立合申さん若又右  
の器械は依らずは試合無用とあるならば拙者も亦此大鐔の竹刀を以て之を防ぎ一ト勝負致  
すべし然し乍ら是は此双方器械の打合のみにて眞の武術を試にあらねば物不足して面白か  
らず奈に何れを取たまふぞ御所存聞ふト憚かる色なく思ひ込で演るを聞き、伊佐美大いに  
打笑ひ「成程これは云れたり「此竹刀卑怯で有つた然らば是なる木劍にて眞の立合いたす  
べし卒仕度召れよト云つ、後の羽目に懸連ねたる、赤橙の木劍二口把て場の中央へ又合  
せしかば半介も對手の心の餘達なるに感心して然らばト手襷を絞どり衆多の武士の連なり  
「見坐の方へ目禮して懸て木劍の柄よ手を掛け片手に之を把揚ながら双方齧しく熟視合つ  
、徐々立起りて間を量り足場を掃り伊佐美も一段此方下段と各々得意の身構しつ呼吸  
を測れる初太刀の進退、互に隙を得ざり去が暫時猶探したるが氣敏き伊佐美堪難けん  
大喝一聲木劍を頭の上よて廻しなから勢ひ猛く打て來れる、敵の太刀ころ小手なれと思へ  
ば半介心得て太刀を右手の表的に開き打外させつ眞顔臨みて車かへしに打返を伊佐美流  
れの太刀を揚て飛退去さま打拂ひしが是より双方寄ては返し、返しては復うち寄つ必死の  
勢ひ龍虎の奮闘、太刀音排聲すさまじく或は進み或は退き閉つ開きつ打合餘り果は亂刀の

刻刀と成りて見目危うく闘ひたるが互ひに素面素小手なるゆゑ若一度受損せば筋骨碎くる  
恐れあれども兩勇士、事ども爲すして、劣らず優らず踐込飛退彌々益々激闘して遂に太刀  
を捨て無手と組しに半介素より怪力あり伊佐美も力量尋常ならねば此組打も亦凄まじく時  
移るまで揉合たりしが何果べしとも見へずして勢ひ決死の体あるよ今既是までなりと  
有村始め見座の面々皆走來りて之を引分け頼て左右へ推据つ、物別れに別れさせて水を與  
へて勸りしかば互に氣力相復して進み近き手を把合、失禮したりと挨拶せしとぞ、然れば  
最前より見物したる衆多の劍客こ、に至つて口を極め手を拍し只管双方の武術を譽立感歎  
の聲を立たりしが有村は二人を始め居合劍士を引纏めて之を我家へ伴なひ來りつ茶を屠し  
酒を畑ため一大盛宴を打開きて十分は饗應かば各々暫時盃蓋を掲げ尙試合の事を彼の是の  
と相語り相興じて談笑夜半の頃に至り皆歡びを相盡して宿所へ立歸りしかば辛やく當  
日の事は果しと

第九回

傳 隼人の薩摩武士よて當時刺客の闘へ高き大石伊佐美と立合て遂に互角の勝負を得たる彼吉  
田半介は始め東都を出奔してより今月今日に至るまで既一年餘よ及びしかば當年(安政  
三年を云)は端かけ十七と成りぬ因て有村が勸るに隨が以前髪を剃り元服したるが此頃大  
下騒々しく勤王の黨佐幕の輩徒四方八方に蜂起して全國殺氣に推巴まれ六十餘州の大小名  
にも或ひは幕府を佐るあり或ひは帝室を補佐するありて上下の人心穩やかならず右兩黨軋  
軋して到る處ろ安堵の念なく諸侯國勝手と相稱し僅かの家臣を江戸へ遣しつ餘は主従本國

年より武術を好み武修業を思ひ起し今日斯て在ると云ふも是乃ち斯る時社若父を佐補て身を投擲、千軍万馬の間立て勇を奮ひ偉功を立て以て君父の面を起し名を顯さんと  
 思ふに在のみ因て一旦東都へ歸り此寶劍を主君へ還して志ざしを申立て偏に忠勤を相勵み  
 臣下の本分を盡さんこと正し此時なるべきに然らば其の備準を爲んとて忽地決心したりし  
 かば先有村へも所存を打ち歸京したしと相談を聞き、有村切りに感歎しつ之を一室へ招  
 きいれて何事やらん良暫時不易の大事を密告以て後來の事を頼む様子に半介は喜悅に堪  
 ず、我未だ若年なるに有村が斯ばかり世に大切なる企望を語りて時の應援を頼みしこと面  
 目これに如ものなしと殊のほか感激して最愉快これを受こみ天地神明に誓を立て固く其事  
 を約せしかば有村も悦びて其翌日朝はやく一席の酒宴を開き先の連中を相集めて送別の  
 盃を揚るよ半介は其扱ひの懇切なるを歡び謝して暫時盞を獻酬せ馳て旅仕度を整へ  
 つ、一人く別れを告げて安政四年四月某の日東方を指てぞ出立したりと此時有村が吉田  
 へ語り密談の一條は是後年櫻田見附大老刺殺の一件なりしが慙て吉田が依頼を受たる其  
 事の趣きは尙後々の回に至つて説繼明す處ろあるべし然れば吉田半介が如き井伊侯が爲  
 の虚無黨なるのみ扱此虚無黨これより以向、時に奈なる手段を施し時に奈なる工風を廻  
 らし以て大老を刺んと爲たるか其邊の話柄は次號より説るめ以て西洋東洋とも虚無黨と稱  
 する者が隠現不思議の舉動を爲こと同一なりしを説明すべし去程に吉田半介は只管途を  
 急ぎつ、七八日にして九州を離れ便船に乗り大坂へ歸り進んで尙京都より東海道へ差掛し

が途一圖らず我屋敷の急飛脚又出遇しかば君父の安否を訪ねし處ろ父隼人は去年の暮より  
 大病を罹りて昨今危うく主家も今度の大乱に據り混雜一方ならずと云ふよ半介大ひ仰  
 天して先は飛脚に謝し別れつ、ヨシ然ば此時なり百里に餘れど此街道を晝夜兼行飛行さ  
 父の臨終に再會し尙君家の大事に預かり忠と孝とを全ふすべしハテ何したら一足飛に江戸  
 へ歸れることもがナト四下を見廻す後の方より雲助が馬を曳つ、悠々として來たりしかば  
 天の賜物これ屈強實に我爲の赤菟馬なりとて遺過さず雲助を三間ばかり蹴飛ばしながら馬  
 閃りと打乗つ、手疾取出す小粒銀を一兩斗り投棄置つ路傍の篠竹手折て鞭を代拍を入れ勢  
 ひ込で射矢の如く又疾風の渡れる如く宙を飛せつ一散に東の方へと走り去けり

第 十 回

俠 馬は赤菟馬の逸物よあらぬ途五關の難なれば半介容易く相進んで小荷駄から尻の嫌  
 客 いなく馬を代へ鞭を揚げ晝夜疾風の如く飛せしかば百里に餘る東海道と只四日として江戸  
 傳 隼人は今より凡そ十日以前に疾病に因て亡なりつ母は又薄命を歎き我を尋ねんどの心なり  
 歸參叶ふ可らず先頃達したまひし依り迎も屋敷へ入たまふこと宜しからずと存するな  
 り尙委細は拜請せんと返答にて有るか有る半介爰に至つて殊のほか落膽し、太息つ  
 いて悔みたれども斯て在べきよ非されば三田魚籃下の菩提院へ到り寺住の僧向某へ對面し  
 一十二 て亡父の爲にと布施を納め馳て墓所へ參詣するに世を以て問もなければ斯る箇世の折なれ





二れたか一ツの寺で同日は落合すも不思議な縁なり障りが無は聞せられよト問ねられて二  
 十人とも既掘り來涙を拭ひ(兩人)サア其事とやしますはお話いたすも何とやらお恥かしふ  
 は存じ升が折角のね問ねゆ申し上ませふト云かけて復推拭涙の間に主従聲を曇らせつ演  
 る處を聞取よ右は本所馬場町に住たる土問屋徳兵衛と云ふ者ありて頗る氣分よき者ゆ  
 る當時市中を徘徊したる彼偽佐幕の悪浪士等が金ある家に推入て幕府補佐の軍用金と稱へ  
 明夥多の金を強り取若抗敵る者ある時は之を殺せと戯れの如く乱暴狼籍に及びけるを見つ  
 治開つ、深く疾みて右等の暴徒が町内へ入るときは常に衆多の子分を引連れ其家より走り向いて  
 之を打拂ひ人を救ふを愉快の事に思ひ居たるが暴徒の中に中國浪士の團市平と云ふものあり  
 俠て徳兵衛が所業を聞き疾み憤ふるを一方ならず或夜手下の悪者と共徳兵衛が宿所へ亂入  
 して逐よ之を切殺し日來の遺恨を晴せしと云ふ然れば民は父を撃れて面し云ん方なけ  
 客れと女子の甲斐なき仇敵も撃得ず母の先年身罷たれば自ら萬事を取捨し其亡骸を此寺へ葬  
 ひり年來實に奉公しつる下女のお大を供に連れて今日は徳兵衛の初七日なるゆゑ涙ながら墓  
 傳參じつ過つて半介が刀の銘を蹴つけたるより事の爰に及びしと云ふ一伍一什を物語りて主  
 従二人目を推拭ひ頻り又嗟歎したりしとぞ

第十二回

士屋のれ民主従が其過ちを匿さずして明々地に云立たると又その父徳兵衛が非業な最後の  
 一伍一什を黙然として聞居たりし半介は心の中に歎息すること大方ならず懸て二人を見か  
 へりつ、お民とやらが素直なる其過失を取繕るはず明々地に詫られたり感心の至りなり又

二徳兵衛が非業の最後は氣の毒至極に思ふなり然りとて今更詮方なし、古今亂世の常として  
六期ふ時は悪黨も角角諸方を徘徊し悪事を働らく事あるゆゑ、折角川心ありたき事な  
りサ、懸念なく歸りしへ拙者も退散いたすべしト云捨て塵うち拂ひ刀を指し行んと爲つる  
をみ民は遮て、引止め「アモ御深切な其お言葉あり難く存じます失禮ながら貴公様は向れ  
にお住ひ爲ひ升か又お名前は何と云へや承たまはりたう存じ升ト問れて半介思ひす打  
み「ナニヲ拙者も浪人者で一所不住の無宿、然、乍其方が親父の徳兵衛を殺したる彼等浪  
士の党ではないぞ、但、姓名の仕細あつて只今名告かぬるなり縁あらば復讐べし暇申すト  
云もあへず袖を拂ひて足ばやに、墓道傳ひの寺門を走いで右か左か山雲の行方も知らず走  
り去けり一残り惜さに見送りたるお民は切りに歎息し「喃れ大や今の方は何の何者で有た  
らふお名前を云しや無から更ばり當途が着、いしが實に温和お方じやないかト云れて此方  
も呻吟し眞に然で、い升ね奈お名を云しや無か男姿なら氣立なら揃ひも揃つたお武家様  
だト云ときお民は心づきけん今半介が回向したる、隼人の塚、目を注て前後左右を見廻し  
ながら石塔の後部、刻たる文字を讀で眉を顰め「安政三年四月建立吉田半介父隼人之墓お  
や吉田半介とは何だか覺の有る名前、ナ、夫々然だつた私しやマア大變したよ（大）エ、  
大變とは何しました（民）何し升た處ろかね、彼そら飛騨の伯父さんから日外のこと一五  
一十を委しく手紙で知らせて来た、ソレ番渡しの厄難を救い取て下すつた其時の武者修業  
は奥平様の御藩中で吉田半介と云しやるお方お年は辛やく十五六モシ右の半介様が江戸お  
屋敷へお歸り有たらね尋ねずしてお前から、熱れ禮をど阿父さんへ頼んで參つた事が有た

は、因て阿父さんば汐留の屋敷へ（奥平家を云ふ）參上して吉田様へ上つた處ろ半介こ  
どは不埒が有て當家を堪當した者故此方は知らぬと、心強く跳着られて阿父さんが悄然歸  
つた事が有たが思へば、今のわ方のね年恰合舉動から此お墓へお參り成された彼等の御  
容子と云ひ其吉田半介様に相違ない、エ、マア夫と知つたなら此ま、お別れすもじや勿  
つた實に悔しひ事を爲たトの思ひ掛なき言葉も聞てお犬も吃驚足摺し（大）夫はマア、  
大騒動不圖もない事しましたね然し貴娘様住寺様へ向よく聞なさい升な若萬一間違つて  
は（民）エ、悠長な今と成て然な事より尙其邊にお居なさい分らぬゆゑサア追駈やう  
お前も急ぎな（大）成ほど然で、い升ね然ならね早くサア、ト水の手桶も蹴返すばかり  
周章狼狽主従が膠策なけれど半介の跡を慕ひて一散に寺門を出つ心當の芝濱の方へと走り  
行し、最不思議なる奇遇なりけり

第十回

去程に民大は半介の跡を慕ひつ、寺を出て途を急ぎ彼方此方と見廻せども是かと思ふ  
人にも逢て行とも知らず來とも覺せず既芝口まで來りしかば、今はしも詮方なし一旦家へ  
立歸りて復るれ是の手筈を定め尋ねて見んどの大が言葉に民も途方暮たる餘り遂に  
其ま、引れつ、心遣して本所の宿所を指して歸り行しが残念さに翌日より神に祈り佛に頼み  
或ひは卜占籤など心の限り手を盡して只管彼が所在を探し毛筋ばかりの便も得ず果  
はお犬が打笑ひてモシ戀の字では有ませぬかト嘲られるまで立騒ぎしが其甲斐もなく今日  
と暮れ昨日と過つ斯ばかり尋ねる人には遇もせで俟ぬ日數の何か通ぎ當年も早く亡人の魂

祭する七月の既中旬よぞ成しと云ふ、嗚呼人間の奇遇ほど世に測れぬ物はなし、尋ねるよ  
 お民が父の徳兵衛と云る者は是ぞ吉田半介が彼飛弾の奮戦にて其厄難を救ひたる外木由衛  
 門が弟なるよし世男壯年の頃獨り東都へ出来り種々の艱難辛苦を経て今の土間屋と成濟し  
 年來手紙遣取して由衛門はあ七のこ徳兵衛は民の事など互ひに知らせ合なぞしつ疎  
 遠なく暮し居たるが斯て或時由衛門より右番渡の一條を委細書翰に書認ためて遊々知らせ  
 越たるにぞ徳兵衛親子感歎して汐留の中津屋敷へ右の謝禮に行なとしつ常半介を慕ひ居  
 たりと然れば前回演たる如くお民が惣て半介の來歴を知り居たりしも斯の如き手續さ  
 たりしと扱話柄二條に分れて、爰に又、吉田半介が母と云ふは名を阿國と稱る者にて今  
 年（安政三年）は四十を過たれども生來ての美女なるよぞ他見は未だ三十四五か七八には  
 過じと見るが家の難と先頃より夫と死なれり別れて心氣憫亂したりけん或日屋敷を出奔  
 し風姿服飾も取案せしま、帯ける班女が狂亂も斯ありしかと思ふばかり裾を曳き跳の儘に  
 て東西南北都鄙遠近とくるひ廻りつ走巡の半介は何も居る我子を何と匿したぞ是半介や  
 くト或ひは泣或ひは口説又打笑ひ腹立て諸所方々と徘徊つ、今日は早稲田の里ちかき姿  
 見橋の邊まで浮羅理くど來掛をりから夏夕の空くせとて忽地一天かき曇り條を束ねて  
 投るが如き大雨烈しく降來りて雷鳴霹靂凄まじく而を向べき由もなきにぞ有聲狂氣のお國  
 さへ忌厭せしと思ひけん彼方此方と見廻せども雨宿りする陸もなきゆゑ橋の袂を岐と見て  
 河岸より橋間へ下立つ、岸より佇立や、暫らく雨の時間を俟顔に水を眺めてニヤ／＼と潑打  
 笑む後の方に爰を我家と定め居る一人の乞食これを見て何か心に點頭ながらお國を楚かと

搔抱さ「コウ御新造か奥様か何ちに爲ても美婦人だ氣狂雨でれ困だらふ而が直きに晴す  
 から少しの間だお俵なせへ俺ちやア早稲田の吉と云ふ乞食ではムへやすが外見に依らねへ  
 眞實男サオモシ晴るまで退屈だらふ樂しま爲から斯しなせト云も了らす弱腰を抱屈むれ  
 ど狂氣の悲しき人事を知らねば強がちに挑み争さふ氣色はなきお國は呆れし顔色にて男の  
 顔を打目成り何よも不云ケラ／＼と打笑ひつ、從居たるは最無殘にも最危うく淺ましげよ  
 ど見へたりける

第十四回

重説半介が母れ國は家の艱難に狂人となり何事も辨別なければ彼の乞食早稲田の吉が挑む  
 隨意／＼身を任せて絶て争さふ氣色なきにぞ吉も最初は此女を狂人なりとは知らざりしか  
 怪しき途に素首なる其舉動は心づきて熟々みるに淺ましや氣狂狂よて有しかば彌々既こび  
 益々抱しめ慾火盛んよ挑み掛りて無殘の所業に及ばんと爲たり、然るに此時雷雨はげしく  
 且通行の人さへ無ゆゑ誰か此体を知者有べき又古今の小説めきたる斯る時とて不思議にも  
 落雷に因て悪を斃し善を助くる杯と云ふ詭らへがまじき異變も無よぞ憫れむ可し狂人れ國  
 今此吉が強姦に因て身を汚されんと爲たりし處ろ豈思はんや勃然と起たるお國の忽地形相  
 變りて吉が利腕把より疾く傍と投退つ、匿し持たる懷中の短刀しらりと抜放して身構  
 しながら礮たど疾視「汝れ乞食の分際として能まア人を手込に不婚な事を爲掛居つたな  
 俺は心中よ所存あるゆゑ此日來形貌を察して偽氣違と成て居たよ然どは知らず下郎奴が殘  
 忍至極な今の舉動用捨は成ぬ覺悟しや其處勤くなト呼はつて短刀逆手よ突か、れる思ひ掛



十三なき爲体くに此方は吃驚仰天したれと元より不敵な曲者なれば飛込ながら冷笑ひ「とつこ  
ひ危ねへ徐々に爲なせへ已も初手から氣違ぢやア興が薄ひと思つて居たがハテ氣違は偽物  
で眞人間との其靈詞其奴は尙さら有がてへ、コウ女刃物ぐれへに怖れる様な早稲田の吉ち  
やア無んだよ、ツイ鳥尾と云ふ通り自由な成りやヤ格別だが抗敵するど踏倒し手込は爲も  
存分よ交て退ねへで置ものか(國)アモア小癩其雜言ならば手込に爲て見せや(吉)  
爲ねへで汝れ何するかドレ斯してト云もわへす傍に在たる焚さしの手頃な粗菜を把より疾  
く復突かゝるお國の白刀を打拂ひさま打て斃れど此方は武士の妻なり母なり、些しも騒が  
ず受かかち切拂ひつ、眞暫時格闘ながら双方が思はず橋間を跳り出で追つ逐れつ怯ま  
去らず天地に閃めく火花と電光敵の疲れを窺ひたるお國は手元へ尾入りて刻みに打こむ  
亂刀にけく打れながらに切込て透つる敵の前後より面部手足の息ひなく切つけ劈さく太  
刀風に吉は物身血液の紅色、既苦しさに踰限よろめき逸んと爲つ、尻餅ついて皺がれ  
を振絞り(吉)エ、苦まひ残念しひヤア誰か来てくれねへか人殺し助けて呉る助  
命すでま危く見へたる折から下町へ稼行たる、仲間のお食前三人が歸り來りて此体みる  
より譯は知らねど驚き騒ぎ「それ大變だ吉を殺すな助けろ斃れト呼はりつ、竹杖木の枝手  
當り次第振舞ひさす三方より一人のお國を推取圍みて打て斃れる勢ひに拵疲れし折なる  
にぞれ國も今は防敵かねけん愁じ彼等が手よ死をより生害せんと思ひ決め暫時隙を求めん  
ものぞと且拵且走りて護國寺の方へ逃來りしが身心すでに疲れ果てつ石に蹶つら礮と倒

第十五回

れ刃を捨て氣絶せしま、前後生体なきばかり死活も知ず打伏たりとぞ

衆寡敵せず拵疲れし吉田の國は慕然に音羽の方へと逃來れど護國寺の邊まで身体既に縮  
の如く踰限く逆歩機會は忽地小石へ蹶つきて伏倒れつ、氣絶しけん其儘立ち起らざり  
しが憚る處ろへ最前の乞食どもが追來りて「それ女が倒れたぞ吉の仇敵を討すな殺せト呼  
はりつ、進み寄て竹杖を振舞ひ既に打んと爲どころへ雨の小止を幸ひに番場土徳と記  
したる傘を掲げ足を疾めて此方を臨み走來りし十八九、なる一人の男が此爲体くを屹と見  
て敏く心に點頭けん掲げし傘を閉りもわへす汝乞食奴がト罵詈で其身を盾に立塞がり持た  
倅る傘の骨さへ柄さへ砕くるばかり打倒し打倒して竊立しかば、敵手は乞食昨日も今日も  
求食かねたる飢腹ゆる今此一人の剛敵打立られて働らき得ず「不敵逃ろト引外し皆散々  
に伍を乱して元來し方へと走り去けり、時は護國寺の鐘まぢかく響きて王莽が時となり渡  
り七月中旬の月代は速ね立たる瓦屋の唐草を出て皎々たるよぞ壯俊は逃る乞食を程よき處  
ろよ追捨て歸り來りつ倒れしお國を抱起して月影に其面を打見やり打眺め、良しげらく  
切りに物を思ひ居たるが辛やく思ひ當りけん是はとばかり仰天して俄然、事の起り如く  
「やアモシ吉田の御新造様コレ奥様お氣を惱かよエ、ア是は何いた物かモシ奥様御新造  
様駒吉でムい升モシ御新造様ト大音あげて呼活ながら種々勸はる介抱にお國は辛やく  
息吹廻して見れば見知らぬ一人の男が我を抱きつ手と尽し介抱しつる爲体に驚ろいて身を  
一十三 倒起し「是は何方か存じませせんが大層な世話に成た容子尙お年若と見へ升に御深切な志

二十三

念あり難く存じまするト云を打消し頭を掻き、何方様の二つたのど勿体ねへお言葉ですモ  
奥様お忘れですか俵ちやア以前番場河岸の彼の土問屋徳兵衛方へ年期野郎も成て居た駒  
吉と云ふ小僧子で當時は羽根田に住で居ますか今思へば去年の冬ごろ親方(徳兵衛を云)の  
阿兄どか飛弾國の由兵衛さんがお前様の息子(半介を云)さんに助けられた事が有て親方  
が其れ禮に俺ちを供に連まして彼沙留のお屋敷の貴公様のお宅様へ参じ升ん事が有たが、  
其時貴公が可愛奴だと俺へ菓子だの鼻紙だのお下な被た事が有たを有がてへ奥様だと思つ  
た故か今日日までお顔を覚えて居ました驛サ扱大概は如斯ことだが當腐るはと話しも有り  
又右の徳兵衛が一人娘のお民と云ふのが當時は親父の跡を繼り番場河岸に居ますから一  
な爲て休息なせへた屋敷へお連申すも俺の家へ行ますにも二里や三里は有ますから一番近  
へ番場河岸へお連申すと致しませふ大分お怪我も有る様子れ顔の色も大變思ひサア、  
立なせへました最甲斐しく慰むる人の情と思議な奇遇なれ國は只管感心して且又思  
ふ仔細も有けん深く厚意を洗ひ謝して其云ふ處ろも隨がひしかば駒吉も悦こんで辻駕を履  
來り之より打乗せ足を増し夜更ぬ間もと駕夫を急がせ、本所の番場を指て走らせ行たり

第十六回

重説前回は現れたる彼駒吉が素性を聞には是は元來羽根田村の或漁夫の獨子なるが幼少の  
とき両親を亡なひ便邊なき孤子と成しをお民の父徳兵衛が人の話しよ拾ひ取りて不便に思  
ひ養育たるが駒吉は生れ得て實義な性質あるのみならず弱を助け強を挫く俠氣自づと備は  
りて且腕力さへ凡ならねば徳兵衛いよ、之を愛し民が行末の力にならんと或時姉弟の

明

義を結ばせ二心なく養育せしかば彼も其恩に感服して始終實やかた働らき居たりと然るも  
徳兵衛が驛れし時は彼れ要用して下總の關宿へと行たるに養父の最後は遺ざりしゆを歸  
東のうへ之を聞て且驚ろき且歎き又憤とふるこ一方ならず何卒右の仇敵を撃ち遺恨を晴  
さんと思へども其事咄嗟の間も起りて又咄嗟の間に了り民さへも仇敵の面体を見識いと  
まの無りし程ゆゑ之を尋ねる由なけれど奈にもして其手掛を探り出さんと思ひたるにぞれ  
民にも所存を語りて或時は羽根田に居り或時は番場に居て出沒自在に進退し毎日市中遠近  
を廻り只管仇敵を尋ね居たるが尙手掛を得ざりし處ろ昨日は又音羽邊を彼地此地と徘徊し  
圖らずも途中に於て國が難義に出遇しかば例の俠氣見過し難て之を救ひ取と云けり、  
是此男が小傳なりとぞ去程に駒吉の弱り果たるを勵はりの之を辻駕へ打乗て只管途を急  
ぎつ、其夜酉の下刻頃(今の七時)番場河岸へ歸り來りお民もお大にも右の仔細の顛末  
を委しく語り聞せしかばお民は更なりお大さへ殊のはか打驚ろき奥の一間へ臥床を設け  
て負傷者を之より伏せしかばお民は更なりお大さへ殊のはか打驚ろき奥の一間へ臥床を設け  
ばかりよししてれ國は辛やく疲勞を忘れて氣力平生の如くなり言語進退自在を得たりと因  
てお民よりは三年前伯父由衛門が飛彈よ於て半介に助けられたる其邊の事を始めとして  
次日日外墓参のときは是々の事にて圖らずも半介かと思ふ武士と對面したる事の趣むき又徳  
兵衛が非業の最後駒吉が素性所存の程まで餘さず洩さず語り出て扱又何故貴公様には斯る  
怪しき姿装を成され且一昨夜は奈なる事にて乞食共と喧嘩を爲れしか何れも不審至極なり  
とて其來歴を尋ねるにぞお國も屢々歎息し我は又云々にて夫も子にも相別れ屋敷を去て

三十三

三十三

四十三

子を尋ね諸々方々徘徊うち特と風体を取索して偽氣狂と成濟せしが是を評判を高くして我  
子に疾く知らせたく二ツは又盛りば過ても有繁女の悲しさに奈なる奴が挑むも知れずと  
右を思ひ左を思ひ狂乱の体は化居たるに其甲斐もなく早稲田の吉よ最手強く挑まれれば  
之を防がんと思ふ餘り懐劔よて相格闘辛やく彼を切倒せしが加勢の奴等を防ぎ難て首羽ま  
で逃来りつ圖らすも駒吉よ助けられたる始終の件りを包み匿さず物語り又お民が菩提所よ  
て相見しと云ふ其男は我子半介よ相違なし彼今いづくに居やらん必らず我身を尋ねて居や  
らう實は儘ならぬは人間の離合得失なりけりと只管に打撃さしかばれ民駒吉れ大等も殊の  
やか打驚き然らば今日より此家よ居りて徐々に親子再會の時節来るを俟たまへ必らず迷ひ  
出たまひよと言葉を盡して諫むる程は國は益々感心して遂にお民等が言葉に隨かひ乃は  
ち當家を足留りとして暫時こゝに止まりつゝ是よりは暇ある毎に折々市中を打巡りつゝ偏  
に半介を尋ねしかども少しばかりの便も得ずして云々の中に本年も過つ明れば安政四年と  
成り世の中ますます騒がしく幕府の制法相みだれて悪黨暴客人を殺し財を奪ふこと夥た  
しく最淺ましき時節と成たり

第十七回

時に安政四丁巳年二月某の日の事なりしが土屋の養子駒吉は井伊掃部殿が屋敷に於て庭普  
請を請負たる植木屋物七とか云ふ者より、置土の注文を受けてサク(土の名)四五十石運送  
するに折むしく昨日今日出入人足に差支ぬしに三河町へ走りて彼立見坊と稱しつる日傭  
取の人足共を十四五人雇ひ來りて自己は之を宰領し右の土を運ばせ扱しつ其の日暮昏の頃

五十三

及ひに仕事を仕舞ひ人足を引卒れ本所へ歸り來りて右の者等へ賃錢を興へ亦明日の朝參る  
様にと約束して返し遣しが後て來る一人の人夫は尙だ賃錢を興へざるより是も一朱の連  
金を一刺わたりて聲を和らげ(駒)ヤレ今日御苦勞だつた時に斯云ちやア氣の毒だ  
がお前は今日々の日雇どり立見坊よやア珍しく能働らいて呉たから是から始終使つて遣せ  
ンタがね前惡ひ癖にやア何ぞと云とれ庭を脱出て御殿の傍に行たがつたが、全体人足風情  
の者が御大老の屋敷へ行つて庭先へ遣入さへ勿体ねへ事だの御殿へ近寄なんぞとい相濟  
ねへ事ぶから熟氣を注て仕事を爲ねへよ彼屋敷は他と違つて怖ねへ屋敷だからよト吩咐ら  
れて人足は何か心中よ恥たりけん苦笑ひして腰を屈め(人足)兎角ハヤ慣ませんで御心配  
を懸ました左様ならバ又明日ト言葉少なに返答し賃を取り會釋しながら歸り去んと爲とこ  
ろへ湯歸りのお民れ國が此方を指て來か、りながら行違ひさま不圖みて驚ろくれ民等いふ  
かる人足お國は疾く其人の袖を捕へて聲を慄いせ(國)これくお前は半介かマア何とし  
て此姿ト云ふに民もハツとばかり顔さし覗けば思ひきや是ぞ此頃尋ね盡せし彼半介にて  
在しかば且驚ろき且悦こび懐かしさも亦彌増て(民)モシ貴公私くしは日外魚籃の菩提寺で  
れ目に觸つたお民で御座いまアお珍らしひサアく此方へ私しの家は直さ此處です先マア  
お寄くださいまし(國)ねへ半介何から云ふか積る話柄や相談も又聞たいこと云たいこと  
も、些とや少との事じやなしサア此方へ參つて呉れよ是やマア夢じや無からうかト云かけ  
て既や涙ぐみ引戻さる、袖袂を拂ひ難たる壯士も思はず臉を曇た、き(半)半介餘儀なき仔  
細あつて斯る姿と成り果しが圖らずも母上と且お民どのにさへ、面會したるは慚愧に堪ず

第十七回

...

三而目もなき次第なり然ればとて今更詮なしイザ御意も随がつて主人(お民を指)が宅にて萬  
六事を盡さん扱も意外な事なりしと云れて二人も夢の如く先に立つ、案内したるが駒吉も件  
の男を半介なりと聞とりて手の舞ひ足の踏途さへ知らぬばかりと打悦び存せぬ事とて今  
が今更で人足呼ばり失禮なりしと手を摺て詫ながら半介が今日何故立見坊の人足とまで零落せしかと之を疑  
て皆悦こふと大方ならず然ながら半介が今日何故立見坊の人足とまで零落せしかと之を疑  
がひ思ひ杯してお民は急ぎ與の間の小室を掃除させ此處ろに請じ入れて五八程よく居並  
つ、或ひは初對面の口上を演べ或ひは再會の悦びを演べ挨拶云々一巡するうち既駒吉が詠  
へにて勝手口の口上仕出屋の御膳籠の音聞けけるが手が不足ゆる筆を捨て作者も手傳酒肴を  
先次の間迄運び入たり

第十八回

離合違ふ時ある哉一別以來四年を経て今月今日親と子が圖らずも再會せし半助の先づ  
とど母の無事なる姿を見て不勝の歡び目を屢たゝ(半)思へば丁度四ヶ年以前半介平素  
の志願を遂んと彼小僧三吉へ托せし書翰の上を演たる如く日本六十餘州を經廻り武者修業  
いたさんとして御承知にも有つらんが拜領宗近の一刀と同じく路銀とを腰に着け君父に背戻  
て屋敷を立出で扱云々の處ろを廻り箇様くな事よ遇ひ途中に於て外木親子を助けたる事  
もあり又鹿兒島へ立越て是々の事有しなぞト先は有村がこと大石がこと彼日の試合進退の  
こと尙時勢の變動に依て歸東の事の急がる、より云々の奮發し汗馬を鞭うち四日として此  
地へ當着したる事より朋友へ書を寄て君父の摸様を訪ねたるに父上は物故され母上は發狂

七十三  
されて當時行方知れずと聞き刺さへ君公も御勘當を蒙りしかば、止ことを得ず芝濱を  
去り菩提所へも行たる處ろ圖らずも當家の主人お民主從に遇たる事など惚てお國が知らぬ  
件りを詳らかに演了り再たび言葉を改ためて斯て後民等に別れ奈にもして母上に巡り遇  
たてまつらんと以來手を代々品を替て種々苦慮奔走したれと遂に今日まで尋ね遇す然る  
も此頃或人(有村を云)と約束したる事に依り所存あつて斯の如く特と人夫の群に入り斯  
卑しき所業を働らさして爲て有んと欲し今日まで斯ていひしが時運來らず時運來りて右  
の企望は遂ねども母も再會の企望を遂しは幸福何事か之に如ん最悦こばしくト別後の始  
終つまびらかに次第を案さす物語るを熟々と開果たるお國は切りに歎息し私まは又云々に  
て屋敷に出て子に逢んと月日を重ね思ひを焦し東南西北徘徊するうち去年の秋圖らずも早  
稲田の吉と挑まれて箇様くの難義に逢ひ遂に彼を切倒せしが又云々の事よ依て既に殺さ  
れんと爲たりし處ろ爰に連なる駒吉とのが俠氣に因て助けられ尙民との主從が實義の介  
保今日まで無事月日を重ね來り折市々中各處を廻りて方其を尋ね暮したりしト是亦半介  
が知らぬ始末を落もなく語り開せて尙お民等も眞實なる扱かひの程を演たりしかば半介切  
りに感激してお民駒吉れ大等が恩を謝し義を賞し只管悦びを演る程にれ民駒吉之に當ら  
ず兩人言葉を打揃へて我々は又貴公様よ飛彈の親子が救はれたる昔の恩義よ報ゆる爲と、  
且は又別思ふ仔細も有ゆる聊さか母御の世話を爲たれと絶て恩に被る道理なしトの謙遜  
したる挨拶よ半介益々感心して臆て民駒吉等が献酒杯を取揚つ、是より一席の酒宴を開  
き主客とも愉快を盡し時移るまで、酒盛したるが暫時ありて勝手元より仕出屋の壯丁

三が徐々ど遣入來り私し只今お盛處にて半介様のお話しをツイ斯々と聞ましてお懐しさも堪  
 八へかね失禮と存じながらお目に懸へに出ましたト云れて半介お國さへハテ不審なト其男  
 の面を熟々打見やるは是を只今半介か言葉の中に云出たる先年屋敷を出奔せしとき親に手  
 紙を托せしと云ふ、(此事本傳一の上)に在り)酒屋の小僧三吉なるにぞ親子是はと驚ろきて  
 其恙なきを打悦びた民等へも引合せしおは皆々今日の不可思議なる奇遇の程は感歎して是  
 明より話柄を改ためつ、世の雑談に笑ひつ飲つ三吉は又酒屋を止て當時向ふ河岸の八百榮  
 治(是は其頃駒形に在り料理店なり)方よ奉公して暮し居よし右等の話しも打混て最賑やかに  
 酒盛酌し、眞夜中頃まで飲深しつ辛やく其日の事果たりとぞ

第十九回

俠重説吉田半介親子は不思議に再會の企望を遂て四年以來の積る話談に夜の深るをも知らぬ  
 客まで思ふ限りを語り盡し深更に及びて打臥たるが翌日は民を始め駒吉お大に國さへ共に  
 言葉打揃へて身の有着を求むるまで今日より當家よ寄寓すべしト只管止めて己ざるに予  
 半介も其意に任せ當分爰を宿所と定め厄介に成べしとて其日の夕方戸外へ出しが何處へか  
 傳匿し置けん彼宗近の一刀と衣服大小貯蓄金の餘手廻りの物までも悉とく持歸りた國が  
 爲め我身が爲し幾千の金を包みて食料と差出せしが民は之を手も觸らず、別に頼みた  
 き仔細も有るゆゑ此義は決して無用なりとて絶て承引氣色なきよぞ半介も争うひ難て其金  
 を受納め白米四五俵買來りて之を盛處へ積入させ先當分は此家に親子諸共寄寓したりと  
 其後國は人なき折に半介を打招きて、右の貯金を持ながら向には何ゆゑ斯までに零落を





常の行状を御覽も成ても浮て居るか浮氣で無かは分りませうよ無情人の氣強さよト膝に執着き身を慄はせ密に音ながら泣沈始末に半介しはく歎息し(半)然らば先頃俺へ對し頼みたい筋が有と度々やして我等親子を引拘て置れたの此戀情を遂るとての下念にて在たるか然と知ら母を連れて疾く當家を立去たよハテ脱つた事をした、ト云のも俺に於て決して前を嫌ふじや無が恩ある人よ不義の名を負せるのが術ないからよト云れて此方は岐と成り(民)成はせ私しが此通り執念くすしたゆゑ然思召もれ道理ですが其頼みの筋と云のは決して戀情の事ではなく外に願ひの在にて右は全体無理くも貴君と夫婦も成てならお話を致しませふと存じては居ましたか今のお言葉餘義ない事ゆゑ然ば只今申しませふが實は日外菩提寺で貴君よお目に懸つたせつお話を申上た通り私しの親父徳兵衛は人手に掛つて果ましたが私シヤ女子の墓なさま其仇敵さへ撃ことならず只駒吉が朝に晩に心に懸て仇敵奴を尋ねて暮て居まよゆゑ假令其奴の面体は知らぬにも爲ろ何か一度探し出て呉やうかと右を憑みよ今日日全で悔しひ月日を送つて居うち不思議な御縁で貴公方と斯した結親に成ましたは是ぞ親父が草葉の影から、お引合せ申したかと思へば嬉しさがたさに願ど貴公のお手を借り右仇敵奴を撃たいと存じて着は致したものの、奈に貴公がお強とて勝負は時の運とや命かけの事ですから並大體な御懇意では不容易御承知くだ被さいと存じた故よ何卒して無理にも夫婦の縁を結び右の企望を叶へたくと存じ升ての此願ひ左もなくは私し風情が、假令死ぬほと懸れても何して斯いふ厚かましひ失禮至極な思ひの丈を何で口に出されませふぞお察し成されて下さいましと始めて明せし所存の始終を語り盡して復更

第廿一回

重説お民が戀慕の仔細を熟々聞居たりし半介忽地聲を揚て堪ぬばかりに打笑ひ(半)よし右で心底みへた、然らば前前の企望に任せ人の見ぬ間に此場にてツイ交はりを結ぶこと固辭べきにあらぬと然しては世の中よ在ふれた野合と成り不義の汚名は脱れぬ事ゆゑ如斯く心中を苦しめて時代らしく口説に及ばず只公然に双方が其向々の人に話し表向相談して明々地に夫婦に成のが懸念がなくて宜しからふ、又俺の性來は頗る俠氣が有る質ゆゑ假令お前に頼まれ無でも徳兵衛どの、仇敵を撃ち恩返しを爲やうと思ひ心中に憑て居得よこれ前の心算が只管に右復讐の事はかりで懸は只これ着たりなら強がち夫婦に成すとぞも其復讐の存念は必らず遂させやす程に其邊を熟々考るゑ戀の一儀は止よといふ、最豁達なる言葉を聞きお民の彌く指寄て(民)眞は嬉しひ其お言葉親の仇敵を撃たいは勿論でムい升が元方其事ばかりなら斯した艶語は申しませぬ、願ぞ不便と思し召アノ片方の願ひの方も愜へて遣て下さひ升ト云かけて復伏俯折から何か二人が話談の容子を、立聞して居たりけん次の間の障子押あけて入來るお國と駒吉どが微笑顔して佇立む姿よお民は更なり半介さへハット驚ろき赤面して後護さよ差俯ぶき黙然として言葉なきをお國は熟々打見やりて(國)コレお民さん何事も此母親が承知だから安心なさいナサ駒吉さん(駒)然どもく目出度く實の先刻此二人が途中に於て姉御に失れ心配しひく歸つて見ると何か奥での密

四十四 々々ばなしハア心得ぬに内外より引別れて立聞すれば姉御が孝心半介様か石より堅い御挨拶何れも感心いたし升た、母上も私し奴も御座異存はしりませぬサア二人とも居直つて三々九度の祝儀だく(國)駒さんが云れる通り私しも願う處ろだから親の許した夫婦の祝儀サ、早ふ仕度しやト云れて民も半介も辛やく胸を撫下し頭を擧て双方が、トみれば奈に駒吉は衣紋竹を背に入れて肩を張しは上下の形状も似たる物なるか手に構はへしは長柄の火仲これに銚子も形りし異形の有形ろれのみならずおくよは又蛸足の汲物膳へ折鶴を打乗ながら捧けたるは是島臺の心なるべし、見れば思へば兩人が早速の打扮意外の仕方二人の驚ろき且呆れ且おかしさに堪り難けん果は四人が聲を合せて吐と失笑を笑ひ聲に何れも忽地調和して鼻じろみしも打忘れ是よりは駒吉が例の氣轉に瞬たく間もなく誠の銚子祝儀を携さへ出て推据られお民は今更ら恥かしく又嬉しさも彌増て轟く胸を鎮めもあへず身姿キリ、搔癢ろひ程よき處ろ居並ぶにぞ半介も今と成り不の字を云べき由もなく聽て献を祝盃を取揚て汲儀式の献酬既や事果るに至りしかば駒吉は幾干宛か包に爲たる祝儀の金を家内の男女へ與へ杯し婚姻の事を披露せしかば何れも事の急なりしは打驚ろきて祝詞を演へ急ぎ酒肴を調理しつ陽氣一途の酒宴を開き皆萬歳と祝したりまど、寔は意外の祝言成しが是偏に駒吉お國が物に慣たる扱ひと且願ひれは事よせて物堅き半介が心を和て斯ばかり最速やかに事を整のへ以てお民が企望を愜はせ愛に目出度納しとぞ

第二十二回

お民と婚姻の事了り此土問屋の主人と成しが半介生來寡慾にして些をたる利益を將ことなく其行跡遠なるよぞ家の内に浪風立す目出度月日を送り居たるが昨日まで此は恨し夕風も何か待てる、夏は来て當分も六月中旬と成つ是より先お民よりして父徳兵衛が横死の事と半介親子と縁を結び今は云々成し事なと總て本編三の上より昨今に至れるまでの始終の事の來歴明細を認ためて之を一通の手紙とし飛脚を仕立飛脚へ遣はし外木由衛門へ通信したるよ由衛門大ひは驚き先は徳兵衛が悔みを演べ次に我は又先頃中相場に罹り失敗して大損毛を致したゆゑ國元にも居悪ければ近日江戸へ逃ゆきて何か一商法相興し再び旗を揚んと思ふ且は親子が命の恩人半介殿へも再會して先年のお禮を演たければ傍々不日に出向いの節は宜しくトの返書にて有しかばお民は之を夫に示し且駒吉も由を告て專ばら外木の來るを待しと然るよ當時天下の形勢いよ、益々亂れ來りて強盜白晝に徘徊し四民安き心もなく戦々恐々の中に暮しけるが半介は奈にもして彼徳兵衛を殺せしと云ふ惡漢士を撃んと思へば其手掛を求めたさに遠近親疎の隔てなく若右の強盜押入り難義に遇もの有を聞けば其家々よ走れて賊を挫ぎ人を助け能恩恵を施したるよぞ人皆これを感服して尊敬すること大方ならず何か番場の親分と稱し又俠客士半と稱し小兒の慈母に懐くが如く衆人日毎に訪來りて門前市を爲に至り至盛を極めしかば此時よりして半介が豪名遠近に匿れなく天晴俠客の名を博したりと然るよ先月中夕して母親お國が中暑の氣味にて苟且に打臥たるよ、日敷を経れども枕わがらず此故に民姉弟お大等も心配して晝夜看病に手を盡し醫療等閑ならざれども病人は益々おしく昨日今日は衆多の醫師も既よじを投たるよぞ半

五十四





八十四 け冷笑ひ(吉)ハテ不尤もナ其お言葉仰せが聞て呆れらア、コウ半公よく聞よ己らも早稲田の吉と云ふ乞食仲間の悪漢じやア金箔附のれ阿兄さんだ、然な極つた云脱で左様ですかと口を閉ぢ指を合へて引込様な意氣地のねへのマ分が違はア、論より証據の一品は爰よムるト云もあへず目注すれば心得て仲間が投出す一本の番傘把て推開(吉)ろれ半公これを見ら此筆太に書てある「番場士徳十五番と七ツの大きな文字もあり加も血附の此番傘斯云立派な証據がある之を擔ひで其筋へ恐それ乍らと持出せば手間聞いらすは婿があく何と是でも知ねへと不知を切る氣か四百兩出のか否か出さねへか面を洗つて挨拶さつせへ

第二十四回

何だ半公返事を爲トの飽まで不敵な悪漢が強談か、りし言葉の端々、半介篤と聞取て遺恨の顔色すさまじく目眦さかづり對手の面を暫時く疾視詰たるが時も時どて情なく奥の方には母親が乱れ苦しき苦痛の聲の手も取る如く聞ゆるにぞ此惡黨を取挫ぐは鼠を撲より易けれと今荒立ては病人の障りに爲と必定ならんと思ふ心に我ど我憤怒を忍びて聲を和らげ(半)段々譯を聞てみれば無理でねへ其の因縁よし、半介承知した然し乍ら斯みへても交際の張る身上ゆるる四百兩との大金は今が今どて纏まり難る願を四五日待てくれト、云れて惡黨打笑ひ(吉)然たらふ、四百五百の金ならば何でもねへと只た今、方んでは見せたもの、然右から左りに出来くさくもねへ事だ然なら待て遣べいか(半)ろりや添じけねへ待てくれ(吉)待ては遣が四五日なんぞと、然延べられては待れねへ向でも明日の朝迄に借と揃へて上ますとの証文かくなら待て遣ふト云れて此方へ復更は無念當限りなけれと扱奈

ばかりの難題も親には代るものなしと思ひ決めて打點頭(半)よし、其も承知した少し待よト傍らの掛硯箱を引よせて証書一通スラ、認ため契印押して投出し(半)サア是て云ひ分あるめへ早々と持て歸んなせト云ひ放せとも尙動かず(吉)証文は貰つても字學は暗ひ己ッ達だ何が書て有やら分らず若目明に見て貰ひ役に立すと云ことなら直折返して遣て來せ、其歸りは此仲間と何ぞで一杯やる積りだコウ親分多分は入ねへ、手附を十兩渡しなせト益々圓に乗る福情なども大事の前の小事と思へば半介委細目を睡りて帳場の筆筒推あけつ、金十兩取出し紙に包んで投出すを拾ひ取て舌をうち(吉)今日は何もの乞食と違ひ御客様だ失禮するなト云すて金と証文と唐傘とを一ツに纏て携さへながら立起り(吉)然なら半公おしたの明きつと不の字は云めへせ(半)己も男だ安心しろ(吉)ハテ証文を取たからハアノ阿母が死んでも活ても(半)チ、然では何も歎も(吉)知て巧んで來んやねへよドレお歸りに成ふかト云放しつ、四下を見廻し悠々として立出れば仲間の者其前後は隨がひ打連達て戸外へ立出ドツト笑ひつ山雲の行方知れず成亡たりとぞ跡み送りて半介は一息はつと呼もあへず奥へ入んと爲とてころへお民を初め駒吉等も遠て驚ろき出來りつ、最前より奥に居て彼惡漢が云處ろを一々聞取り無念に堪ねば、立出て斯と思ひたれど前の心中を圖りかねて特と忍びて居りしが此跡の治まりの附方いかにと心配する半介はかす推止め先何事も我胸に納めておれば苦勞を爲な其よりも母上の容休いかよと立上りて出入の葎戸を推開たる、折しもあれ旅仕度せし男と女が小腰を屈て入來りしが不圖半介と面を見合せ互ひに吃驚聲かけて(男女)モシ、貴公は半介様か由衛門てムります、娘のお七でムります

す(半)ナ、其々よく來つしつたサア、早く上りなされト云ふにお民駒吉お大も遽た  
いしく振かへり共下面を合すれども叔姪従弟同士ながら尙初對面の事なれば驚ろき悦び  
出迎へて一人くは名告つ答へつ先は二人の足を洗はせ懸へ懸へ誘ひ入しが此事彼事  
一時に起りて且れ國さへ危きよ家内の混雜一方ならず最騒がまぐ予見へたりける

第二十五回

お國の疾病け危篤に迫り悪告吉は悪談を働らき外木親子が尋ね來しなを彼と云ひ是と云ひ  
事皆一時に集りて歡悲交々分よしなきにぞれ民駒吉お大等は彼方此方と氣を揉て居座る間  
もなきばかり立働らきて居たりしが暫時して辛やく座に着き外木親子を饗應ながら先は徳  
兵衛が狂死を始め其より以來の十一又今日の云々まで語りつ聞つ二時三時或ひは歎き  
或ひは悦び思はずも時を移す幸はひれ國は持返しけん暫時苦痛を忘れたりとて右の話  
之の轉末を聞とは無聞よりて悪告吉が云々を知り憤怒りに堪ざるにぞ思はず重き枕をわ  
けて密か物と思ひ居たるよ半介疾く之を察し彌々愛ひに沈めども然り氣なき体に見せ先  
改ためて由兵衛親子が遠々との來江を勞ひ且圖らず云々にて當家の入婿と成たる事など縁  
切に物語りて以來の親を結びしかば由衛門親子は又、席を隔て、平伏しつ先年飛彈の春  
渡にて大恩を受たる事など彼最委かに云出つ、且其恩義を感謝して感涙を止め難たりしか  
半介これ制し止め期親類と成たる以上は他人がまじき禮には及ばず先く充分くつろ  
ぎて休息たまへと思さむるにぞ親子の益く感激して尙お國が疾病をいたみ種々の話しに  
果しなれば駒吉ひそかに焦燈で半介の袂を引き次の間に呼出しつ吉が事を云出て(駒)先

程彼奴が参つたとき俺ちは直よも飛出て打つて遣ふと思つたが阿母さんが驚ろくだらうと  
辛抱して居た残念さ然は爾と阿兄の心じや跡を何する積りぶか案じられて堪らねト云に  
半介太息つ(半)己とても同じことで若阿母が病氣でなければ彼奴を撮んで戸外へ釣出し  
淺草川へと思つたが事の當惑爲方なさに臍の緒切て初めての辛さ悔しさ残念さをワツと堪  
へて返したが只不審なはアノ唐傘とふして彼奴が手に在たか前覺へはなかつたかト問れ  
て駒吉小膝を前め(駒)彼唐傘は泊外も前さん話した通り俺ちが音初の護國寺前で阿母  
さんを救つたとき乞食をも打つた傘だが其時忘れて落ちて來たのを彼奴等が拾ひ取り犬  
か猫かの血を着て持て來たに違ひないト云ふに半介點頭て(半)それで判然事が分つた元よ  
り去年の事と云ひ殊には傘の油紙が其夜の雨の烈しき中で血を吸て居た道理もなく且彼傘  
を取れて居たとして論じ破れば破れる事だが昨今幕府の政道も亂れ果たる乱世なれば若彼奴  
等が出訴に依り公事を起すに到つたら黒白疾く掃あかず萬一ツも病人まで白洲へ擔ぎ出  
された日には彼容体の苦しき加減多分半時保まいし仮さなく共已丈は入牢されるに違ひな  
し然えた日は阿母が苦に爲て死んで終をうかど右を思ひ左を惟ひ先阿母が死亡なるまで  
悪ひ耳を聞せまいと當座の分別餘儀なさ當は無れと大金をツイ明日の朝までと約束を爲  
て返したが既に三百四百と云は一方ならぬ金高ゆゑ有繋の已も常識した何しろ急場の事  
だからト云かけて歎息するに予共は齒を切駒吉も實にもどばかり思へども是れとて別よ  
詮方なさに肩托極まり太息つ奈は爲んど打案したる折から後の後戸を推わけ甚はだ卒事  
千萬ながら其四百兩は私しが間違いたして差上ませふと云ふ聲聞つけ此方の兩人ハツと驚

五さ振り廻れば是乃はち由衛門にて會釋しながら駒吉が座したる傍よ居直りたるゆゑ那魔に成ふと氣を利せ作者も早速筆を擔ぎて次號の座敷へ退ぞき入たり

第二十六回

時ときに由衛門よゑもん四下よしたを見ながら右と左に手を組くみて屈くつしたる半介はんけいと駒吉こまきちとを打うちみやり(由)實じつは只今ただいまお民たみより今日けふも迫せまつた御難儀ごがたがひの一伍いちご一什いちじを聞きました(由)失禮しつれいながら半介はんけいとのには其吉そのきちと云いふ惡漢あくだんの所望しよぼうの金の四百兩かねのよひゃくりやうに差支さしつかひの趣おもひなるがナニ(由)金錢きんせん廻まわり持もつてゐる事ことなさるに及およばぬこと御心配ごしんぱいなさひ升あげな幸さいはひ私わたしに下谷邊しもやへの金かねの出來きる計けい策さくを工く風ふうしたゆゑ折角せつかくの御深切ごしんせき忝かたじけなくは存ぞんじ升あげが半介はんけい胸中むねちゆう所存しよせんあつて此難題このがたがひを打破た破はる計けい策さくを工く風ふうしたゆゑ決けつして御心配ごしんぱい御無用ごむいようなり其その許ゆるは長途ながとの疲つかれ無なしならん先まづ午睡ごんすいでもなされ升あげて餘あま々あま休やす息やすいたされよ病人びやうじんもわり取と返かへはありお摺すり應おも心こゝろに任まかす(由)暫時しばらく御用ごいよう捨すりたしと思おもひ入いて挨拶あいさつしたる其顔そのかほシロと由衛門よゑもん打見うちみやりつゝ何事なにごとか忽たち地心ちしんに熱頭ねつとうけん阿々あゝと打ち笑わらひ(由)イヤ(由)其邊そのへは御掛念ごかへんあるな差さあつてのね困こり(由)存ぞんじ、右様みさまに申しましたが外ほかは御所存ごしよせんある事ことなら復またた御相談ごさうだん申ませふ然しかし成なるたけ穩當うんたうに事ことを濟すむが肝心かんじんゆゑ熱々ねつねつ御配慮ごはいりよなされ升あげト云いひすて立て次つぎの間の葎戸わらどを開ひらければ娘むすめのれ七しち、同じ心こゝろに立聞たつきしけん憂うれひを舍すし顔色かほいろにて佇立たつたて居ゐたりしかば由衛門よゑもんは目めで知しらせ之これを伴ともなひ二間にばかり隔へたりし與あへ行いくこれ民たみは始終しじゆうお國くにの傍そばへ着切きゝ爲なして勤こはり居ゐたる看かん病びやう疲つかれに思おもはずも、ウ(由)ト(由)居ゐる居ゐたるにぞ然しからばとて由衛門よゑもん、お七おしちを勝かなひ密ひそびやかに戸外とがいへ立ち出でて橋はしを渡わたり親おやの方かた

へと走り去さつ、或ある小料理屋こざうりやへ打登うちのぼりて娘むすめを引ひよせ聲こゑを密ひそめ(由)扱まはや不思議ふしぎな災難さいなんで大恩たいおん受うけた半介はんけい殿だんの母御ははごの上に昨日けふ今日けふ降ふりか、つた大變事たいへんじ始はじめの仔細しじゆはお民たみ方かた大方たいほう開ひらたて有あるれど斯かいふ時ときこそ心配しんぱいして何なにと一いつツ工風くふうを廻まわら(由)先年せんねん受うけた大恩たいおんに報はひにやならぬ譯わけなれど何なにしろ明日あしたの朝あさまで急場いそばに迫せまつた騒動さわどうゆゑ疾はやく爲なりや半介はんけい殿だんも阿母あははさん(由)番場ばんばへ捕とられ不圖ふと事に成ならふも知しれず何なにと其方そのかたが考かんがへて甘あまい工風くふうは有あるまいかと尋たずねられて此方こゝは點頭てんとう七しち實じつは私わたしも先刻せんこくよから半介はんけい様さまと駒こまさんとの内緒ないしょ話わしが氣きよ成なるゑお民たみさんが眠ねつた間に葎戸わらどの隙ひまに匿かくれて居ゐて話わしの様子ようすを聞きた處ところ奈なにも切迫きつぱく詰つつた鹽梅しんばいハテ困こつた事ことで有あると、心配しんぱいは爲なしましたもの、別べつに爲方いかたが無なからしてト云いかけて歎なげ息いきつさ(由)お前は怒おこるか知しらないが今いまぞ昔日せきじつの恩返おんかへし何なにぞ私わたしの身みを賣うて幾等いくとうでもお金を拵しらへ其吉そのきちと云いふ惡漢あくだん渡わたして遣やたら濟すふかど考かんがへは着つたもの、又またお前の心こゝろも有あるから云いふに居ゐたが喃父なんふさん、私わたししや何なになに苦勞くろうしても半介はんけい様さまのれ馬うまなら些ちども厭いとひは爲なしませんよ全体ぜんたい去年こぞ春渡はるわたで死しんだと思おもへば何なにでもないがお前は何なにと思おもひなさるト云いつ、ハツと報あらむ目元めもとよ涙なみだを浮うけて俯うつ伏ふたる傳でんもぞ我子わがこながらも殊勝しよせうと心中しんちゆうを由衛門よゑもん感心かんしんして漣なみだなす涙なみだをハラ(由)落おし(由)チ、お七おしちや能よく云いた能よマ(由)云いつて呉くれたナ(由)實じつは已いも然しから思おもつたで、最前さいぜん半介はんけい様さまに向むかひ金の事ことを云い出いたら中ちゆう々ちゆう承知じやうちされなんだが其時そのときの顔色かほいろはア(由)吉きちと云いつてハツと切きつて臭くへ物ものに蓋かたを爲なる所存しよせんで有あると洞察どうさつた程ほどに是こゝや大變たいへんと思おもつたけれど怒おこし其場そのばで異見いけんを爲なすより實じつに昔日せきじつの恩返おんかへし其方そのかたが身みを賣うてなりと爰こゝは一番氣張いちばんきぢやうねば恩おんを知らない道理だうりだから其相談そのさうだんと爲なすやうと思おもひお主おぬしを爰こゝで運出うんしゅつしたのだ何なにで俺おれが怒おこらふぞへ然しから願ねがひぞ然しかして呉くれる其中そのちゆう石いしよ齧か着かても已いや其そのだけの

五十金を調のへ受出に行ほどと些どの間だと歸らめて願ぞ辛抱して呉れや但し此事はッかりは  
四十金何いふ場合があつても各開がましく聞ゆるから半介様、知らしちや成ぬだ極内々で爲  
て呉ろト云も涙のオロ／＼聲よ尽しもあへず襖、伏し娘が背中に折重なりつ、聲を立じと  
手拭を毟切ばかり嘘しめつ前後生体なく伏たるは道理せめてぞ惘然なりける

第二十七回

明 哀ありて由衛門は娘の背中を擦りながら涙片手は聲を感らせ(由)然ならぬ七思返しに身を  
賣て半介様の難儀を救つて上る氣か扱々出来た感心した、とは云もの、遠方を遙々當地  
治 へ来たばかりで芝居一幕みせなひうち女郎は爲とは何たる事だ己や術ないぞト云かけて切  
俠 り胸を打叩き打叩きつ泣沈むは覺悟は爲てもお七とて山家うだちの處女なり豫て聞つ  
る川竹の髪飾しげき遊女が勤めする夜の苦しきは奈ばかりぞと思ふさへ胸に針さすばかり  
客 なれど是は覺悟の上なれば元より辭む可にあらねど此身が居すば明日より誰を便りに老父  
が毎日毎夜を送るかと思ひ思へば堪り難て絶入ばかり泣入りたるが折しもわれ元は元は  
傳 として告わたる辨天山の鐘の音に流石永かる夏の日も既入相となりたるよぞ二人は吃驚儀  
容を改め(七)ナア父さん其歎きは私しとて同なじだが泣たからとて爲方がないモウ日が暮  
る急なさい疾く爲やうト急立りて由衛門は氣を取直し(由)眞に然らぬ遅くなるサア  
疾く出掛やうツイ見苦しふない様に仕度と爲やト云ながら涙かくして勘定も粗忽／＼濟せ  
遅たいしく茶屋の戸外へ立出しが由衛門は若き時より京大坂長崎はじめ民等が生れぬ頃  
には江戸にも来りし事あるよぞ斯る筋さへ心得居りしか急ぎ吉原の廓内へ行て惣て人に

を願はず何か由の有とみへ佐野橋へと進み入りて主人辰之助に面會しつ体よく始終を繕る  
ひて身賣の一儀を相談し且四百兩は出せまいが或云々の難儀が起り義理と恩とに絆まれて  
餘蘊なき次第ある譯ゆゑ無理で有ふが右金高を是非とも借たき趣むきなど恣やか／＼頼みし  
かば辰之助も憐れに思ひ殊ははれ七の面を見るに色白く目下すいしく豊下なる色顔よて愛  
敬こぼる、容貌なるゆゑ女郎などには念合なれば即座に承知の旨を答へて且懇切に細子を  
覆應し証書其他の約束まで残る方なへ整のへ了り懸て四百兩渡せしかばお七の悦び大方  
ならず由衛門も勇み立て然らば疾く此金を持歸つて用立んと別を告げど主人は引どめ左も  
あらずがモウ一盃とて献る、酒盃いのみかね且はお七が今さら離れ難たる親の袖を引れ  
て此方も離れがたく不圖取交す酒盃の敷をひ来れば自から哀別離苦も忘る、ばかり四十二  
分熱酔せしかば夏の夜疾く深たりけん大引つぐる柏子本に由衛門熟るまで立歸らんと爲る  
客 はとに主人は再び推止め大金を所持しながら老人の夜道は危うし枉て今夜は一泊され明朝  
早く歸れと云を容易に聞ぬ老人堅氣れ七が圓へ立たる間、何分頼むと云もわへす心利し  
傳 て遽たしく戸外の方へと走り出しが忽地廟内を出離れつ、足に任せて一散に今や田町を  
後にしつ馬道さして急ぐ折から何を遠て、来りけん頼被りせし一人の男が走違ひさ由衛  
門へ勢はひ込で突當りしかば由衛門暫時堪らず後へ襖たり倒れたるを伴んの男は見向も  
爲すして一層烈しく走出つ、北へ向つて走ると見る間、忽然として見へすなりたり

第二十八回

五十五 昔日香渡しの厄難に親子諸共死とべかりしを人の情に救はれたる恩義は今を仇となり我子



五を賣て身の代の四百兩を懐中し夜を深しつ、吉原より本所さしてトボくど歸り來れる由  
八十五 衛門は真馬道の中程まで來掛る向ふに人ありて射矢の如く走り來り行違ひさま突當りか  
ば、然なきだに、足元弱き老人の不意を撲れて堪るべき忽地とつさり仰むけに尻餅搦て倒  
れたるが幸ふじて起わがり既行過し男の影を見後りながら舌打ならし(由)思まじし野郎だ  
なア、人を倒して何とも云ずにも走散て行たさうなヤレく衣服も泥だらけ腰も大分痛  
めたわい馬鹿く(い)目も遇た事よト云かけて裾に着たる座を拂ひ腰を擦り亂れし衣紋を  
繕ひながら不圖心づき懐中の金を探るに悲しむ哉財布の紐の散切たるが僅かに襟に還り  
しのみ金のかの字もなき爲休くに、由衛門手足かた(い)息吹計り仰天して「サア(い)く  
く大變く扱は今の野郎奴は盗て遣れたか是りや何だ、尙其邊に居やうも知れぬ追かけ  
然ふだト一生懸命血走る眼を配り(い)て元來(い)方へ一散ばしり見れども仇の影さへなし  
「然ぢやア後かト引返(い)右かト走り(い)左りかト、行つ戻りつチロく(い)と血涙に曇る目を見  
張あしを飛して四衢八街走徂りては走徂り狂氣の如く尋ねれども何れへ行しか曲者の影も  
形跡もなかりけるよぞ由衛門アツトばかり氣力も腰も脱はて、落胆したる無量の失望「エ  
傳、是りやまア何とべい大事ども大切ども云云云れぬ彼金を、然しやア彼奴は櫻奴で有たか  
不注意事を爲て退た奈に何でも娘よさへ云れぬ不覺こりや何せよ是りや何せよト我を忘れ  
大地へ倒れ大聲あげ泣つ口説つ點々なる齒を切しばりて眞暫時く消入るばかりに歎きたる  
が再び(い)借(い)氣を取直し「ア、我ながら愚痴で有た知れぬとて分らぬとて此儘に爲て置る  
べし假令千草の根を分ても今の悪奴を探し出しアノ四百兩取返さずは生て居られぬ今夜の

難題かなはぬ迄もモウ一度さかして見やうと身を押し街走出す千鳥わしに喘ぎ(い)て心  
ての聖天町の邊(い)指(い)て密索なげにも退行たりしは實淺ましくも苦々しく惘れ慕なき始末な  
りける、此時淺草の鐘間近く聞えて夜は寅の時と成にけるが、折しもわれ程ちかき吾妻橋  
の傍はらより現はれ出たる早稲田の吉が四下さよろ(い)見廻しながら眉を擧めて首を傾ふ  
け「昨日半介の野郎奴が明日の朝まで四百兩拵へて遣と云したか何だか迂參に思つたから  
仲間の奴を密ばせて駕くり容子を聞いた處ろ思ひ懸ね(い)加役が這入彼野郎の親類とか飛  
彈から出て來た老爺奴が右の一義に口を入れ懸て娘を連出たは義理とか恩とか云ふ事で、  
治、アツキリ彼を賣(い)か(い)四百兩拵へるわへど附(い)狼(い)は外れるか當るか一番こ、に居て右の老  
俠、爺を捕(い)て(い)め、試(い)して見(い)やうと宵(い)から今(い)まで、待(い)て(い)待(い)明(い)したか何(い)し(い)や(い)が(い)つ(い)た(い)か(い)未(い)だ(い)よ  
歸(い)らず(い)大(い)分(い)腹(い)が(い)空(い)て(い)來(い)た(い)夜(い)鷹(い)ろ(い)ば(い)でも(い)食(い)べ(い)い(い)か(い)ト(い)飽(い)ま(い)で(い)不(い)良(い)の(い)胸(い)中(い)を(い)獨(い)り(い)言(い)して(い)油(い)断(い)なく  
客、伸(い)つ(い)屈(い)み(い)つ(い)ソ(い)ッ(い)リ(い)進(い)み(い)出(い)たる(い)後(い)より(い)復(い)來(い)掛(い)り(い)し(い)一(い)人(い)の(い)男(い)が(い)行(い)過(い)ん(い)ど(い)爲(い)て(い)振(い)返(い)り(い)不(い)圖(い)見  
合(い)す(い)互(い)ひ(い)の(い)面(い)体(い)、暗(い)には(い)あ(い)れ(い)と(い)件(い)の(い)男(い)は(い)疾(い)く(い)も(い)然(い)と(い)行(い)途(い)を(い)遮(い)ぎ(い)り(い)「(い)わ(い)り(い)や(い)昨(い)日(い)來(い)た(い)早(い)稻(い)田  
傳、の(い)吉(い)だ(い)な(い)吉(い)オ、(い)れ(い)前(い)半(い)介(い)さ(い)な(い)半(い)ハ(い)ア(い)宜(い)處(い)ろ(い)で(い)出(い)く(い)わ(い)した(い)吉(い)ナ(い)ニ(い)が(い)何(い)だ(い)と(い)氣(い)色(い)ば(い)み  
双方(い)疾(い)く(い)見(い)搦(い)して(い)疾(い)視(い)合(い)つ(い)、ソ(い)リ(い)く(い)と(い)暫(い)時(い)呼(い)吸(い)を(い)搦(い)り(い)たる(い)は(い)事(い)あり(い)氣(い)に(い)ぞ(い)見(い)へ(い)たり(い)ける

第二十九回

十五 當下吉田半介は敵を遮り大手を廣げて憤怒の音聲凄まじく(半)汝れ悪黨吉野郎よい處で  
出遇たナ昨日くれ(い)約束した金を渡すぞ慎しんで頂戴しろと云せも果す此方も懐中搦探  
りて取出したる令口の短刀ヌラリと抜放し逆手に把て冷笑ひ(吉)汝が渡すと云ふ金は大方

腰の延金だらふ其金ならば此方から渡して遣ふト罵しり返り走り廻つて突んど爲と半介騒  
 がす身を聞き復突堪るを引外し(半)小癩な腕立奇怪至極實の處は汝が爲と家内の混雜母よ  
 開え疾病に障つて墓なくも宵に往生して仕舞たぞ、サア其恨みは汝に在り假令千尋の海の  
 底、八重九重の雲の内ニ匿れ密んで居くさるゝも是非尋ねて復讐の志念を遂んど思ふ處ろ  
 幸は今朝來約束なれば家待より此邊で迎ひに出來た流車に向ひ斧を振ふも蠟燭が自  
 滅を招く今日只今是然し乍ら自業自得だ、イザ其首を根引よして思ひ知らさん覺悟しろト  
 云も了らず大手を開き手捕よせんと飛越るゝ此方も疾く飛退て(吉)生粹ぬかすな一文野郎  
 たうらうらでも提灯でも汝等が手に乗る兄貴じやねへ、ドレ芋貫よ爲て呉やうト云かけ刀を  
 把直し無二無三に突て掛れど此方は柄に手も掛ず烈しく突出す白刃の下を掻潜りては引外  
 し引外しては遣違はせ閉つ開きつ平生の爰よ本事を現はしたるよぞ、兎暴無比忠黨も斯待  
 らはれて夢中の如く身体疲れ呼吸せはしく既敵はじと思ひしかば隙を掃り足を飛して颯風  
 の如く逃出をを半介は信と見て「汝れト云さま飛鳥の勢ひ我も連ひて十歩を百歩、切迫烈  
 しく追かけるに吉は今さら突迫しけん吾妻橋を打渡りて向島へと逃行つ、復氣を轉じて土  
 手の上より河へ飛入んとする處ろを半介疾く追迫り跳り越つて襟頭を無手と掴み引戻し(半)  
 半)サア蛆虫奴これ迄だイテ往生させて呉る觀念しろト罵しりながら敵の短刀櫻把て左手  
 よよわけ胸元を二太刀三太刀刺貫くゝ吉は苦痛の聲張わけ七轉八回苦しき悶搔を半介丹を  
 取直して細首ツツと切落せしが尙憤怒り堪ざりけん其面の皮を引剥て血淋漓たる生首を  
 櫻の枝よ鼻首つ、「ハア直姿なト打嗤ひ馳て死骸の懐中より昨日與へま我証書を探出し

て引割すて足を飛して河中へ軀をザンブリ蹴落しながら手足の血斑を推拭ひ袖打拂つて悠  
 やど番場の方へ歸り行しは心地快氣にぞ見へたりける(吉)後談此下(無)切此處より例に  
 依り暫時筆を上へ復して土屋一家が難義に陥たる其事柄の起因を始め前段吾妻橋に於て早  
 稻田の吉と半介とが圖らさも出遇たる始終の事實を記さんと吉こと先年早稻田に於て半介  
 が母れ國を挑み却て其身縦横に切れたるが、悪陣強き山者なりけん斯て後負傷の爲よ破傷  
 風よて煩たれども同類の補助よ依て九死の内に一生存得、苦惱をること半年ばかり遂よ全  
 身の疵いぬ果しかば、彼悦ぶ事大方ならず卒然ばお國を尋ね右の遺恨を報ひんと云よ(次  
 回へ讀つやく)

幸ひに彼時護國寺前にて駒吉と格闘遊たる奴等が、朽惜さよ引返して小蔭に匿れ容子を聞  
 しに件んの女はれ魂なること又今かれを介保して興に乗連行たるは番場の土屋駒吉なるこ  
 と並びに彼等が素生の事まで惣て聞取えのみならず其折駒吉が忘れたる例の証據の番傘さ  
 へ拾ひ取て携へ歸り事の始終を告聞せしかば吉殊の外打悦びて手下を番場へ遣はして土屋  
 が家内の爲体くを大小となく探らせたるに半介が勢ひ烈しく容易に手出されしと云ふ注進  
 にて有しかば無念ながら月日を過し空しく斯て暮せし處ろ一時手下が走り歸りて土屋の  
 お國大病よ依り家内の混雜云々なりと息も呼わへぬ注進を聞き吉さらば此時なりとて乃は  
 ち前回に説たる如く手下を引率れ土屋へ推かけ其弱り目に附込で殿しく強談かけたるのち  
 一十六 遂に半介が証書を取り一晝夜の猶豫を與へ暫時土屋を立去たれど狐疑ふかき曲者なれば密



かゝる狗兒を遺し置て以後の容子を探らせたるは圖らずも外木親子が尋ね來りて恩義に迫り  
 身賣の一條斯々なりとの趣きを聞て復悦び然らば右の由衛門が吉原より歸るを待たけ其  
 金を横取して先前祝ひの酒を飲み剩さへ半介より約定通り強求て二重に取んと計畫つ、  
 吾妻橋の袂に匿れて由衛門を待受たるに然甘くは問屋で卸さず思運爰も尽たりけん察明ら  
 かり頃又まで待人は來らずして思ひ掛なき半介も遇ひ還り前回の始末に及びしなりとぞ是  
 本傳七の上より事爰に到りし迄の始終の段取なりと云ふ(吉が素性は詳しかならず)然れ  
 ば又吉田半介は、早稲田の吉に迫られて殊のほか當惑したるが其夕母のお國は遂に言切れ  
 果たるにぞ半介無量の悲しみ爲たれど又一層の憤怒を起し是と云も悪黨吉奴が由なき事を  
 云募りて病人の氣を痛めさせ死を急がせたる次第なれば彼奴疾ても尙餘りあり若明日の朝  
 來りしと爰に在て待受ては何かの始末われば途中に埋伏打て棄て一ツは母の爲に報  
 ひ一ツは家の災害を除き此熱腸を冷すべしと腹の内に分別せしかば駒吉を小陰に招きて右  
 の所存を耳語つげ且母を納棺の事と其餘の始末を頼み置て彼宗近の一刀を横佩人に知らせ  
 ず密ひやかに裏口より走出つ、仇の來れる順路なればと吾妻橋の袂に潜みて今かくと待  
 處ろへ圖らずも一人の男が四下の家の路次口より何かゴト／＼囁やさながら立出たる姿を  
 見て若やと思ひ進み寄り見れば幸はひ吉なるよぞ半介は海母の骨か盲龜の浮木を得たるが  
 如く悦び勇み且憤りて乃はち前回述べたる如く遂に彼を取捕ぎ且餘類どもも知らざると  
 思ひ其首を切り面を割て以て向島の土手へ擲し辛やく無念を晴せしなりとぞ泉半介が吉を  
 察たる始終の來歴なりと云ふ(由衛門の金を奪ひて櫻奴の事は尙後の回りに説べし)是より

先き駒吉は甲斐／＼しく立働らさてお民お大等と力を協せね國の亡骸と區に納めて葬式の  
 仕度を整のへ専ら半介が歸るを待して其明近く成し頃を以半介は歸り來りて駒吉に由と  
 告げ且始めて民も右の始終を語り聞すにお民の流石女氣の若後難ても有はせぬかと半  
 分は怖れ中分は悦び手疾く浴衣を取來りて其血染の衣服と更させ惣ての用心脱目なく彼  
 明の是の世話を爲て只管今夜の始末を治め辛やく一息つく折から鳥の聲と諸どもに夜餘  
 波なく明たりける

第三十一回

時半介歎息して徐々よ母の柩に向ひ吉を撃たる始終の回を涙と共に演述して念佛の時を  
 移したるが暫時して駒吉よ向ひ(半)モシ悪黨の餘類どもが吉の殺されたるを知り押掛來た  
 らば面倒ゆる煩らひの無うちよ母の死骸を一時も疾く埋葬して後を安くし且昨日より見へ  
 ず成たる由衛門殿親子とも急ぎ葬索をせしト云にぞ駒吉お民も然るべしとて遂に當日の朝  
 未明の儀式爲端質素にして川心の爲め駒吉は還り半介獨り柩を附従ひ香花院へと葬じりた  
 るが何か近邊の者これを知りて彼駒形の三吉はじめ日來難義を救はれたる衆方の人々會葬  
 して思はず賑はひたりしと云ふ去程半介は葬儀を果し諸人を勞らしひ馳て番場へ歸り來り  
 つ扱是より一室に於て駒吉れ民其餘の者等と由衛門親子の事を彼是と云出し種々思案を廻  
 らせども彼等何れへ行たるか露ほども手掛りなきゆへ怪しき事の限りなりとて只管談考す  
 るもの、思ひ得る事なかりしが良かりて民は考(民)私しが思ふ處ろではモシ伯父さん  
 三十六が心配して昨夜の難義を救はふと思ひ、萬一ツもお七をば、芳原へでも賣にゆき右や左

六の相談で歸らない譯では無か是より外は二人が二人、共に見えなくなると云ふ道理はな  
 いと思ひ升がト云ふ半介横手を拍(半)成ほと其違ひなからふ然らば廊内を一巡して探し  
 て来やうト云ふのへす立んと爲を駒吉が「兄貴は定めて疲れたらふから俺が行ふト推止め  
 手疾く仕度を整へつ、吉原さして急ぎ行しが彼由衛門とれ七とは始めよりして名問を厭  
 ひ身賣の一義を半介等一知らさそと約束し且樓主辰之助へも右の情實を合ませれば駒吉  
 が各樓と打巡りて尋ねたれども遂に之を探り得ずして徒づらに歸り來り尋ね得たさ由を  
 話すよ半介民れ大等も之を聞いて大ひよ愛ひ扱は品川新宿邊かど復備宿へ人を走らせ種々  
 に手を盡して久しく成まで監禁したるが遂に尋ね得ざりしかば各自心痛大方ならぬと餘備  
 なくも其儘さし措き月日を過し居たりと云ふ(爰より話元は復る)爰に父、外木由衛門の  
 金を奪ひて忽地影を匿したる彼曲者を尋ねるは是乃はち別人ならず例の飛彈の金太なるが  
 金太先年喬渡しにて外木親子を殺さんと爲しとき、圖らずも半介が爲に、千尋の谷へ切落  
 されしが之も亦た吉の如く悪運強き曲者なりけん落たる時に谿河の水のうへよ受られたる  
 よぞ、暫時の中こそ沈みたれ幸はひにして身を傷らねば難て下流より還上りしが右の腕と  
 亡ないたるゆゑ其苦痛堪がたく再び仇する氣力なくして同親の家へ歸れれ免も角も養生  
 するうち腕の疵は癒たりけるが斯て後いかなる事より奈なる筋にて出來りしか其間だの事  
 曆詳びらかならぬと、彼いつか江戸へ來り暫時惡徒の群に入りて櫻の奇術を學たるが彼不思  
 議より片腕よて其術に長じたること古今例少なさまでに天晴櫻の達者と成り毎日毎夜に市  
 中を廻り多分の物を櫻來りて驕者淫樂恣ま、に其日々を送り居り斯て彼夜圖らずも櫻

草の馬道にて由衛門とは知らざりしが懐中重き老人を突倒し財布を奪ひ忽地影を匿せし處  
 ろ財布の目方異常ならぬげ心密かに驚き悦び今戸橋まで逃來りて爰に暫時息を休め後ろを  
 遙かに見渡せども追來るもの無りしかば、財布の金を取出し之を橋の欄干へ並て一ツ／＼  
 に算居たるに折から近所の飼狗が怪しき奴と思ひけん何か後よ密に寄て一聲高く突然に  
 吠か、られて吃驚仰大ハツと、思ひつ思はずも今積立たる金包を九ツ七ツばら／＼と河の  
 中へ落し込み意外の周章これとはばかり打呆れつ、立たる儘に茫然として河面を暫時なが  
 め居たりと云ふ

第三十二回

俠 惡銭元來身に着ず得失早覺因縁あり爲んぞ不具の兇徒が斯る切なる資錢を盗み暫時こそ我  
 物顔に悦びしすれ樂しみもすれ始終これに據て利を得の道理あるべき淺ましむ哉飛彈の  
 客 金太は其身年來の業よ因て不具癡人の身、成ながら尙天罰を思ふ事なく實由衛門親子が  
 爲まは血け出る如き難義、金を無造作に奪ひ來り之を今戸橋 欄干へ打のり且算え且悦こ  
 傳 びし、樂しみ未だ半ならず忽地犬の一聲よ驚ろかされて思はずも積疊ねたる金包を河の中  
 へ取落してハツと思へど方なさは尙吠かゝる犬を逐退け僅かよ還りし金を納めて尻を高く  
 々ど端折ながら右の河原に下立つ、玲暗き水の内を其邊か此邊かと探れども一包をも得  
 ことなきよ此河元より滾くして且引汐の扱なるに奈よ爲つると思ひかねて只管あせり求  
 五 六 みる折から忽地後より人ありて「其金は是であらふ欲くば來れト云ふ聲き、金太驚ろき櫻  
 五 六 眼瞠に定めて河霧の間なき彼方を打みやれば四五間も有らんと覺しき蓬船の内は武士あ

りて今我落せし金包を拾ひ取り片手一捧げ見せびらかせて佇立み居よぞ金太再び打驚ろ  
 (金) 是は何處の旦那様か有かたふんひます其金は只今俺が橋の上から落した物です願ぞ  
 お渡し下さい升ト云掛るを彼方は打消(武士) それ元より云までもなしイザ渡して遣はす  
 程船中で参れ水は浸ひト云れて何やと氣味悪けれ此方も元より然る者なれば氣を屬ま  
 して命釋(つ) (金) イ畏まり升た左様ならば御免なせト挨拶ろこく一二間水を涉りて  
 進み寄つ、松船へ片手を懸て乗り掛るを件の武士が突然と猿臂を伸し其襟頭を搔掻み手疾  
 く船へ引上ながら膝下に組しき動かせず「ろれ者共船を遣れトの一言の下に遂を跳て現は  
 れ出たる四五人の荒々いさ壯俊も物が物をも云を打點頭船に舳に立別れて突張棹の手練よ  
 く咄呼と見る間に隅田川へ吐出したる欄よ船を棹もあり押もありて既下流へ航らせつ、  
 兩國橋へ程ちかき船藏河岸の首尾の松を這り去んと爲たるとき件んの武士が指揮して松を  
 松の丁木に繫がせ此時までも組藉居たりし金太を磯と突て氷に均しき刀刃を引抜き其襟  
 頭へヒヤリと指つけ(武士) 何と下郎驚ろいたか其方今方橋の上より、取浴したるアノ金は  
 盗み物に相違からぬ我は公儀の旗下よて國市牛と云ふぞぞイザ彼金の出所來歴明白に  
 申立よ、世 乱れ侍はひに近頃悪黨徘徊して御膝下を騒すにより我其筋の内意を蒙むり  
 悪徒ばら捕へんとて一時は船に在り一時は陸に在て晝夜非常を營いめ居たるが我ある事  
 を知らずして果して其方橋上より金を落して已から曲事の程を顯はしたる冥罰觀面云ひ譯  
 あるまいイザ明白に白狀しろアト罵りたる思ひがけなき言辭を聞とも敵の氣合と  
 面色いひと疾く斯よと思ひけん金太は何か心中に點頭(金) へん甘く言したな化役人の横

着者がモシお前眞實の、旦那衆で居さつしやるなら、何俺を番屋へ引揚げ吟味とば爲ねへ  
 のだ俺も飛驒の金太と云て白刀ぐれへに威されるヤワな野郎じや無しだよ生して此方十年  
 來抜刀なんざ尻の屑も思つた事のねへ男だ其証據にやア此通り片腕切れた刻印附、先  
 兎も角も之を見て眞實の話も爲がよい化の皮を脱なせト云つ、スラリと脱肌を見れば奈  
 にも右の手を腕部かけて切取れし思ひ掛なき姿なるよぞ件んの武士も其餘の者等も是は奈  
 にと打驚ろき打呆れつ、良暫時黙然として目成居たりと

第三十三回

切前回に松中にて飛驒の金太を却かせし彼曲者の履歷を聞に是ぞ元來九州の浪人團市平  
 (三平)と云ふ悪徒にして乃は本傳「三の中」に民が物語の末演たる土屋徳兵衛を殺せし  
 者これなりとぞ抑此市平腕力強く心飽まで猛りて且奸知に富且武藝あり利さへ亂世に乗じ  
 近頃手下の悪徒を集て都府遠近の差別よく晝夜徘徊人を殺し財を奪ひ亂暴しけるが殊さ  
 ら去年の伊豆へ渡り下田よ於て野武士と共、或渡海船よ打乗つ船長が薪水を買んと上陸し  
 たる間に乗せ残れる船子共を切沈めて、其船を奪取り之を江戸へ乗走らせて品川沖よ擧ぎ  
 置二十四五人の手下を養なひ松中を根據として常に各所へ上陸を豪家を撰んで強盜し押入  
 り金銀財寶を奪ひ來り恣ひ儘、世を送ること彼歌妓物詣よ顯はしつる筑紫の九衛門と云  
 る悪徒が如きも斯ありかと思ふばかり兇暴無殘の舉動して傍若無人忌憚を知らざる殘忍非  
 道の悪徒なり然れども前々回既度々演たる如く當時幕府の政道亂れて是等の徒を誅謫す  
 るよ其手段緩慢なるに予彼等巧みに法網を脱れ跋扈極まりなかりしとぞ是市平が小陸な

り去程に市平は向ふ小松へ打乗つ、屈強の手下と共に本船を離れ隅田川へ乗入れ、山谷堀より上陸して悪事を働らかんと思ひながら今戸橋の邊にて良船を止め、折から橋の上より切餅包(廿五兩包)の封金を落す者あり市平疾く之を見て手下共に指揮するに手下共心附て忽ち船より下立つ、河岸を探りて金包を悉く拾ひ取り船へ歸り上りしと落し主の金太河岸へ下つて、金を探ぬる有様市平つらく透し見れば尙彼が懐中より餘金あるべき容子なるに不審たる金を餌としつ彼を松に乗移らせ人家離れし松藏河岸にて白刃を振り強迫し先其人間を試みたるよ、彼案外大胆にして之を怖れざるのみならず其片腕の無を示し且我を見破て罵り返せし舉動に市平はどく驚歎し斯の如き曲者を手下と成さば川ひ方よ一廉の用に立べき奴よと、分別して刃を納め最愉快氣に打笑ひて(市)驚き入た其方が眼力察しの通り此方は箇様くの者にして云々の所業を爲つる水陸の強盗をや願はくは其方も今日より我手下と成り我を助け共愉快な事を働らき快樂な月日を送るがよと思ひの儘に樂しませよとて先は其素性を語り且拾いたる金を返して且金太が來歴と金の出所を尋ねしかば金太は罪を納め入て(金)それは願つたり叶つたり實の處ろ私しも飛彈の高山の生れよして箇様くな兇狀持且此金は斯々して今夜奪ひ取たるもの又片腕のない譯は箇様くな次第なりとて身の來歴と積る悪事を誇り顔に物語りしかば市平ますます打喜こび今日の尙得物はなけれを千万金にも替がたき好一個の手下を得たれば此儘歸りて酒宴を開き同盟の酒杯を揚んとて懸て手下に指圖しつ棹を棹せ櫓を押しめて隅田川を乗離れつ、品川沖の本船へ舟を走らす折しもあれ東方の天より明み初て日の出まばゆく立昇り夜は白々と明

第三十四回

たりけり(善者申す是よりして市平金太を伴ふ以歸り手下共と打集て懇親の酒宴を開き同盟の酒杯酌交し歡樂を盡す件は諄々しゆゑ省きて記さず然れば今日より飛彈の金太は市平が手下となり専ら悪事を働らさつ、疾むべき所業もふかりしと云傳へぬ)

明 爰又由衛門が娘れ七は彼月彼日身を賣て佐野桶の娼妓と成り源氏名を萬城と呼ばれたるが才色とも尋常ならねば突出の當日より評判四方に轟ろきて其全盛なる比類なけれ奈なれば父由衛門、かの夜尙且に別れたるま、只一度の音信もなきゆゑ其後の始末いかに成しか夢にさへ知よし無れと彼日約せし事もあらば有繋うちつけには問かねて或時腹心の新造を遣はし外ながら土屋一家の安否の程を探らせたるに其新造かへり來りて彼家より主従一同、變りたる容子もなく主人の母れ國は病死し、悪黨吉は殺されて一家故なく暮し居るが只由衛門が親子ながら彼夜出奔したるま、今に其行方を知らず是のみ何れも苦心して尋ね索め居れりと云にぞ切は父由衛門は彼夜ざり歸らざりしかモシ老年の夜道と云ひ殊には大金を所持して居たれば途中に於て追劍などに殺されども爲は爲なんだか心もとなき事よころと案じ出ては寐も睡らず寧ろそのこと半介夫婦へ事の始終を告て遣り彼人々の力を借りて其行方を尋ねんかイヤくろれでは彼夜ざり返すくも約束したる誓を破る譯なれば其も出來ずと取つ惜つ思ひかねつ、日を送りしが世の風説は彼月彼夜吉原より番場へ掛て然九十六 親の無事を祈り只願はくは今一度合しめたまへと所念するのみ他事なく日を送りしとぞ、



二十七 斯りし程に何の歎のどて何か當年も過去つ明れば安政五年と成り、三月初旬の二日の夜と  
かや葛城の例の通り化粧美事に裝飾て管がきの聲も四下を拂ひ店へ立出んと爲をりから既  
入來りし遊客ありて「葛城をト云ふ名指なるにぞ樓夫かしこまり紹介の座敷へ案内し通例  
の挨拶して退ぞさ出しが暫時ありて裏草履の音おだやかに右樓夫は先を開かせ進み入來る  
葛城太夫、大からず小からぬ尻を此方へ片膝つきて徐々に遊客と面を合すに何とかが爲けん  
彼も此もハツと驚ろく状況なりしが就中遊客の色を失なひ(遊客)モン若衆すまねへが云に  
云れぬ事が有から見立替を爲てへものだト云を打消し葛城が「と云しやるは多無理じやな  
治 ひがモシ金太さん何事も昔しは昔しへは今、時代時節で私いさへ斯云ふ姿も成たものれ厭  
でなけりや少さかも多遠慮には及ばぬこと、何にも云す此儘に遊んで行て下さひなト云れ  
俠 て此方は何となく仇の情を混交し穩かならぬ胸の内一時思案の体なりしが忽地思ひ返し  
けん身を反せつ、打笑ひ「成ほど云ば然なもの何サれ前の心中さへ打和て下さるなら俺ち  
客 やア今さら仔細はねへのさハ珍らしし事や有たト云ふ彼方々笑を舍み(葛城)ろんなら作  
傳 どん(樓夫の名なるべし)宜しくト云すて立て悠々と立出て行く後ろ影を見送る遊客は口を  
張き鼻を開きて茫然と意外の事に夢の如く暫時呆れて眺め居たりと

第三十五回

左野橋の葛城が名指の遊客は別人ならず是ぞ悪黨金太なりしが金太も葛城大夫と云は我昔  
に飛弾國にて殺さんと爲しお七なりと夢よも知る由なかりしが只昨日今日懐中の暖か成  
に心ちかれて既判高き葛城を一晩買て遊ぶべしとの苟且な企望を起し此夜衣服に美麗を飾

りて左野橋樓へ接上り始めて葛城の面を見たるに思ひの其人は尾彼れ七にて在しかば有  
繋よ昔日の一義もあるゆゑ極りの悪さに若者へ見立替を云出たれを案外至極な葛城が心潤  
き言葉聞いて辛やく我も打和けつ聽て通例の酒宴を設けて樂しろ可笑しく床に入りしが尙葛  
城は入來らねば布團の上は寐べり乍ら爰も熱々考ふるに「彼奴田舎も居た時随分美人と  
思つて居たが況て斯いふ處ろに陥てハ装りに粧りぬいて居か今見た處は三ヶの都にも無類  
飛切の美人と成たり、殊更昔日の遺恨を捨て我を一泊せしめた杯とは中々胸の宏ひ事實の  
慮ろ田舎も居たとき折もあらば強姦してなり、情戀を遂ふと狙つて居たに今夜圖らず斯な  
るとは有がたし悉しけなし今にもわれ廻つて來たなら日來の戀情を晴して呉れふシタが彼  
奴も惻愴ものゆゑ遺恨を捨て遊んで行ど甘く云たアノ言葉も何いふ手管か萬一ツ己を欺  
して斯と云ふ幸段の有ふも圖られずコリヤ横鼻禪を楚かりて容子を見なけりや臉難だト  
客 四下さよろしく見廻しよがらムツクト起て鏡臺の引出を推開つ、花櫛の平打よ「葛城の山  
越て來る雁 羽一と毛彫にしたる白銀の簪挿を盗み取て其脚を二ツに捻枉け「待てたら宜  
傳 「撥斥たら之を手品の種として泡を吹せる後日の用心へン甘へなトニコノ「笑ひ手疾く開  
く紙入へ密納めて何氣なく烟草をば「待折から空薫の香腹郁と徐かに入來る葛城が屏  
風の中へ進み入て俄然に假裝うら馴に知らず顔なる金太を起し(葛城)モン金太さんモ一寐  
なんしたか、云たい事や聞たい事も多あるのに知らを切てさ、モン金太さん灰吹に烟草の  
烟が遣つて居よト呼覺されて我ながら陳腐局方と頭を搔々起上つて歎息つさ(金)實は何だ  
三十七 か極が惡さに特と假睡を爲て居たのサ、遺莫とお七さんマアれ久しし事でした先刻始めて

七 遇た時は眞實に吃驚したせ、何は兎もあれ何いふ譯で如斯稼を知て居なさるか俺も實は此  
四十 通りト云つ、右の腕を見せ「アノ時旅の武士に片手をスツパリ切れてしまひ谷底に墜落た  
が尚却が滅しなかつたか危ねへ命を拾つたからモ」誠然心と云ふのでは神田に家を持  
て堅氣に暮して爲ました處ろれ前さんの評判が凄らしひ事だから然いふ媚奴の顔だけ  
でも見て置ふと思つて「フ」來て見たら思ひ懸ねへ葛城とは昔時馴染のお七さん、己臍  
明の緒切てから如斯く吃驚したはねへよ、モシ何いふ因縁で如斯處に居なさるのだ又阿つさ  
んは何しなすつたか、同國有だ遠慮なく譯を話した聞かせなせへ及ばずながら、容子に依れ  
治は力に成てあげやうからト實事偽事打此たる言葉の本承つらく聞はて葛城か幾度か歎息  
しつ、頭を擧しか、扱四事と云出るか又何故と知りつ、金太を客に取たるか且葛城白  
痴も遂に金太へ身を任すか次回に悉しく説續くへし

第三十六回

客 當下葛城頭を擧て「折角の言葉でも私しが身賣の云々ばかりは何方も話されません  
し、又肩より身の上でもが随分身受と爲し遣ふと云て下るお客も有り強がらぬお前さ  
んのれ世話も成らずと困りませんから御心配下さい升木で花く、りし挨拶は有繋の金  
太も憤然して(金)是れや殿しひ御挨拶は今云た俺の言葉が氣に障つたら勘忍しなせへ、悪  
氣で云た事じやアなト云ふ顔見つめて莞爾笑ひ(葛城)サア然いつたら腹を込ふと特と撮  
んで試た譯さコレ金太さんぬぬ私しも斯いふ勤を爲てから、心も身も我儘に成腐つ  
て仕舞たから地金を出せば右の通りさ、何と呆れましたらう其からお前さんが命懸で取

明 溜たか金を出て受出てもト半分云せす此方は目を張り(金)ナニ命懸で取溜たトは嗚呼しな  
事と云じややねへか憚かり乍ら此金太、不正な金は一文でも躬に着て居た覺ゆねへサ  
ア何故に如斯ことを(葛城)コレサ何だへ大きな聲でれ前さんは其だから水臭くつてイケな  
いよ幾等かくして居なすつても私しは疾から聽て居てれ前さんの今日の商賣を知ぬいて居ま  
す程に匿しても無駄な事さ、ト云のもお前の所業を國に居ころ知て居た私しの事ゆゑ無理  
もないのさ何でも宜から有つたけお前の事と此頃の所爲を話してお聞せよ其で然ければ  
私しの方でも身賣の事から何から何まで話して聞せて未始終、れ世話も成ふと思われませ  
んは、モシお前が葛城を眞實女房に爲る氣なら何れ敷も打あけてお話し爲さいよ否ですか  
否なら此方も否ですト異に纏んで問かけられ金太も今さら常態極まりエ、單そのこと身の  
上を無聞せて此女をと思ひかけしが有繋は曲者忽地に復思ひ返しイヤ待暫時安なりと容儀  
を正して冷笑ひ(金)何を云のか知らないが假令いかに思ひ懸意な仲でも、失神至極な其言葉  
モウ、昔日の馴染を捨て通例の遊客と成り疾く遊んで歸るや爲やうサア寝なせへト引袖を  
振拂つて後を向き(葛城)私しお寝のけ否ですトサ、大層お腹が痛ひホンと最早みる頃だモ  
シお客さまの氣の毒です玉代は只今返し升から、サツと歸つて下さい升ト云すて終す  
立起り何ともなく出ゆきたるにぞ曲者金太も詮方なきに齒を切ばかり憤怒れ今は何事か有  
寐られず仕度ろこく勘定とまして急ぎ戶外へ立出しが振願つて舌を吐き斯いふ事か有  
ふかと思つた故に後日の爲め盗んで來たる此眼挿今も見る腸冷 倍 思ひ知らせて遣そと  
五十七 獨り酔々囁やき行を格子の間より窺がひ居たる葛城は此体みて平生よりして服づけ置さし





七十八

にて酒を飲せ肴を勧めて機嫌よく(三)尚とふも寒ひじやねへか、時にお前どこへ行た流石品川の歸りしや有めへ勘定取か先兎一角、ゆるりと飲て行なせへト大物で献す烟酒を作藏は盗く受てグット一は息を吹き(作)ナアに品川をころじやなく、又勘定取でもなひのサ、今朝はお前不思議な事で附馬とでも云やうな變手古々役廻りて沙溜まで行て来たの(三)然ふか其奴ア多苦勞さまな、シテ何いふ役廻りか面しろろうだ話しなせへト問れて作藏四下を見廻し(作)チト内分な事だけれどお前だから話さうか實は昨夜葛城さんに初會の遊客が登た處ろ其遊客人は花魁の同國者で其昔は仇敵同士で在たさふだ、處ろで情は知らねへが今朝其客が歸るとき花魁が己を呼んでアノ客は何へ歸るか跡を跟て見て呉ると頼まれたので追掛たが客は沙溜の橋の邊で小舟に乗て沖の方へ沖で行て什舞たから悄然と歸つて来たのよ、其はさふも奇妙な事よ其客人が國に居たとき或武者修業と喧嘩して右の手を切られたとかで手が一本の異り物サ随分姿が好なひせ、何しろ己が見た處じや喰へねへ奴らにひが惜ひ事にや今朝の騒ぎで情を聞とる間がなく粟ア食て出かけたから皆目理屈が別らねへト云かけて打笑ふを三吉は熟ノノ聞き眉を顰めて考が居居たるが何か心よ打點頭(三)然と思ひ出した然なら若や其客は向ふ河岸の土屋の日那切れたとか云ふ野郎であらふ、作ぞん其奴の國元は飛彈だとは云なかつたか又其野郎と同國生れの、葛城さんは何いふ身分だ己も疾から旦那(半介を云)に頼まれ或娘と其親とを探しぬひて居んだが今の談話の梅梅じやア葛城さんの身分と實名を、事明細に聞たひがれ前ろからは知れひか問れて此方は目を睨張(作)それやア妙な引懸りだ、然よ太夫(葛城を云)の生國は借か飛

客

彈の高山で名は七とか云たつけが何いふ譯だか人が聞ても、必らず私れの國處と實名とを云なと云て不斷かたく禁られてるが、ト云ふ言葉いまだ了らず三吉はた横手を拍ち(三)それくろれ違へねへ其お七ツさんを探すとて是くの騒動したか未だよ皆暮知れねへので尋ね飽んで居た處ろだヤン有がて辛やく分つた、作ぞん一緒に來て呉んねへ直向ふの番場河岸に尋ねてゐる日那が居のだ些ども疾く知らせして、サア一緒に來て呉なせへト切り急立意外の騒も驚ろき立て、そんなら何しろ行へト身装繕ろひ違た、しく既や走出す三吉の跡を慕ふて走り行たる時しもわれ是より先、彼陣坐敷酒飲居たりし武士の客が窓を隔て、右の話の轉末を臆ろげながら聞取けん是も何やら心に點頭急がはしく勘定すませて、深網笠に面を匿し右三吉と作藏の跡を跟つ、足疾く番場の方へと走ゆきたるが容子ありげに見へたりけり

客

去程三吉は作藏を伴ひて番場河岸へ走來り土屋半介等一家に向ひて作藏が話柄の子細を云や物語り(三)俺が思ふ處ろては其葛城と云ふ人こそ像てお尋なされまとるお七どのに違ひなく又片腕なしと云ふ其客人は是までも度々お話話を聞きました、飛彈の金太に相違なからう其故、葛城さんが此作藏に頼むとき同國者だぞ申したよ、兎もわれ日那(半介を云)がお出かけ成されて其葛城を傍覽じましたら忽地ち分るでんひませうが奈が思ひ成され升かト息を切て演るを聞き半介も駒吉もお民お大その餘の者等も手の舞ひ足の踏をこ

客

ろを知らず、嬉し悦び立騒ぎしが半介は尙は作藏に向ひて右葛城が容貌年齢、又身賣の

客

九十七

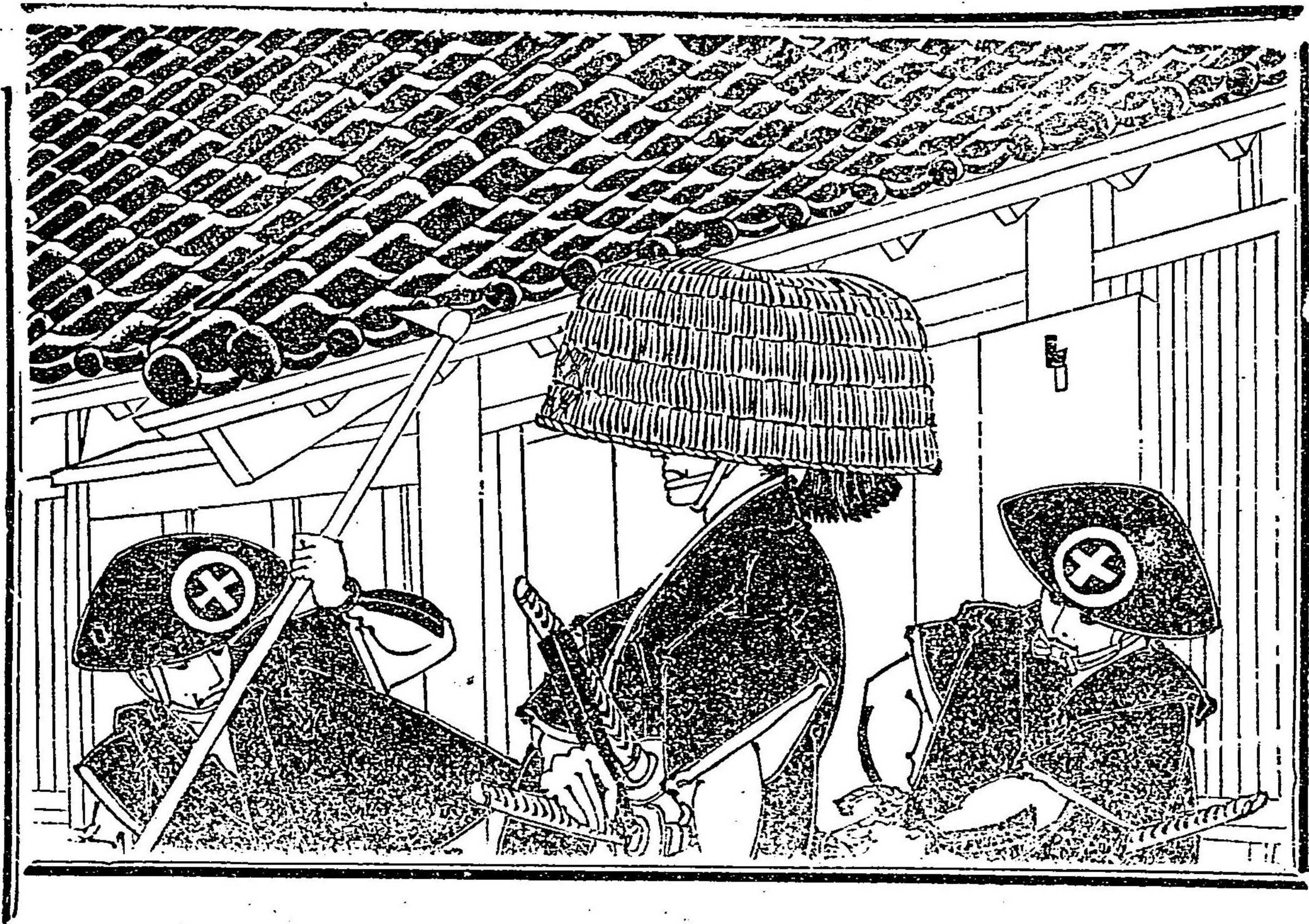
第三十九回

日の形状なども悉く問極むるに彌々七に相違なきにぞは彼れ吾爲に身を沈めたるものなる歟殊勝なり氣の毒なりと思はず感涙を振落ししが去りても由衛門が奈なれば七を賣て其儘影を隠しつらん怪しき事の限りなり斯れば万一お七が身賣も我爲には非ずして外は曰く有りし事か假令うれにしろ是より一度かれへ而會せば始終のふさは分るへし胸の中に分別して先は三吉が忠告を謝し且作藏を勞らひて此時お民が差出す心ばかりの封金を兩人へ分ち與へ尙後日に緩く禮を爲へしと云を聞かけ三吉作藏目を見張て「元より是が欲さ故に話したしは参りは致さず、此心配には及びませぬ御無用に成されまし同辭を聞て半介は強て之を渡しながら既や立起りて衣服を整のへ「然らば作藏どのやらに案内を頼みたり一足先と歸られて半介が参る事を其葛城に話し置れよ呉々も御苦勞なれしと懇切に勞らひ歸し三吉へも挨拶して例の宗近の一刀を佩さみ懸て戶外へ出る折から彼魚榮より三吉等の跡を跟つ、密に來りし深淵笠の武士が最前よりして門邊に佇立み家内の容子を窺がひ居たる歟今半介が出るを見て便宜わると思ひけん足疾ま去と爲つるを半介は信と見て迂参る曲試みて呉んとツカ／＼傍へ進み寄り袖を把へて聲張わけ(半)モシ貴殿は何用あつて白晝人の門に立ち家内の容子を窺がひ召さる、或ひは身装に奇麗を飾り特と人に油断させて夜盗を働らく歩台を見んため窺がひ居たる曲知歟姓名仔細いかい此頃物騒さ油断も隙も成らぬ事よト悪口云れて件んの武士は而色俄然朱の如く勃然として怒りたるが忽地よ又思ひ返して小腰を屈め言葉と和らけ(武士)奈も拙者が不屈なるも實の處ろ此邊よて半田宗庵と云ふ醫師を尋ねたく存じたて、先刻より彼方此處

と徘徊いたして尋ねたれと探し當らず當感し御邊が家よて尋ね見んと思ひつきて立寄たるのみ毛頭迂参の者にあらす今は既や時刻も後れた急ぎし許しめされト云捨て半介に把れし袖を振拂ひ逸たし氣に走り去を半介遙かに見送りながら心中は點頭打笑ひ駒吉に注目して跡に心を注させつ袖うち拂つて悠々と北の方へぞ進み行ける

第四十回

情は心の溢る、處ろ愛は意の鐘る處ろ何れも愛たき文字よして人の捨べき者よわらず若し情愛の二字を捨るときは世に憑もしと云ふ文字も捨べく人間の情誼これより廢れて始終忌くしき事のみと成べし、然れば土屋の半介も若情愛の二字を捨てお七が身賣の事を聞ても「彼は彼の儘なるのみ此方は元來思ころ彼をれ其身賣せし金とても絶て我は益せしならねば知らぬ事よと天うろふきて然り氣なく止みたらんよは又演繹べき後談もなく復編るべき事跡も絶なん寔に情と愛との文字の與かる處ろ大ひなるかな作用どころ大ひなる哉、去れば土屋半介は門邊に居たる怪しき武士を存分云ひ懸して懸て踵を廻らしつ、芳原にして急ぎしかば暫時の中に走り來りて花の遊廊へ進み入しが「惣じひに知人なりなど、名告かけて遇ふより通例の遊客と成つて相見る方が心安しと思案を決め急まに「茶屋へも奇らで佐野橋の店濃簾を跳揚つ、心せはしく進み入を若者が斯と見より心得顔も出迎て此方へと案内せしかば半介ツカ／＼二階へ登りて引附の座敷へ入んと爲どき、是より先葛城は豫て誠しめ置たりしにの彼作藏が口をこらし我身の上の爲体くと思ふ人に聞知られ且今尋ねて來と云ふ圖らざりける咄しを聞き一度は打驚ろき又一度は耻らひしが始めて親と相談



して此家へ来りし心根こそ昔日の恩を返すと云ふ、其口實は然ことなれど、人の爲ならば鬼の毛の先も置く露をの、恩義を受し事なくとも、此身は愚か命さへ惜ふはあらじと思ひ初し、其心根の底ふかき迷ひの雲は古郷に相見し時、今日までも晴れ間ぞあらぬ女子の一念、何かは一度夢より現よりなりと此念の万分の一も彼人知られ知らせて斯々を話して欲ひと朝暮も思ひ戀れし折柄なれば、今半介が来りし姿を障子の隙より搔きみて懐しさと嬉しさに耻かはし、さも打忘れ周章走出で袂を引とめ、(高城)「イヤ半さん何でござんス引附も馬鹿らしひサア」此方へムんせト云ふ言葉さへチロク、聲も引立られて半介も傍の手前に點頭のみ物をも云はす連られて房の内へと進み入る、新造の廿次が心得て通例の挨拶をそこへ既や設けある酒肴を器用に列ね饗應せしが、暫時もあらず氣を利せ事に托へて外し行を高城は見遣りながら堪へ、胸の中に包み難たる血の涙の男の膝に振落し組み着つ、いはじみつ物さへいはで、眞暫時く堪ぬばかりに泣伏たるにぞ有樂、猛き半介も慰さめかねて腕を組み其心底を推察りつ我にもあらで目を展た、(半)「コレお七や、其歎きは尤どもが何いふ譯で此苦界に身を沈めたか仔細を話しな大方は斯であらふと察した事もあるなれば、只推量にして其意を得がたしサ、詳細に話しを爲し泣て居ては始まらずト背を擦られて柔し氣も問かけられては、最と尙胸も張さく悲さよ高城いよ、泣伏したるのみ物を云んと幾度か顔さし上れと堰かねて、情なき血涙溢れ落せぐり上つ、齒を切て復さめ、泣伏せしが、幸やく思ひ返しけん振か、りたる髪の毛を掻揚ながら顔を揚げ目を推拭ひて半介の面をシミ、く打みやり(後の回へ讀續く)

第四十一回

本傳を讀二人の女中、ナニ、前回の讀續きた、ユート前回の讀終は何と云ふ所だッけ「一人」イヤ覺えが不宜ね、前回の終はアノ夫なにサ、振か、りたる鬚の毛を掻揚ながら顔を擧げ目を推拭ひて半介の面をシミ、く打みやり「一人」成程、爾だつた、然では本回は高城の、言葉書と成ところだね、サア跡を讀で聞せ「一人」アイ、讀から黙つてお聞よ、其お不審はお尤もさま、全体私しが身賣の事は何いふ事が有ましても貴公は勿論お民さんにも、必らず云なよ云まをまいと堅く親父と約束して然から爰へ參つた事ゆゑ自然と知れたら格別、さもない以上は何あつても私この口から貴公方へ決して知らせずとまいと存じて居たに作藏が不圖した事から口を辻らせ如斯處ろでムサ、とこれ目に懸つたお恥かしさ、イヤが斯なる上からはお匿しすも無益な事ゆゑ、残らずお談話をせよと云つ、再び目を拭ひ始めをせせば、箇様、及ばずながら貴公の御難をお救ひす心にて而から以來かうかうして扱免も角も昨今まで勤を致して居ました處ろ親父は其ぎり行方が知れず向えた事と朝夕も案じ暮して居た故か或晩かう、云やうな不思議な夢を見ましたの尙更苦勞に爲て居た矢先へ、アノ飛彈の金太奴が圖らず私を買い參り顔色變て驚き升たが其時彼奴の身体を見るに片腕のない不具者ゆゑ右の夢に思ひ占せ然から斯々云かけて釣て見やうと思つた處ろ先も然る者うつかり乗すト云かけて昨夜の始末の一五十一を委しく語り其より續て今日と成り事の爰に及び仔細と又先のはど作藏が歸り來つて云々いひしと金太が歸りし始終の体まで餘さず漏さず語り了り、再び言葉を元に復して「サア此通り

八な始未でとから親父の何して終ました歎、又私しが身賣の金も少しばかりの役にも立ず如  
六十八 斯悔しひ事はなく悲しひ事はムひませんよ、トさすしても後の祭、尙さら役に立ませんか  
ら、如斯事は何でも宜が只残念なは身賣のお金が、貴公のね身の爲にも成ず、何の用にも  
立ずして分らなく成て終つたゆゑ、仮令斯いふ情ですとね話しはすしても証據の無ことで  
すから、貴公の爲も身を賣たか外の仔細で斯なつたか其處がお分り成さるまひと思へば茲  
に先年より願どをうすと戀ひ追し只た一の願ひさへ慥はぬ事かと存じ升と其はつかりが情  
なく悲しく辛く悔しふんす、ア、及はぬこと及はぬ事と是までも幾度か自分で心を取直  
し諦めては見ましたもの、ト、云さして膝に取つた跡は何やら顔を匿し口籠ながら二言三  
言、口説言葉は開るねと始めて開たる長物語と今復痴情の容子とに之を悟り彼を思ひ半介  
は思はず知らず大恩を吻き手を組つ、或ひは歎き或ひは不審り又困じたる顔色なりまが是  
より先き隣座敷に何登りしか先のほど彼半介は罵言られたる深編笠の武士が復紙戸に身  
を寄て黙々ながら此方の談話を概略開たる折しもあれ、その後より窺がひ寄し、配方姐  
妓が戯ふれに走り竄つて両目を掩し「何さす性悪が人の密議に耳を立てサ、羨やましひ  
かへ此人よト小突立られ此方は吃驚(武士)是さく何を爲のたコレ戯けるな止よト打  
蹴むる、聲さす半介葛城開耳立て、目で知らせつ、口を閉、暫時黙して居たりしとぞ

第四十二回

半介は葛城が長物譚の一五二十を悉とく聞了り只管陸歎したる折から隣座敷に人ありて  
此方の談話を密聞せしとぞ、イヤ開ぬとぞ喃々と囁ふれ争さふ聲を開つけ二個は忽地口を  
閉て暫時容子を窺がひ居うち彼等連りよサ、メキつ、何れへか出行たるにぞ此時半介聲を  
密めて歎息しながら和らかに(半)お民も俺も彼此ぎりれ前等親子が見へなく成つたで大概  
の如斯事か或とも伯父貴(由衛門を云)が歸つて來ぬゆゑ外の仔細で有ふか杯と實以て今日  
まで心配しぬひて居た事よ、然ど其は何でも宜が只不審なは伯父貴の上だで、ハテ四百兩  
と云ふ大金を懐中しての老人が斯る夜路を歸りし事ゆゑ十に九は途中に於て異變が起り金  
を失なひ面目なさに進退谷まり身を匿したに相違ない、然しながら十九や廿の無分別なる  
者と違ひ事に動ぜぬ老人なれば其究厄の爲め精心狂ひて、枉死を遂る杯と云ふ大人氣なき  
擧動は千萬わらじと想ふ程に其等は心配するよ及ばず、何か親子再會するやう骨を折て遣  
からして何事も目を開て時の來のを俟がよひ、又其方が身の上も斯して置ぬ了簡、ちか  
い中に何とぞかして受出て遣はると些しの問ふ辛抱しなせへ返すく己の爲も遙くと國  
から出來て如斯苦勞を爲せるとは不便でも憫れども云ふ様なき廻り合せ、勘忍しなよト慰  
さめられて葛城は身も浮ばかり嬉し涙の袂を絞り(葛城)ろの一言のお言葉で云に云はれぬ  
胸の苦も消々と晴ました、私しの身体は此ま、居たどて五年七年十年でも更く厭ひは致  
しませんがら、願ふ此うへお情親父を尋ねて下さいませト云かけて又顔を背むけ、あつ  
かましひ云ひ條ですが假令今晚一夜之共泊つて行て下さいませんか後生ですよト云もあへ  
ず波奈志路美つ、襟元より報らむ目元に涙を含み膝すり寄て引入る、屏風の蔭に半介は幾  
度となく歎息し斯まで我を懸幕へるか、ハテ淺ましき事かなと思へど有繁情愛に最迫られ  
七十八 ては山を抜く力も脱つ我知らず茲よ一夜を明したりとぞ、實に怪しき縁しと謂べし」時に

最前次の間にて此方の談話を聞居たりし彼武士は始終の容子を篤くりと窺かひ濟し何か心  
 中に黙頭つ、殺氣を含みし兇相にて、手疾く帯をみなはし「イデ一打にど云ながら思はず  
 刀を把んどして忽ち心に心づき、トッコイ刀は主客で在たハテ一應では遊すまひ然なら一  
 旦立歸り準備を整のへ存分に撃して呉れんと啣やきく密びやかか堪正濟せて既や深そめ  
 たる夜を込つ、忽地戸外へ出るが否や足に任せて一心不乱、行路人へ突當り突倒せども遂  
 鹿の山みね獵夫が警へに濡れず回顧もせで一散に何處ともなく走り去たり。元來此武士何  
 者なるか是乃はち別人ならず又彼惡漢團市なるが彼れ先年番場にて土徳を殺したるのち  
 今は年月を疊ねたれども有弊に始終心に懸りて折々は本所最寄を徘徊しつ、土屋一家の容  
 子を窺かひ居たる處ろ昨日圖らず魚榮にて三吉と作造どが談彈の始終を立聞して我手下金  
 子が親かひ居たる處ろ昨日圖らず魚榮にて三吉と作造どが談彈の始終を立聞して我手下金  
 太が事を二言三言耳にせしかば尙彼等が舉動を見とて大胆にも仇せし家の土屋が門邊へ行  
 立つ、家内の始末を窺かひ居たるを半介に見答られ思ひの儘に罵られしにぞ兇暴の本心  
 遺恨に堪ず遂に半介が跡を付て吉原まで密び行き隙を揣つて一撃に之を撃んと狙いたれど  
 も遂に其隙を得ざるのみか妓樓の悲しさ全刀を預け在れば不便し堪ず因て俄し思案を變じ  
 一旦此家を立出つゝ急ぎ歸り去たり

第四十三回

去程に團市平は、韋駄天の如く疾風の如く、吉原より走り歸りて例の汐留の小舟に打乗り  
 本船へ歸るが否や先は飛彈の金太を呼出し「尙手前よは云はなんだが我先年云々にて本所  
 の番場河岸よ土屋徳兵衛と云もの存在を、鎗先に掛て殺した事あり然るよ今日圖らずも儲

櫻くナ事に依て今の主人半介が姓名、并びに斯々の話しに渡りて手前が昨夜遊びへ行た  
 る吉原の娼妓葛城が身のうへと且談話の塩梅で手前の片手を切た奴も右半介の業かと思  
 へる、其邊の始終願未さへ悉とく聞て來たが何と手前其野郎に覺ぬが有か何な奴だ、半  
 介と云ふ野郎は年の頃は二十二三其面格は斯々ト息を切て問かけるを金太聞かけて大ひに  
 驚ろき、其奴ア奇妙奇特列く俺ちが腕を切れた時の武者修行の武士は前髪の二才で在た  
 が今の話しの塩梅では其野郎に相違なし、處ろで親方頼みがある願を俺ちに加勢して其野  
 郎を撃せて下せへ一生涯の不具者に、爲れた遺恨を晴すのは今此時ト云せも果す市平忽  
 地面眼を見はり假令手前の頼みはねへでも、實は先刻ア野郎が已を捕へて盗人だと散々  
 に云したから其返報を爲すよは置れぬ幸はひナ事ア野郎、今夜は廊内よ泊つて居ゆゑ何  
 ども云はず今つから出かけて行て撃て殺やう、ソレ野郎ども準備をしる急げくと急立た  
 る意外の騒ぎに手下の者ども周章狼狽心得たりと名々身輕に打扮つ、長脇指を佩さみ杯す  
 る、用意束の間一整のひしかば市平更に指圖して兩三人を船に遣し其餘の手下金太を始め  
 十四五人の人数を卒ひて残らず小舟に取乗つ、忽地に上陸して番場を指て走り行去と、  
 斯る事とは夢にも知らぬれ民駒吉れ大等は宵の談しの容子を聞くと泊りに來りし三吉諸と  
 も葛城が噂を夜を深して、半介が歸り來るを今かくと待どころへ家の後俄然に竝立、  
 衆多の人の足音して火事だ火事だと云ふ聲するにぞ駒吉三吉おどろき立て裏口の戸を推開  
 九十八 九十九 九十八  
 瞬たぐ間に然あがりし、事の騒ぎは是のみならず誰とは知らず衆多の者ども火烟の中より

十九 現はれ出つ、咄と叫んで前後の雨戸を打破り、勢はひ烈しく乱入して紙戸障子の嫌ひなく打毀しつゝ、荒れ廻り果は悪黨両三人が逃て驚ろされ民を捕へて軽々と引摺ぎ何處ともなく逃行たるにぞ、駒吉大ひ驚ろき怒りて承塵に掛たる鳶口を掻取あへず前後より撃て驚ろし敵に當り一生懸命滅多うち、大童と成て闘かへとも衆寡の勢はひ敵に難さに一旦この場を脱んど思ひ敵の腦骨打碎きて二人三人打殺し「奈も爲て姉のれ民を、取返さんと戸外へ出るとき埋伏けたる市平が邪見の刃より後より架袋がけに切倒されて憫れむべし駒吉は伏たる儘に鳶を振へど大事の深手は働らき得ずして遂に止命を刺貫され遺恨を含で息絶たりとぞ最惜むべき事なりけり

第四十四回

俠 葛城が最迫て、口説たて泣立たる痴情の絆はらひ難てや有聲強氣の半介も今更尻る、途なきばかりか、斯慕はれては却く愛情といひ可もあらで屏風の内より進み入つ、春の狭霧の濃やかに轉一匪の夢を結びて今既や熟睡前後を忘れし、折しもあれ表の引戸を割るばかりに叩きて彼魚樂の三吉が遽たしく入來りしかば、半介ガバと跳起つ、急がはしく之を迎ひ其爲体くを打みやるは彼喧嘩でも爲たりと見へて、髪は紊し衣服を破られ手足は血液の熱たるよぞ心もどなく胸うち騒ぎ其仔細を尋ねる程に三吉は葛城が心利せて涙で出す水は咽喉を濕ほしつゝ、息呼あへず後を見顧り「親方なんも知りませんアレく、ヤヤシボン打つける、彼の半鐘も盤木の音もお前さんの家の火事、イアなか、其はかりか其火を放た亂暴者が斯やいふ騒ぎを演出し駒吉さんは殺されてお妻さんも連てかれた、イヤモ

實に大騒動、何でも對手は浪士者です、俺ちやアせよか此事を疾くれ知らせやうとて宙を飛でト半分開す半介忽ち狂氣の如く立起りさま連子窓をハツと開ひて打見やるに果して番場の方に當り火炎光々として天を焼ける意外の事の爲体くに信と眺めて兩眼を釣あげ「お民が敵は捕へられたの復取返すべし手段も有ふが駒吉を撃せたの返すも残念だつた飯令く敵は鬼でも蛇でも引捕へて殺せし彼が遺恨を晴させくれんと云かけて既後談を聞ず齒を切み髪を逆立つ、手疾く準備を整のへながら「三公まことに御苦勞だつた徐々休んで後から來なせへ葛城さらばト云捨つ、樓室に預けし宗近の一刀把て挿より疾く裾うち端折跣足の儘まで閃りと戸外へ飛出つ、十歩を百歩の勢ひ烈しく既大門を後より爲て日本堤を射矢の如く轟然と走來るを是より先功を貪ほり吾一個して撃止んと番場の群を脱出て堤の下に埋伏したる彼惡漢飛彈の金太が進み來りし半介を自疾く認め我物得たりと二歩三歩客 やり違はせて左手ながら腰刀を抜歎めつ、半介の肩先めがけて後より聲をも掛ずハツと切る刃の光に先立て半介疾く身を聞き遣違はせて殘月の隈なき影に信と見やり「ハテ珍らしや飛彈の金太、汝れは就ては種々の尋ねたき事もあり細を受よト呼はるを耳にも掛ぬ不敵の本性冷笑つて身を構へ(金)藪でも食へ何の爲に汝らが細に掛らふか忘れも爲めへ三年あど此片腕を切れた代り今日は汝が首を切る、無宿野郎奴覺悟しろト云ふ一言を聞どかめし此方は疾く氣を配り扱は此奴等我留守宅へ焼打爲たる同類なるへし然らば隔く死し難しと思ひよければ復打刃を引外し遣違はせ閉つ開きつ眞暫明く充分敵を疲らせて蹠眼弱腰ハツと蹴に金太は堪らず二三間、ツンノメリさま倒る、處ろを半介得たりと飛越つて香

九中を梵かど躑ぶながら敵のびたる三尺帯を手疾ひきとぎ片腕を後へ廻して懐鼻揮の三へキ  
二十リく縛しめつ、引起さんと爲る折から遙か衆多の人聲して團市平が手下の若ども砂烟  
りを蹴立ながら此方を指て一散に宙を飛び脚をあげ半介めかけて向ひ来りし後の物語いか  
にぞや尙次回にて説續はたさん

第四十五回

明 半介は圖らずも日本堤の邊に於て味方の多勢を憑にして胆太くも打向ひし飛弾の金太を生  
捕つ引立んとせし折しもあれ團市平が手下の若ども番場の家を焼打して勢ひに乗じ半介を  
打殺さんと寄來れる砂烟りと聞の聲を聞つ、見つ、ハツとは爲されは是畢竟われ仇を  
る彼三吉の話の奴等が打寄來りし者なるべしト疾く心は熱頭しかば縛しめられも當々ど  
又罵しりつ狂ひ廻れる、金太を小脇に接込つ、土手を下りて裏茶屋の路次へ入り手拭扼さ  
て生捕の口に猿轡を合せ、寄來し奴等へ打向はんと手疾く準備を盡のへたるが、時、喧嘩  
の聲俄然に起りて堤のうへ騒がしく踏ならず足響うち合ふ鏗響、手に把る如く聞ゆしかば  
半介借と耳を立て扱は彼奴等同士打しつるか容子を見んと傍はらの井戸の柱へ生捕を嚴し  
く縛しめ堀を越て土手の此方より打登り其爲体くを透し見るよ右噴譁の聲と云は是乃はち他  
の事ならで衆多の與方同心等が事の騒ぎに手當ありしか八方より推取圍め右寄來りし曲者  
を此處に追つめ彼處に追つめ之を生捕んとして動捕めさ立たる出の騒ぎよ有しかば半介は  
打笑ひ然らば己も手傳て曲者を手取に縛と獨言して土手際に足蹴かけて跳り出で大手を開  
き大音あげ「番場の土徳、旦那衆へ（番時惚て與方等を旦那衆と通稱す）お手傳ひ致さん

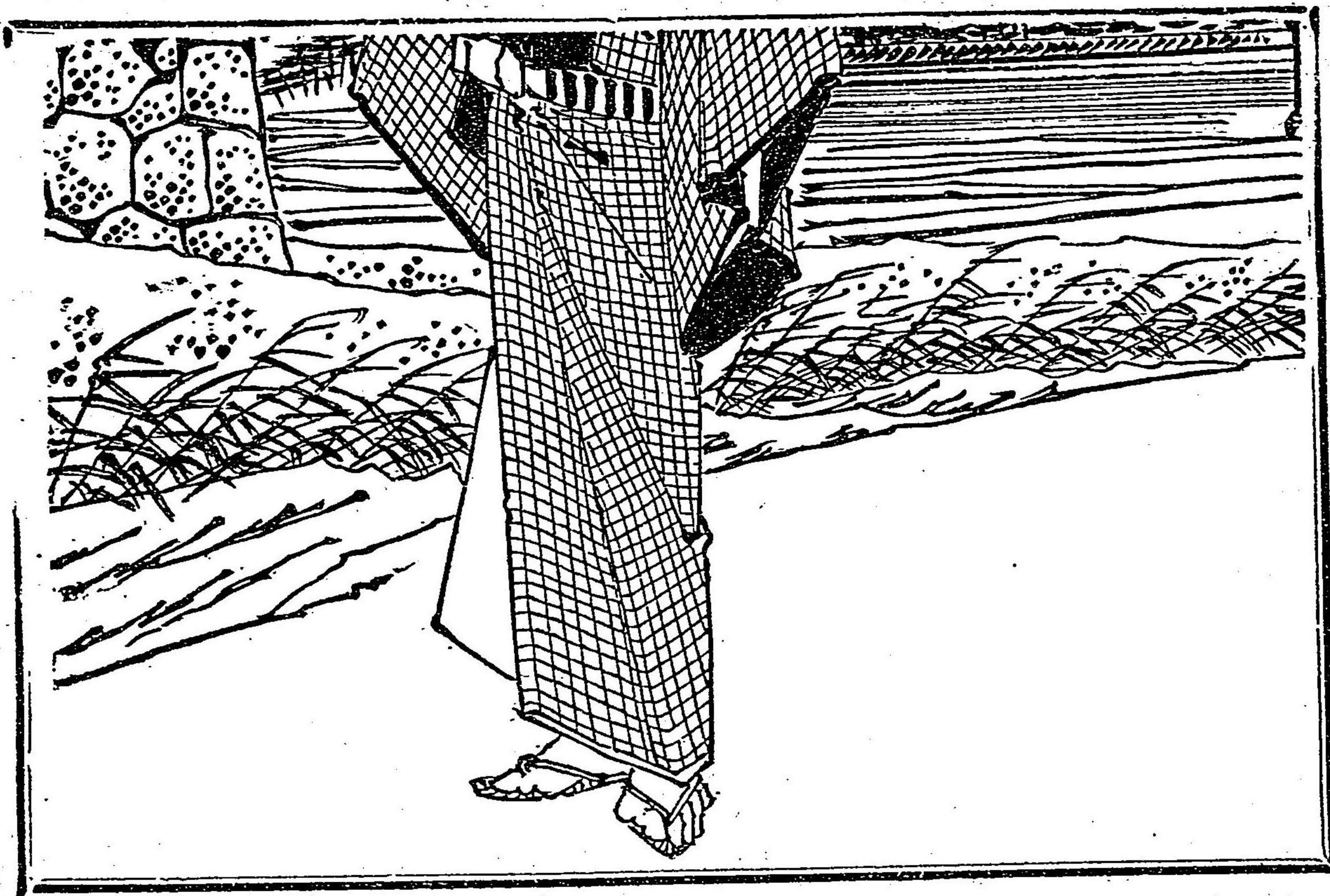
と云も終らず驚愕して逸んど騒ぐ曲者共を腕力に任せて撲倒し打立て蹴倒し踏躑りて瞬た  
く間よ五人七人手球の如く生捕たるよぞ殘る奴等は事慣たる同心どもが十手くらひて舞々  
と縛しめられ争動やうやく平らぎしかば同心等は半介が比類なき働らきを賞し且此奴等は  
今が先き其方の宅を焼打したる曲者よ有ならば其方の疾く立歸つて宅の始末を着よなど  
ハ、町家と挨拶し果て尋餘事は後日に到り宜しく沙汰を致すべしと云傳え賊を率立て一先土  
地の番屋を指て皆徐々とい引揚ゆくを半介は唯々どばかり敬禮して之を見送り然にても今の  
奴等が巨魁ども覺しき者は一個として見へざりしが其奴逸く逃亡たるか兎もあれ金太を責  
糺さば萬事分明なるべしと腹の中と思ひ決めて、復行立て何事か暫時思案の体なりしが然  
だくと心中は黙頭、元の路次口へ入來りて縛しめ置たる金太が傍りへツカ／＼と進み寄  
よぞ金太は今こそ殺さるべしと思ひ決して両眼を見はり身を慄はせつ恨し氣は疾視面を半  
介は熱く／＼と打見やりしが両眼は涙を浮めて歎息しつ、後へ廻り先其轡を取除き又縛しめ  
たる三尺とさすて不具を勤はり衣服の前を合せやり帯をささせ手拭把て身の中の塵はこり  
を拂つて遺なと思ひも寄らぬ介抱に是は何だぞ驚ろさ呆れし金太は未だ其意を得ざれば薄  
氣味わるさに惡戯子が、衣を汚して何ども云はれず衣更させらる、母の心中る測り難て憶  
面つくりし如くなる手持無沙汰な顔色しつ、只茫然として居たりけるを半介は左もこそあ  
らんと苦笑ひしに先立ち「金太なにを慄へるのだ其邊で一抔やらかさふサア來なせへど  
三十九 手を把つ、無理ひき立て田町の方へど、進み行たる時しもあれ春の夜すでに朝はなれてチ  
ホロ／＼と立昇る日影まばゆき頃とぞ成ける



鼠究まれば猫を噛み、鳥究まれば獵夫を啄く、蕨なき匹夫匹婦と雖も確く決心したる時は容易に動かす可にあらざる況んや飛彈の金太が如き兇暴無類の悪漢が死を決して悪強せば容易く我意に隨がひて事實を吐き思惟したるが半介は忽然と其扱ひを一變して之を勦はるること一方ならず彼が衣服の世話までやきて懸て之を誘ひつゝ一料理店へ打登り固辭するを強つけて先十二分飲食させ昨夜の事い何とも云すに心よく響應せしかば金太は始終夢の如く針の筵席に座する如く飲ども醉ず食へども味なく、只ムギとして居たりしが其あつて堪えかねけん四下を見廻し聲を密め何だか口を開きすにも面目ねへ事ですがアソは悪事を働らひたに何だつて親方は俺ちを如斯く思遇て下さる實は取れる一命なら少しも疾く殺して下せへ斯して穩待くされるだけ却つて辛うムへやそト思ひ入て云出るを半介聞つ、歎息し「馬鹿な事を云まひぞ元よりれ主を殺す氣なら何で斯して勦はらふ、然しなごも男だ此通り刀を課つてお主を殺さす、就てはか主己の爲め昨夜の騒ぎの起因は勿論アソ曲者等が發頭人の姓名來歸始終の事まで包まず己は話してくれぬか己も惣じては勿論アソ方とか馬方とか些とは人に俠客と立られ何よか面を賣て居ながら亂暴者に家を焼れ女房を盗まれ阿弟まで殺されて阿容くど斯しては居られぬわけ、因て昨夜お主に關はず直さま家へ飛で歸り其曲者を殺やうと思ふ處ろへ役人共が、遣て來て彼等を召捕り引立て行たから既や地圓踏踏だ處ろが喧嘩過ての棒干木切、後の條と思つたから斯悠々と爲て居る譯

よ、處ろで今も云ふ通り俠客と稱れる此己が散々な目よ遇ながら自分では復讐されと、役人共の手を籍て辛やく彼奴等を殺たなんぞと世間の奴に云はれては此上の心外ゆゑ爰でお主に頼むのだが何ぞれ主己が爲に右の話しを爲て呉ねへか然すれば己一個で幾百人の曲者でも片ツ端から踏殺し遺恨を晴し世間へも面へ塗れた泥を拭き留飲を治める心だ尤も先刻の役人共に事の仔細を糺して貰へば、分るめへ事でも無が然れでは事が面倒で且永ひく違へねへから夫でお主頼むのだ、ト云のも夕夜云た、お主が言葉よ己を指し無宿と云れたからはお主己の家を焼き無宿に爲た同類どい此時疾く悟つたゆゑ乃はお主に尋ねるのだ何でも己の思ふには其曲者の發頭人はお主の前だがお主より最とメソと沖を越た、兇漢に逢へねへと大概見込を附て居から尋更お主にや遺恨はなし又ソノ時の機にもしる己を一生不具よ爲た、其仇に廻り逢ば誰しも黙つちや居られぬ譯ゆみ先刻お主が己に向ひ刀を三味した事も己や尤もだと思つて居から其邊は此方で氣の毒など、思ひこそすれ中々以て己の方で踏いさか遺恨と思ふ道理もないから何も歎も今までの云々はさらりと捨て昨夜の始末の一五一十を疾く話して貰ひてへ金太頼ト懇切に斯の如く事を分て且宿怨且頼みし始終を聞て有樂の金太も身の毛たつまで感じたるが不覺に涙を拭ひながら大息呼て暫良時く默然として考へ居たりと

第四十七回  
 五十九 虎狼に均しき金太が如きも半介が事を分ての頼の始終を聞取りつ又懇切なる扱かひには有樂改心したりけん且感且且恥入り且此時熱くと思ひ廻せば空怖らしき、身の罪咎の今更



九に悔て復らぬ淺ましさを包み難てや鬼の目に生れて始めて感涙を溢しア、悪かつた、  
八十八親方何とも面目ねへ何ぞ勘忍して下せへ臍の緒切て昨今まで何でも心の及ぶだけ悪事ばつ  
かり働ひて善根の善の字も知らねへ程の俺らだがお前さん今の話で覺へず感に入たもの  
か今日と云ふ今日汚ねへ物を、拭つた様に夢が覺め二十年來積で来た悪事の程を思ひ知り  
實に後悔いたし升た就ては開申されねへでも、云はずは濟ねへ懺悔ばなし昨夜の事は云  
ふ罪滅ぼしにト、云かけて容儀を更ため是より最初馬道邊にて或老人の大金を摺取り、其  
金よりして團市平に圖らずも奇遇せしこと次に先夜吉原へ行きお七の葛城に遇たること其  
折葛城が待遇あるくば後で仇を爲んと思ひ銀一盗みしこと然るに昨日云々して團市平  
が作藏と三吉が話しを聞き尙土屋の門戸に到り内の容子を窺がひなをいつ委細の話しを聞  
居し處ろへ半介が出來り見答られて盜賊ならんと罵られたる一言が彼心魂貫徹きて且  
一ツは金太が爲よと昨夜の騒ぎを起せしこと又件んの市平ころは半介が先代土徳を殺せし  
仇敵なりしと云ふ事を昨夜はじめて聞たる事まで餘さず漏さず物語り且市平は品川沖の云  
々なる船の中を平生に棲掛と定め居こと又夕夜無残にも騎吉を殺せし者は乃ち市平下手  
人なること又市平の手下共が民を攫ひ行たる先は多分件んの船なる可こと、又先のほと  
土堤の上にて捕座の爲に捕へられしは右市平が手下なること且我は仲間の奴等へ奇功を見  
せんと脱駈して土堤の下に埋伏し半介が歸るを待ちけ狙ひ撃んと爲たりしところ其事忽地  
思ふに違ひて遂に半介に捕へられ事の爰に及びし事まで逐一に語りつぎ右云々の譯なれば

所詮生存居た處が晚かれ早かれ召捕れて三尺高ひ木の上へ登らよやならぬ身体なるゆゑ  
半介の、果しが然然として胸うち開け悦び何に營ふるものな、物々よくも記して  
出ると其、品川さして二人とも宙を飛て走り行しが高繩の大木門邊まで變振系しつ向よ  
りフラく、身りし女あり今走來れる半介と行違ひさまアツとばかり走り掛つて後より遠た  
いしく追り着く半介驚ろき顔面を見るよ是お民よて在たるよ不扱は無事にて居たりしか  
ヤレ目出度と思はず知らず抱よせ引よせられて互に暫時く言葉もあらず嬉し涙に暮れ居た  
りしは夫婦の情合さも有べく最道理に予見へたりける

第四十八回

傳 安危存亡いかにと思ひし妻のお民が命めでたく、爰に再會したりしかば半介は之を引よせ  
思はず嬉し涙を注ぐに況ては民は絶入ばかり縋り着て泣入つ、其儘なにも物物はす暫時  
して半介は涙を納、四下を見廻し「其歎きは最もながら白晝と云ひ往來にて人の見る目も  
繁ければ兎に角、は後にして本所へ歸るべしと耳よ口よせ云開するをお民さ、つ、打  
九點頭「朝の騒、兎漢達の手込には遇ましたが幸はひ身体も汚されず品川の橋向で捕吏に  
九捕へられて兎漢達は番屋に拘られ私は今まで調べられて幸と婿が開たゆゑ嬉しさに氣も

百ギヤギ急で歸つて參つた。こです。然して家は、何しましたか。駒やお大も無事ですか。問られて半介常感したれを、何事も退きひて後、徐々語らんものを、「ナニさ皆な無事だから、兎もあれ早く歸らふと云かけて不圖心つき金太は奈に見かへるに、四下より影もなし、ア何れへ行たるか、或は彼方此方を見廻せども絶て其行方を知らず扱は彼爰に至つて、再び變心逃亡したるか、或は民の面を合すを面目なき事と思ひ、特と影を匿したるか、何れにもせよ俟よ及ばずイザ行べしと決心して、廳てお民を辻籠に打乗せ、我は是より引をいつ、心のこれと止がたさど番場を指して歸り行しを、最前より物の蔭に身を匿して、窺がひ居たるか、金太は悼然あらはれ出で、ア、此處まで來もの、今アノ人が遇つた女は昨夜正しく同類の者等が引摺つて連れて行た半介殿の女房の民との違ひなしと早く考ふ就て見れば、又今更面目なき居て、堪れずして影を匿し、匿れて二人を見送つたが、云つ、思はず大息つき、爰に再び手を組んで彌々す、身の罪を思ひ、悟れば自然から懺悔の風の吹立て胸の妖雲消うせつ始めて出る生得の心の月に、越方を一々考ふれば、我さへ呆る、既往の悪業指屈か、み盡されぬ悪事は何れ輕からねと探中て淺ましきは、何ぞや淺草馬通にて或老人の大金を摺取り、事と昨夜の事なり右老人は何處の誰か元より認めらぬ者ながら、其時刻と云ひ處ろと云ふ且は彼が衣服を思ふに相應からね大金を所持きて居たり、事と云ひ萬に一ツも吉原なぞへ娘か骨肉の女子を賣り、其身の代の金を以て歸り來りしものなりしか、斯見當を着て見れば、一昨日の晩葛城が異しからんで謎々どアノ女がアノ云ふ處ろに身を沈めて居た事と云ひ、今更驚くと考がへる、一萬一や彼四百兩は其邊の金で、無つたか、何ちよしても遠からず取れる一命のある中

傳 客 俠 治 明 俠 客 して

ムアノ女が身賣の仔細を聞かして、みて然らば切て其邊の罪を償なひ、詫見も爲すばならず、其次は昨夜ざり別れて仕舞た市平を尋ね出して、暈て殺め、半介殿夫婦へ對し、今度の悪事を償なひ置其うへ公儀へ自首て出て刑場の露と消る身の罪業の勘定立ん然だくと、頃の中に忽地思案を定めつ、手疾く腰の手に拭の筒端把て、パツたりと打開きたる布音も世に謂首を切る音と、思へば更急がる、善し歸心は矢よりも堪らず、頬被りして高細の河岸の小舟を雇ひながら本船へ乗つけて留守居の者へは、即造の辭柄を以て欺むさつ、市平の蓄財金を思ふ儘に搔摺ひて待せ置たる舟に乗り元の岸より上るが否や、是も亦籠を飛せ、吉原へと走らせつ、處ろの者に金を握らせ、葛城が身賣の始末を詳細に聞取えに果して思ふ處ろに違はず、前よりの一五一十を悉く知り得しかば、金太も今さら堪りかねけん、慚愧分よしなきばかり、只管後悔臍を噛みて、廳て處の者に別れつ、何か心中思案たら、田町の方へと歸り行

第 四 十 九 回

傳 甲 話 休 題 葛 城 の 彼 夜 俄 かの 騷 動 まで 逃 した、しく半介に別れ居たり、立ちたり、氣を苦たるが、斯て有べきにあらざれば、彼若者作藏に頼みて、半介一家の存亡安危を探らせんとて、出遣しに廳て作藏歸り來りて、前々回の事の始末を悉く語りたるのち、更言葉を更ためて、「然いふ譯で番場の最寄は太ひ騒きで、親方(半介を云)もお妻さんも、行方知れず、實にお氣の毒な事、有ります、就て又聞きましたには、今朝白々明のころ、日本堤で兎漢共が役人衆、追詰られ、十人、百り捕られたとの、專ばら臍を致し、升ゆる若や右の兎漢は親方の家を焼ました、其兎徒で有

二百ふかう漸々聞て見ました處ろ果して斯々いふ事で親方も役人達に手傳て悪党共を生捕に爲すつたさふで、而から何へれ出に成たか其場を立去なされたよし、シテ見れば親方は番場、騷の齋だ、お歸り成された見當ゆゑお身軀は別條あるまい先脚安心なさい其後中後の容子を聞てお知らせすからトの、話の次第に葛城は少し愁の眉を閉けを其後の事の心懸れば若是附り暫時は相見ことも慥はぬ事かと胸を痛めて日を暮せしに燈燵を明ろと思ふ頃をひ一人の男が屈けたりとて小形なる風呂敷包を店の者が持来りしかば葛城おやしみ之を開きて、其内を改ため見ると思ひさや封金の百兩包四ツありて其ほか日外紛失したる我銀釵一本と「葛城泡金太」と手紙したる左封の手紙一通出たるにぞハテ不審と打開きて其文言を讀下すに、代筆は「いへども取急ぎに依り要用ばかり申上り扱赤面

客 俠 治 明 傳

の至りにて何とも言語同断ながら私しこと御承知の通り年来忠事を相働らさ無数の罪作りいひしが、其中にも甚はだ以て面目次第これなき事、先頃云々の處ろに於て御老父由衛門様とは存じかけず、儲けくは相働らさ御懐中の四百兩と指取てい處ろ今朝圖りす堤に於て半介殿に生捕れ殺されんと存せまに却て不思議に命を免され尙云々の御恩を蒙り辛や年来の先非を悟て又斯々の疑念を起し御當所の者に聞たる處ろ右四百兩の金子とすはお前様の身賣の金と事明細に承知致し今更兎角の言葉もなく實以て幾重も不埒の段々すはけ御さなく因て時後いへども先右の四百兩と又云々の心得にて日外盜参り銀簪一本、儲に御返上すし、い間だ千萬御立腹とは存じいへどもれ受取り下され度い、次に斯々の次第より依り昨夜思はず半介殿の留守宅へ亂暴相仕向いゆゑ、其れ詫の心よて半介殿先代土徳の仇

團市平を擧取んと、存じ居い處ろ私しの悪事其筋の耳と成り隨ふ八方へお手當あつて最早寸暇これなきよつさ只今此用を果すと其ま、直さま役所へ自首て出んど、覺悟致し間だ右市平を尋ねかねいゆゑお前様より半介様へ右の次第れん通じ成れたされたく偏よれ頼すい簡様致し居いうちも既ちらほらと手當の役人、相見受いにつき尙々す上たき事、山々にいへど早々書納め、いへども金太敬白と認ためあるゆゑ葛城は爰に至て果して先夜の夢の跡さへ更し思ひ出られて、驚ろくこと大方ならず元より心やさしければ亦何となく惘れを催はし再び作敷は附附て心當を聞合せせしよ右金太は自首したれど其罪を許されずし後傳馬町の牢内に於て、遂に首を刎られたりと正しく聞へたりしかば葛城は彼の爲に其政心を憫むの餘り心ばかりの金を包みて間近き寺へ布施としつ一遍の回向を供餘せしとぞ是は之のちくの話なれど金太が終を記せしにより筆の順添るゑ置ね

第五十回

客 傳 百 三

爰に又吉田半介は、圖らずも高細に於て女房お民よ再會せしかば互ひに不勝の悦びを極め、程なく番場へ歸たりるが是より先き番場までは豫て半介が恩を受たる遠近の人々走集まりて火を消し其邊を取片づけ又早桶を買來りて駒吉が死骸を納め彼是始末を着たる折から此騷動に避易して逃去居たるお大等と又吉原より歸り來りし三吉も落合て只管半介夫婦の許のみ打察して器々罵りし騷ぎ居たる處ろへ夫婦は歸り來りしかば皆悦ぶこと大方ならず就中お大と三吉とは半介夫婦を走り迎へて集ひし人と諸共に或ひは其無事なりしを祝し或ひは其遭難を弔むなど衆口云々盡しなきを半介は之を謝して此時始めて民へも駒吉が

四百最後の事を云々なりと告たりしかば、我民は之を開もあなす駒吉の桶を開き見て潜然と打泣けるを半介切りに叱り止めて我も血涙を匿しつ、臆て三吉お大に頼みて先駒吉の亡骸を香花院へ埋葬させ其他萬端取扱かひて、惣て辛やく事はてしかは打集ひし人々は私かに彼時相談を整のへ夫婦が爲に家を買んど其相談を語りたれども半介は受引ず、折角の厚意なれと拙者は別に所存あるゆへ其義は及ばずとて固く之を辭退しつ、臆てお大にも暇を與へて人々に別れを告げられ民を伴ひ住馴たる番場の河岸を後よして其日夕暮のころ南の方へど、足を疾めて立去たるを人々本意なき事に思ひて甚く別を惜みけるにぞ況てれ大は哀別の悲しさを袖に包かねん泣沈みつ、見送りたりとぞ、去程半介はお民を伴ひ番場を立去り其夜つ但ある旅籠へ泊り、此時夫婦相對して前々回の事の仔細の互ひよ知らざる處ろを云いで語りつ聞つ夜を深せしが半介は言葉を改ため右の通りの譯なるゆゑ以後専はら心を配りて兩市平を撃て取り先代の遺恨を晴さん幸はひ彼折市平が容貌年齢骨格まで大概見認て覺ゆるゆる後日これを尋ぬるにも大いよ便宜を得たるなり、又葛城が身の上も何と傳か一ツ工風して受出す筈で有なれど我夫婦斯の如く圖らず零落したるからは當分何とも詮方なきゆゑ暫時々節を待んど云よぞお民も別に手段なければ只管歎息するばかり其夜は空しく語り明し翌日の朝はやく夫婦此家を立出て八丁堀まで辿り來り爰に甲斐なき裏家あるを借宅して膝を入しが一資半給なき身よは朝夕を送りかねて夫婦ともく日雁を取り或ひは雪ぎ洗濯などして辛ふじて日を送るうち當年(安政五年)も何か過ゆさつ復二年の暮りを経て万延元年の春を迎へお民は二月廿日の夜に臣の如き男兒を産たり、朝夕の炊烟さへ思

明 八丁堀の裏家住居あるに、甲斐なき上總戸の締を固めし半介は彼旅仕度せし男を請じて火鉢の邊に座を占させ其姓名と來意を聞に男は暫時四下を見廻し臆て纏ひし脚袴の内より一通の書翰を取り出し之を半介へ手遞しするを半介は受取て臆近にある行燈へ火を點しつ、書翰を開き始めより終まで熟々と讀了りて手を組み頭を低たるま、何事か熟考しつ、件んの男に打向ひて額を合せ聲を密め「此返書をど存すれども書翰は兎角秘密の事の露顯し及ぶ媒酌なれば只口上よて返事を申さん耳を貸たまへト云ひかけて其ま、口を指よせつ、何事なるか良しはばらく耳語告る云々を彼の男は一々點頭「惣て心得ましてゝる然らば左様傳言すべし重要な事ゆゑ少しも疾くお暇いたすと云もあへず手疾準備を整のへつ、戸外へ立出會釋しながら尙宵暗に電光の消るが如く走ゆきたるを半介は見送りて然氣なき顔色し、二枚折の屏風の中に、スヤ／＼睡りし母兒を見やりて思はず落す一車に遺方もなき無量の苦心を袖に包みて退ざさつ、切りに歎息したりしとぞ」去程に半介は是より後ちお民も半樂

第五十一回

五百 八丁堀の裏家住居あるに、甲斐なき上總戸の締を固めし半介は彼旅仕度せし男を請じて火鉢の邊に座を占させ其姓名と來意を聞に男は暫時四下を見廻し臆て纏ひし脚袴の内より一通の書翰を取り出し之を半介へ手遞しするを半介は受取て臆近にある行燈へ火を點しつ、書翰を開き始めより終まで熟々と讀了りて手を組み頭を低たるま、何事か熟考しつ、件んの男に打向ひて額を合せ聲を密め「此返書をど存すれども書翰は兎角秘密の事の露顯し及ぶ媒酌なれば只口上よて返事を申さん耳を貸たまへト云ひかけて其ま、口を指よせつ、何事なるか良しはばらく耳語告る云々を彼の男は一々點頭「惣て心得ましてゝる然らば左様傳言すべし重要な事ゆゑ少しも疾くお暇いたすと云もあへず手疾準備を整のへつ、戸外へ立出會釋しながら尙宵暗に電光の消るが如く走ゆきたるを半介は見送りて然氣なき顔色し、二枚折の屏風の中に、スヤ／＼睡りし母兒を見やりて思はず落す一車に遺方もなき無量の苦心を袖に包みて退ざさつ、切りに歎息したりしとぞ」去程に半介は是より後ちお民も半樂

六百も殊のほか肥立よくして既や手も掛らず成しかば、或人の世話に依て尾張町三丁目の仙徳屋と云ふ呉服問屋へ奉公に住込つ、己が口を糊しながら其給金を取り宿所へ送りて妻子を養ひ居たりけるが或時久しく打絶居たる吉原の若者の作藏が尋ね來しにぞ半介は身の零落に在らずもがなと思へども有繁に顔を見られては知らずとも云かねけん立出て挨拶しつ、先は葛城が安否を問ふ作藏は腰を屈めて別後の口誼を演も丁らす葛城より届けたりとて一ツの小包を指しながら「實は先日用事があつて此處ろを通りかゝり聞らす旦那が店頭よれ出に成たを見受ましたで、葛城さんへ其事を話しました處ろチイ、泣ての大體こび今日は旦那へ此包を届けてくれとの頼ゆへ持参いたしたとの口上に半介は不審晴ねと其包を受取るに重量なるにぞ心ひろかに不訝たれと傍の見る目を厭けん其包の事は何とも云はず只管に作藏が長途の使を勞らひて、返事は何れ此方より遣はずと致すへし兎もあれ一烟吸て行つ云を聞かけ此方は手を振り外に急ぎの要事もあるゆゑ今日はお別れ申しませと云すて、急がはしく歸り掛るを半介よびとめ葛城へ言傳の言葉短かに頼つ、其儘奥へと歸入しが其日の暮、を待かねて鉄小燈を携さへつ、物置庫の内へ入り人目を密ひ葛城が届け越たる包物を打開きみれば這は奈も四百兩の封金と多一本出たるよを半介ますく怪しみて其多を推開き讀下し見れば思ひきや彼金太が改心に回て最初由衛門が奪はれたる大金が復しゆゑ折から彼方の貧苦を幸はひ差贈るゆゑ此金よて再び世に出で花々しく俠氣を磨き候へど云ふ最殊勝なる文言よして且是まで尋ねたれど其行方不明と依て云々なりなど書るゝあるにぞ半介は身の毛の立ほを驚ろさ感じて多売を顔に推當て金を仰ぎ、感涙拭ひあへず暫時吉原の方に向ひて合掌しつ、心中に其厚意を謝したるま、頭を低て居たりしとぞ

第五十二回

絶て久しき葛城が珍らしからぬ事ながら常盤心の色かぬぬ實情を包し大金と思ひを演し文の面よ、剛氣不屈の半介も不覺の血涙よ暮れ果て暫時ろの饑ありたりけるが其あつて心氣を屬まし此年來思ひを碎き工風を凝して心底の秘密の事を彼方此方と、人は勿論神にさへ知らざしと思ひ壯士が、一旦搦ひ一言の葉に花を咲かせ實らすべしと千辛萬苦の中よ在て彼中將が御首級をすし受んと幾度か或ひは虎穴に入たる事あり、或ひは龍潭に潜し事あり、火を踏み刃の刃を渡りしも數回よ及びたれと運拙なくして事を遂す本意なき事の限りなりし、然るに先夜の書翰よ依れば日ならずして人々が事を起すと覺たり就ては我も應分の志念を致さんと思ひよければ貪苦の中よ妻兒を捨置戦死せんこと有繁と心ぐるしかりしが今圖らずも葛城より多分の金を贈くれしは勿怪の俸伴此事なり卒さらば立歸り密ひ密ひよ準備せん悉しけなと心中よ思ひ且はかりて手疾く文と封金を内懐中へ納めあへず物置庫より走り出で俄かに痛氣なりと云たて強て身の暇を取り夜を返て八町堀の宿所へ歸り來りしとぞ、然れば民は夜に入て良人が俄か歸宅したるは故ある事と心配して其仔細を尋ねれと半介すこしも頓着せず只止がた所存あつて急よ歸り來りしのみ心配するよ及ばずとて是より十日餘りを經つ、三月二日の夜となりぬ、今夜は宵より北風烈しく冬にも七百あらずで降出せし雪よ肌も凍るばかり買片ろぎの軒間より吹入る吹雪たぬ難さよ半介は走

八百 刻より出て酒肴を買來り夫婦合膳愉快氣に世の中の雑譚などしつ小夜ふくるまで飲過せしが時  
起出て豫て準備の裝飾を整のへ一刀たばさみ短銃の玉込したるを携さへつ、我家ながら音  
させしと出足入足裏口より戸外へ立出で草鞋を穿しめ笠を翳して一散愛宕の方を心指し  
彼若鷹が小鳥を追ひ脱兎の山を走るが如く何方ともなく走去たり、去程に、明れ三月三  
日と成て上巳の佳節式禮めでたく在江の諸侯等陸續連綿何れも登城の行列立て見附くへ  
線込たるが尙降らざる雪を凌ぎて此時水戸の脱藩浪士等、十有七名櫻田見附に井伊中將を  
狙撃しまいらせ遂に其おん首級を得て、企望を遂たる騒動あり是は既に世の人の周ねく知  
れる事なれば説す、然れば浪士の中に於ても彼有村治左衛門は振群非凡の働らさを顯はし、  
群がり蒐れる中將方の太刀を開きつ打拂ひつ時移るまで闘かひたるが其身も既に此彼ど既  
や數ヶ所の深手を負て今はや雪も踏入り最も危うき後の方に鐵砲の響一發して當の敵手を  
撃倒せしかば有村不思議に危急を脱れて味方の壯士の後殿しつ、馳て其場を去たりしかば  
騒動やうやく治まりたりとぞ當時實に萬延元年三月三日の早朝なりしと

傳 第五十三回  
夜を込て、良人が密かに出行しを知らぬれば民は宵の間も常もあらで半介が盛漬したる酒  
の酔も、寒さを忘れて打臥居たるが明方ちかく成ころをひ半葉が泣聲耳に入りて不圖目さ  
めつ、傍を見るに半介の影もなし、扱は剛へ行たるならんと思ひにければ氣に止す乳總合  
ませヌヤ〜と睡る半葉に添寐して眩枕しつ乳液も復寐の夢を結ぶ折から雪は晴ねと黎明

の軒端に來なく群雀、求食かねてや露すしき聲聞つけて民は起出で見れば良人は空蟬の  
裝束の先の臥床のみ冷たる儘に儲けありて其人は未だ影なし、最初こそ荷且の事と思ひて  
扱止たれ今は密かき驚ろきつ又不審つ眉を蹙め「モシお前さん〜と二聲三聲立れど荒  
神松の點頭のみ誰とて應答を爲ものなきよぞ「ハテ今時分何したらふ買物にでも行たか知  
らん兎もあれ不審な爲体くトロの内に啣やさながら半葉を密と叩きつけ起出で彼方此方ど  
家内の容子を案するに裏口の戸を引寄たるま、輪鎖鉄を外して在り殊さら常に秘置ける宗  
治 近の一刀と短銃も紛失して其邊總て狼藉たるにぞお民は今さら仰天してハッと驚ろき胸を  
打てば既や堰ぐり來る血の涙を拭もあらず聲を慄はせ「ア、知らず居たく有緊剛氣な  
半介どのも斯必迫して世過さへ爲かねる今の貧しさに私と半葉を置去りして逐電されたか  
埃、まア何と、アノ情なき爲されかた恨めしひこと悔しいこと聞ぬぬ人かト吾を忘れて撞  
客と倒れつ泣伏は物の響も目を覺し共音も泣ぬ幼兒を抱き取り抱しめて身も浮ばかりいは、  
しる瀧なす涙すでも受け缺受て良暫時、堪ぬばかりも泣入たるが斯ては果しと氣を取直  
傳 し先兎も角も準備して心當りを尋ぬへし、尋ねて逢すば此兒と共に生るも死ぬるも母  
子が一命の天に任せ奈にとも成ゆくより外に爲方は無ものをと分別しても復更禁めかね  
たる涙の間より見れば半葉が地顔、なんにも知らず歸嫌よく胞も隠されニコニコと笑ふ  
目元も口元も良人瓜をニツと思へば是も涙の種となり果しもあらぬ悲しさを辛やく思ひ  
九百 止まりつ、臺處へ立出て土籠の下に折くべる、鹿菜も連理の睦ましく枝より悪き身の墓な  
九百 き是も又た涙の種よと立たる儘に打泣しがア、我ながら愚痴なりしと思ひ返して甲斐々々





十百 しく水を入んと蓋の蓋を取除け内を差覗き、但見れば奈に良人が手跡の、遺書を一通と封  
 じたる金二百兩とを釜底に納めるよぞれ民はいよく打驚ろきて慄へる手先に取揚つ、打  
 返し見れば良人より我も常たる女なるにぞ封推切て讀下すよ何事も省略しけん文面すこし  
 の淡白に「只我等こと仔細あつて今夜よぎなく逐電したり就ては殊に依り一命なし若我等  
 歸らずは此金を以て兎も角も半葉を養なひ世を渡れ、命あらば遠からず再會いたす了簡な  
 り但し我等逐電一義は夢も人に漏すべからず此手紙は一覽のうへ火に投じて焼捨よ又明  
 日中いづれへなりとも速やかに轉宅せよ尤も人よ知られぬやう家主其他近所の者へは引  
 越先の方角を違へ、宜しく申し繕ろひ置べし尙々引越先の義は小さき紙に相認ため竹筒の  
 内に込て麻布一本松の根方へ堀埋めて置申をべし只願はくは半葉か養育偏に頼む云々の  
 文面にて有しかばお民は恰がら夢情に分よしもなき意外の始末を再三再四思ひ測れど量り  
 難つ、茫然と暫時く頭を傾ふけたるま、尙打察じて居たりしとぞ

第五十四回

傳 生來き賢義あり且惻發なるお民なれと半介が遺書の文の情實を判じ難て暫時思ひ煩らひし  
 が「兎も角も一命あらば程なく遇んと認ためある、筆の跡こそ力なれ逐電したるとの本は  
 奈なる情か知る由なけれを願はくば一命めでたく疾く歸つて参られたし又不思議なは此大  
 金、今の身分で何を伺、才覺された物なるか良人に限り飢死に爲とも汚ない心は持ぬ筈ゆ  
 る他人の物を何と云ふ迂參な事は有まじさか何として調達されたか心得がたき事かなと思  
 案の胸を痛むれども思ひ難つ、小首を傾ふけ「右さへ思ひ分かつたに今日の中に移轉せよ

百 移轉先を云々せよなを彌々増々怪しき事なり、兎もあれ昨夜の爲体くは一通りの事にはあ  
らじ所詮何方を尋ねたりとて容易は遇がたからん遮莫一の文の文面は隨がひ何れなりと  
も轉宅して可會の時節を待んハテ異な事に成しものよト再び思ひ直しつゝ、先は金と遺書  
を佛壇の内に納めて手疾煮炊の準備を整へ幼兒の小禪なども残る方なく用意して件  
の金の封を切り店賃其他少しづつ、の買借の拂ひを濟せ多くもあらぬ物ながら世帯道具を賣  
明 尽して家主はじめ近所の者へは淺草最寄へ移住せると加減よく云ひ置つ、母は襪を纏へ  
ども兒には裝飾す麻の葉の新らしき生衣を着せて半纏背負十文字、いと甲斐なく急ぎ行  
治 を整へ其日眞晝の過るころ深雪ふみ分け進々ど入丁堀を立去つ、何方ともなく急ぎ行  
俠 と、是は之れ説すとも半介が約を履で非伊中將狂擊の一議に加はりたる處より妻子に難  
義を掛させしと思ひ圖りし遺書の文面に依り其意を得ねどもお民は云はれし儘に隨がひ事  
の爰に及びしものなり然れば櫻田異變の最中、土手の上の並松蔭より鉄砲を放ち有村が危  
急を救ひし曲者は是吉田半介なりしと一切話柄は暫時止めて爰又、彼葛城の父由衛門  
傳 が後譚の始終を尋ねるに由衛門は彼月彼夜、淺草の馬道にて金を奪ひし曲者を追捕へんと  
て狂氣の如く其跡を慕ひながら彼方此方と走廻りしが奈にして捕へ得べき徒らば身体疲れ  
て今は一歩も進み難さこ淺草寺の寺内へ入り但ある石段は腰打かけつ、爰に熟々以みれ  
ども緊要の金を失なひては番場へも歸り難く我子ながら葛城へも面を向へき由なさに彼是  
心を苦しめつ、其工風を凝らしたれど奈んとも詮方なき常感せしま、眞暫時茫然として  
居たりしが一兎もあれ空く勘考せしとて世よ益なき事なれば此儘一旦古郷へ歸り假令無理

なる手段を爲とも右の金を調のへ來り一時も疾く我娘を救ひ出より外に詮なし、番場へは  
氣の毒ながら今夜の急を救ひ難しト有業老効分別疾く其場を立去つ、然とても氣懸な  
ればと土屋の邊を徘徊して密か其容を窺ひしに半介の母は亡なり惡漢吉は殺されて難  
題辛やく治りたりとの好便を得たりしかば由衛門大ひに安堵し僅ばかりの端錢を路用し遂  
明 に古郷高山へ歸り扱入方に周旋して金を得んと尽力したれど四五十兩は調達せしが四百兩  
の大金は迎も得がたく覺えしかば先年の負債の爲は永く逗留すべきはあらねば馳て江戸へ  
治 歸らんと思ふとき、圖らずも疾病に罹り或方へ止宿して爰に久しき月日を送り當年万延元  
三月の初旬、再び江戸へ出來りつ所用あつて麻布へ廻り夜に入て一本松の邊り近く來り  
俠 しとき但みれば一人の女子ありて松の根方を掘起し何か埋め居る状況なるにぞ、由衛門不  
審はれず何事なるかと小隠れて息を凝しつ眞暫時其爲体くを窺ひ居たるが暗に紛れて心得  
客 かねしと

第五十五回

傳 重説外木由衛門の古郷高山より江戸へ來り所用あつて麻布へ廻りて一本松の邊を過るも但  
みれば一人の女子ありて松の根方を掘起し何物なるか埋め居るにぞ由衛門不思議に思ひて小  
隠しつ、眞暫時其爲体くを窺ひ居るに彼の斯ども心附ずや懸て之を埋め果て裾袂の塵  
打拂ひ、四下を見廻し噂を立出で足を疾めて一散に芝浦の方へ走去しかば由衛門いよく  
百 怪しみ彼れ何を埋めたるか兎もあれ昨夜の爲体くは一通りの事にはあ  
三十 是も亦た四下に心を配りつ、堀の中へ進み入て埋めし物を掘起し見れば小さき竹筒なるゆ

百箇の中は指を入れて其中を探り見たるに半切の端は書たる書附様の物いでたり、時又宵  
 暗の空くらけれを星の光に透し見るに「芝濱松町一丁目、家主源兵衛店、土屋たみ」と記し  
 あるよぞ由衛門大ひに驚ろき「然れもへば今の人は舉動骨格ごとくお民に恰く似た女  
 なりと腹の中に思ひ居たるが扱は果してお民でありしかハテ然よし心得がたきは彼何故  
 此書附を、此處へは埋めたる仔細あるべき事なるべし且は彼れ濱松町、云々と書たる下  
 へ土屋たみト記せしは濱松町より濱松町へと轉宅したるものなるか兎もあれ思ひ設けぬ事  
 其居所を知り得たれば是より尋ね行たるうへ過て萬事の話を聞べし又此筒を埋めしは何  
 か要ある事なるべし元の如くに爲て置んト且疑がひ且思ひ懸て仲んの竹筒を元の根方埋  
 め置つ、南の方へと急ぎ行しは最不思議なる奇遇なりけり、去程に由衛門は只管途を急ぎ  
 しかば程なく芝浦通りへ出たり因て濱松町へ行き家主源兵衛の許に就てお民が事を尋ねた  
 るよ立地ろよ知れたりしかば糸立を脱ぎ笠を除きて其家の門邊より徐々よ呼門進み入を  
 民は今方歸りし儘にて隣家に預けし半葉を受とり行燈へ火を照し居たるが、火影に信と此  
 方を見て驚ろくこと大方ならずまア、何とお珍らしひ伯父さんでムひ升かサアお上なさ  
 ひ升ト云ふ聲さへも口障しは此項の憂難と良人が家よ在らぬとの打續きたる歎きの數を  
 語る人なき昨日今日の親に均しき伯父に遇て既や胸の中の迫りしなるべし、由衛門も老眼  
 にお民の面を透し見て打悦とふこと限りなく「やれ、お民無事で居たか扱めでたい事  
 であつた、半介殿は奈が成された用違よでも行れたかト問れて此方は堪りかね目を推拭つて  
 聲を曇らせ「サア其良人の事に就ては云に云れぬ仔細があつて只今家よは居ませぬが其仔

細とすすれも鳥渡とはお話申されませぬ、先まアあがつて下さひ升ト云れて此方も何と  
 く胸は騒げを身は在はす徐々よ框へ腰うちかけ草鞋を解すて座打拂ふを傍よ寄つ、彼是ど  
 世話するお民が片手業に、抱か、ぬたる半葉を見て(由)ヤ、お民子持よ成つたか、チ、と  
 れ、ヤレ良子だ、男か女かウー、笑うは主や出来したなト我子のこと、譽られて足る  
 親情、れ民は思はず莞爾わらひ「ナニさ良子おやムひませんよ先達て生れたばかり漸々此  
 頃赤色が脱て子供らしく成ましたト云つ、虎子引よせて小用を爲する脱間を差覗き見て由  
 衛門「チ、ちん、だナ得來、親父に似て違ましひ良容貌だ名は何と(お民)アイは半葉  
 と申し升よ、ろれ半坊れ伯父よ少し抱こト渡されて由衛門は長道の疲れも忘る、はかり嬉  
 しがり抱き取たる幼児を徐々抱えて復更に思ひ廻せば我子のお七も、時代時節と云ながら  
 並々よして世にあらば斯いふ子供も儲くる頃よ、アラ儘ならぬものなるかな可愛きものは  
 此幼児、不便なものにはアノれ七ト思へば知らずハタ、と流る、涙いだかる、半葉が顔よ  
 降注ぐを知らぬ赤兒は機嫌よくスヤ、と睡る無煩惱、大人はづかしさばかりなる此間にお  
 民は齟齬、立働らきて有合の酒肴を調のへつ、膳推据る折しもあれ増上寺の鐘聞近く聞え  
 て夜は亥の刻とぞ成たりける

百 夏あつて由衛門はスヤ、と熟眠りし幼児をお民へ渡し(由)エーと別れて尙やうやく、一  
 十年か半年だのに何たか悉皆容子が變つた兎もあれ其方か顔色と云ひ、家内の搥梅すべての  
 五十 内情とふやら念に懸つてならぬ、サ、一通り話してくれよ聞してくれよト問かけられお民は

百思はす大息つき(民)サアお話しすすも一通りや二通りの云々ではムいませんが先篤くり  
と落附てれ聞なされて下さひまじト云ふも涙のチロ、暫時く四下を見廻しつ、扱こ  
れより前々回の由衛門が知らぬ回を人のこと我の悲しき始末うれしき事から憤怒りの  
こと不審のこと危うき事、臨みじこと尙且半介が事のうへと逐電したる爲体くと遺書の趣  
ひきと金のこと轉宅の事、惣て別後の事の仔細と昨日今日に至りしまで心勞の一五一十を  
餘さず漏さず物語り且言葉を変ためて由衛門は又何故に彼折限り影を匿し今日まで何れへ  
潜み居たるか何故音信不通と過か又今夜は奈なる事より爰を知りて尋ね來しか不審と堪  
ずと一々語る事を語り了りて復問かへせし言葉の始終を由衛門聞もあへず殊のほかなる  
凶變に驚くこと大かたならず兩眼を見はり小膝を前ませ歎息しつ、目を推拭ひ(由)世の物  
騒どは云ながら今聞ても身の毛の立はを驚ろいた事で有た、扱俺は又云々でト云を話の端  
切ら此身は馬道一條より一旦古郷へ歸りし事と其歸國せし事の情と久しき間だ疾病と罹り  
辛やく近頃古郷を立て先のはと江戸へ着し一本松の邊りにて圖らずも竹筒を堀出し民が  
居所を知りたる事より尋ねて爰來りしまで乃ち前回の手續を物語り且お七の葛城が事さ  
へ彼此と云ひ出で時の移るも知らぬばかり互ひに積る話の數々、云盡し譚り盡せしかば由  
衛門首を傾ふけ「然いふ譯なら半介殿も程なく歸るであらふけれど、相見ぬ中は苦勞なり  
ト云にれ民は尙さら氣を揉み「程なく歸ると云ますけれど遺書の中にもある、一命有たら  
云々との文句が朝晩心懸り實は寐にも眠れぬほど心配で、右や左や取紛れツイお七  
さんも尋ねずにト云を打消由衛門「如斯ことは何でも宜が先兎も角も半介殿が歸つて來の

と待て居て遇て始終の容子を聞き其上で何事も相談するよりト詮な「只管主が一命めで  
たく歸つて來のを神佛へ祈るが今の肝心だト慰さめ語る時しもわれ夜は深々と更渡りしか  
ば、れ民は辛やく心づき冷たる酒を暖ためつ、心ばかりの饗應に由衛門も懸念なく酒盃を  
重ね箸を取て暫時酒を飲過し餘談は翌日復語らんとて聽て枕に就たりと云ふ、扱此話は暫  
時く止めて爰に又吉田半介は、櫻田の一義に狗死を爲すして事の果たるのち其場を立去り  
處々方々と身を匿し影を潜め居たりしが今は詮議も簿らぎしかば或時密かに隠れ家を出て  
久しく脱さぬ垢を去らんと本郷邊の湯に入て身体を清めつ、衣服を着んとて升際に到り我  
衣服を取出すに我物どては帯さへなく見なれぬ汚穢衣類あるにぞ扱は盗み取られしか失機  
にけりと舌うちして暫時當惑して居たりしとぞ

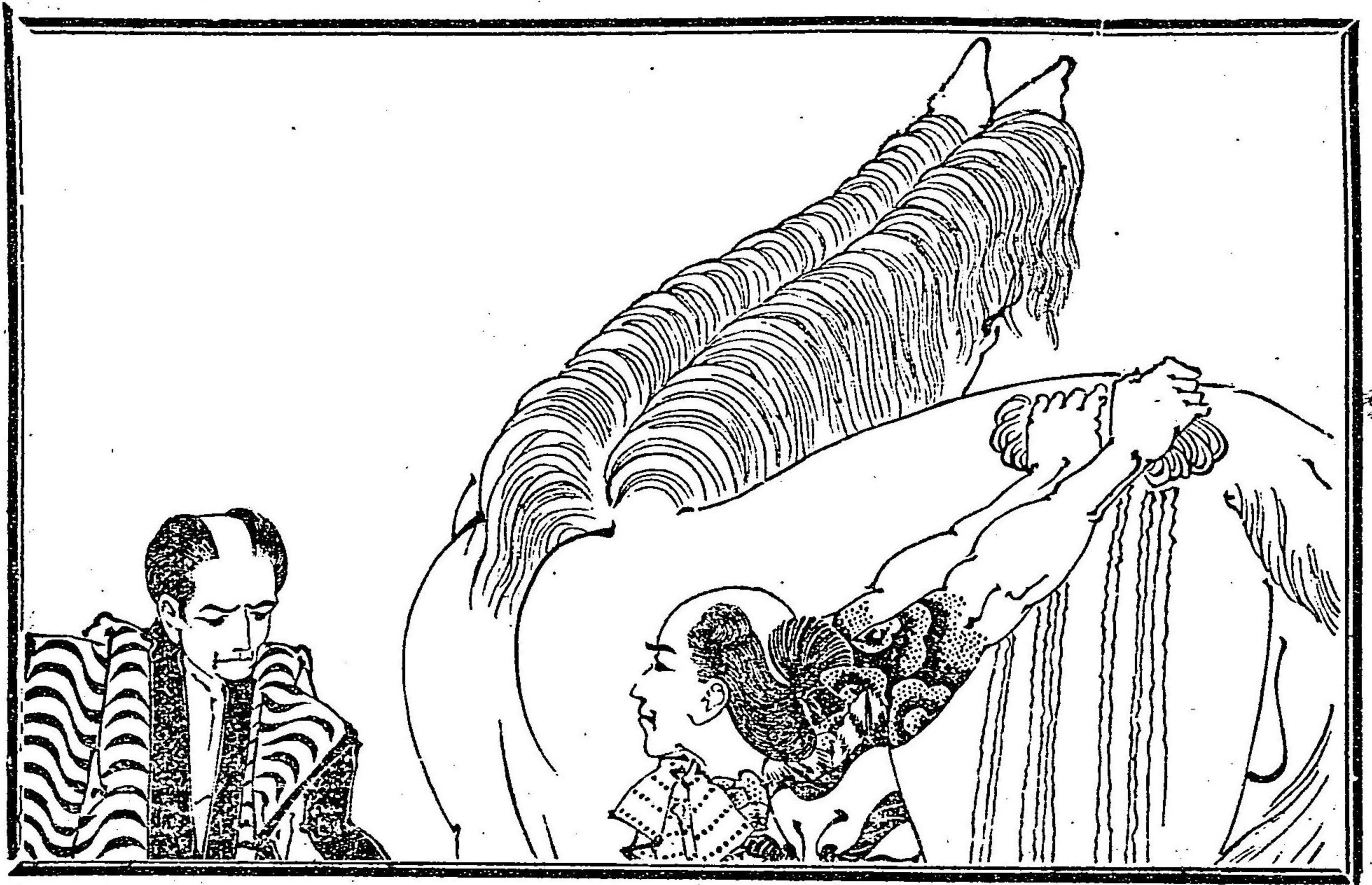
客 實は禍害の胎める處ろ奈なる場所いかなる時日、奈なる物も有べき歎、圖り難きものなる  
かな然れば吉田半介は本郷邊の錢湯よて我衣服を盗れたるが其品物は粗物なるゆゑ惜むべ  
き物にあらねど右の衣類は仔細あつて奈なる人にも選されぬ心苦しき由ありけん心痛とる  
と大方ならねど良あつて胸を叩き、ア、殘念の事を爲たり然れども千度万度、後悔すると  
て詮なき事なり只此上は運命を天に任せて置より外なし嗚呼止なんト心の中に慨歎し  
たる、半介は湯屋の主人が種々に打謝て着更の衣類を出せしかば暫時貸たまへト挨拶し袖  
丈無揃の衣服を纏ひ纏て此家を走り出つ、隠れ家へ歸り來り是より久しく處々を經廻り盜  
七され我衣類を只管に索ね求めたれと遂に得ること無ししかば爾々益々嗟嘆したれと今は

傳 俠 第五十七回

と待て居て遇て始終の容子を聞き其上で何事も相談するよりト詮な「只管主が一命めで  
たく歸つて來のを神佛へ祈るが今の肝心だト慰さめ語る時しもわれ夜は深々と更渡りしか  
ば、れ民は辛やく心づき冷たる酒を暖ためつ、心ばかりの饗應に由衛門も懸念なく酒盃を  
重ね箸を取て暫時酒を飲過し餘談は翌日復語らんとて聽て枕に就たりと云ふ、扱此話は暫  
時く止めて爰に又吉田半介は、櫻田の一義に狗死を爲すして事の果たるのち其場を立去り  
處々方々と身を匿し影を潜め居たりしが今は詮議も簿らぎしかば或時密かに隠れ家を出て  
久しく脱さぬ垢を去らんと本郷邊の湯に入て身体を清めつ、衣服を着んとて升際に到り我  
衣服を取出すに我物どては帯さへなく見なれぬ汚穢衣類あるにぞ扱は盗み取られしか失機  
にけりと舌うちして暫時當惑して居たりしとぞ

既や術計盡て此事は思ひ止まりつ斯て或時麻布へ到り例の松の根方を掘て謀じ合せし女房  
 八民が濱松町の宿所を尋ね夫婦親子叔姪一度に再會の企望を遂しかば、お民由衛門大ひよ  
 悦び積る前後の話は渉りて凡ろ十日餘りを経たるが半介は件の二人は胸中の秘事櫻田一  
 義を、内密に物語り且先さる或湯屋にて衣類を盗み取れし事も話の序に語り聞せ、右機  
 の譯なるゆゑ所詮在宅かなひ難し因て此身は云々の隠れ家に潜み居り時節を待て歸るべけ  
 れば伯父御はそれまで爰に止まりお民母兒の後見たのむと懇切に相談せしかば二人は之を  
 聞もあへず放しどもなき情を爲れを強止をして禍害あらば却々に悪かりなんど覺悟を極め  
 て承知せしよぞ半介深く安堵して是より隠れ家に潜匿しつ、世の風聞に耳を立るよ果して  
 吉田半介なるもの、櫻田一義の餘類なりとて探偵敷しき趣むさなるよぞ半介は扱こそ急  
 き江戸を立去りつ、お民へは飛脚に托し特と離縁状を送り置つ、我は足よ打任せて北陸  
 地方を漫遊し或ひは人の食客と成り或ひは劍道を教授して一年二年と月日を送り旅に貳年  
 の年を経て、今年文久二年七月某の日、久方ぶりに江戸へ歸り外ながらお民一家の安危  
 を探りたる處ろ別に異變なかりしかば安心して我身の上の風聞を開たるに曖昧として不定  
 なれを尙お民が宿所へ致らず或夕風姿を變て例の佐野橋へ打登り葛城へ再會せしかば、葛  
 城は夢の如く現の如く纏り着て幾年か相見ざりし恨み辛みの數がざり泣つ口説つ果しなき  
 まで思ふ程を語り尽し、又先月頃よりして片岡兵馬と云ふ武士が擯却どもく通ひ來りて  
 遠から身受せんとの云こみの辛さ悲しき其武士は日外ぬしが始めて爰よ遊びしとき其晩  
 登つた人にして先頃より見立替の有がた迷惑昨日今日は悪くどく病はられ困り切て居ます

九然なきだま、物見だかきは都會の常どか况んや此は吉原の花の遊廓は俠客が鬼をも挫がん  
 第五十八回  
 トの話の筋子に聞耳立たる、半介は長暫時うち察して居たりしが忽地小膝を打鳴しチ、其  
 武士ころ殊に依たら飛彈の金太が話し開る我年々尋ね惹せし曲者なる哉も聞き難し若此次  
 參つたら簡様くな處ろまで密かに知らせてくれられよ努々それと知られぬやう心つけよ  
 ト頼み置き扱これより酒宴を設けて別後の始終と由衛門が變りなく暮す事など夜と共に語  
 り盡しつ後朝の別れ惜みもあへず嫌疑ある身の半介は急がしく帯引しめ懸て佐野橋を歸  
 り去しが斯りし後は事に紛れて復當年の冬をも送り文久四年と成たる程に吉原の仲の町へ  
 正月初旬より梅を植附例の甘露梅(梅實漬の名)の準備をるなど殊のはか賑はひしかば去年  
 より打絶居たりし彼片岡と名告る武士より明夕は梅見を兼ねて身受に來との文を持せ葛城が  
 許へ使夫來りぬ、葛城へ期したる事ゆゑ之を受て半介が隠れ家へ使夫を走らせ其事を知ら  
 せしかば半介はやく心を得て十二分の準備を整のへ例の宗近の一刀を櫛頭、翌日の夕暮頃  
 より吉原へ行き彼方此方と徘徊しつ、在どころへ件んの武士は斯とも知らず悠々として入  
 來りしを枝生繁りし梅の影より右か左かと窺がひ居たるが今來りし武士を見るに是ぞ年來  
 遺恨ある彼團市平にて在しかば、半介は斯と見るより胸騒々まで打悦びつ、暫時も措ず  
 ツカノと進み寄さす市平が刀の鍔を右手に把り左手は蹴揚し装束を引あげ尻高くと端  
 折ながら二歩三歩マヂく引戻しさま入り蹴たど疾視で身構したりと畢竟半介此場  
 へ於て首尾よく本意を遂るや否や尙次回に説續べし



百顔色しひの、武士を遮り止めつ、事ある可と見へたる程に、往來のもの近所の者どもも、  
二十ハ喧嘩よト云より早く八方より走集まりて件んの二人と取囲み遠巻にして見物しつ已が種  
二々なる評を立て一群頗る器々たれども、半介これを物とも爲すして圓市平を疾視つめ  
(半)今さら兎角と云はずとも物て汝れに覺ぬが有ふ、今日ぞ番場の土徳が遺恨を晴す覺悟  
しる斯いふ我は土徳に由縁を結びし半介なり圓市平準備せよハテ好處ろで出遇たなト云は  
明 れて彼方は胸頭へ打る、釘か録よあげられたる絶体絶命、今は逃とも脱さじと思ひにけ  
治 れば肚胸を決め(圓)夢も知らぬ云が、り聞か耳は持ないが其方は世に聞かじ理非を辨せ  
ぬ亂暴者ゆゑ、今奈ほどに辨解も指を合へて引退まひ然らば無益の殺生なれを企望とあ  
俠 らば是非に及ばず首を落して此方が刀の利味試して遣ふか(半)扱々卑怯な其一言、事の遺  
恨は右のみならず我家を焼打され義弟駒吉を殺されたる、積る遺恨の覺あり論は無益と  
客 キリ(うて(圓)ナを下郎が武士へ對返す)も不禮の云かけ覺悟を爲るト云もあへ  
ず紐引ちぎつて脱捨る彼袍と共に身を開きて振放したる大刀を頭の上へ振舞し眞顔臨んで  
打て来るを、物々しやと半介も飛退ながら宗近の鞘を拂つて受流し受流しつ、切結びしが、  
傳 市平は最初より隙もあらべ脱れんものぞ、思ふ心や有たりけん連りに太刀を打込ながら  
七八合及びしとき刃を引て脱兎の如く大門口より一散一宙を飛で逃去りしかば、半介か  
くど見るが否や我も飛鳥の勢は烈しく蕤然と追かけゆきつ右に走り左りに走り裏田前へ  
と跳り出て、太郎稻荷の森蔭まで追迫りつ、及び腰に刀先さかり破と切る拳の返り市平は  
脊筋を尻まで切さかれて暫時も堪らず仰むげさるに墮と倒れて悶搔どころを半介は得たり

とばかり飛走りさま打下す鏡とさ太刀風ふしながら受損じたる市平は首をハッンと打落さ  
れて叫びも果す息絶たるよぞ、半介辛く一息つき間近き清水は咽喉を潤はし四方を信で見  
渡せども此邊は晝さへ淋しきに況て今は全たく暮はて人足は無ししかば僅かに心を安んじ  
て刃を納め死骸を蹴返し思ふ限りに罵り責つ、手足に點たる血液を拭ひ塵うち拂つて悠  
々と影を暗まし行んと爲たるが忽地に心附けん立戻りつ、市平が懐中を掻探りて取出した  
る胴巻の金高を計算るに彼れ高城を身受の爲か五百餘金所持してあるよぞ半介ハ胸の中に  
「ナト不快なる所業なれど此金の要用あるゆゑ我家と諸財産とを此奴に焼けた賠償と奪ひ  
取て行べきなり最早明日も知れざる一命、息ある中に恩義に報ゆる、準備して置べきぞ  
今さら些細な小謹を守り居べき時にあらずト、思ひ決めて件んの金を懐中へ確かと納め足  
を疾めて東の方へと類被りしつ糸遊の消るが如く走り去しと

第五十九回

傳 初前回の談話は暫時く措、爰に又、先年半介に殺されたる彼早稲田の吉が餘類に蛇の目の  
千太と云ふ者あり此奴も元來惡徒よして盜賊賭博を業として惡事よ掛ては然る者なりしが  
斯て此蛇の目の千太は日外賭博よて大ひ又失敗、甚はだしく困迫せしが其後は爲こど作こ  
ど一々に組替ひ兩三年来處々方々と徘徊して乞食と成り果、辛く一命を繋ぎ居たるが千太  
當年(文久四年)或日のこと兩國橋の橋間に座して身の中の武虫を潰し衣服の襟を彼方此方  
と打迎して居たりしが不圖心つき襟を揉み何やら中に物あるにぞ不審ながら襟の縫目よ指  
三十二百 頭を挿入れて引綻さつ、更たむれば誰か之を縫込置けん短文の書翰が出たり、之は變なト

百 打開きて讀んど爲れど一字も讀ねば舌打して書翰と引伸へ鼻を吐んと爲る處ろを豫々かれ  
を粗ひ居たりし捕手の壯俊兩三人、バラ／＼と走り廻りて驚ろき透つる千太が背中を濃  
の十手ふりわけ五ツ六ツ打さしめ蹴倒しあへず萬手小手も舞々ど縛しめて件んの書翰も把  
揚つ、既や立ませひノ聲諸とも土地の番屋へ引揚たるに予懸て巡廻の與力來りて一應千太  
の身元糺し又捕手が差出たる書簡を受とり讀下せしが讀も了らず大ひに驚ろき、是は之れ  
先年三月櫻田見附の傍に於て井伊中將を襲奉まつりし惡徒より、惡徒へ宛て通牒したる書  
翰なること隠語なれども疑がひ無し扱は此乞食ころ容易ならぬ曲者なりソレ引打ひて物て  
の事ども白状させよト焦燥にぞ捕手ども心得たりと右左りより立か、りて縛しめられたる  
千太を引据、紙糾棒を振舞して背尻の肉の碎くるばかりよハッ／＼と打懲せしかば千太  
こらへず息も絶々(千)ア、少々お待たせへ何も敷も少し上／＼と泣叫べば與力は點頭  
棒を止させ(與)ヨシ、然らば先尋ねるが其方向いふ次第が有て此手紙を所持して居たぞ(千)  
ハイ其手紙は實の處ろ、襟の中に這入て居たのを俺ちも今日まで知らずに居ました(與)ナ  
此手紙が襟の中、這入て居たとい何いふ譯だ(千)何いふ譯だか存じませんが先刻兩國  
の橋の下で武虫を驅ながら氣が附まして、襟を綻ひて見ましたら此手紙が出ました譯で(與)  
ハ、然なら其衣服は其方新らしく拵らへたのか古着物でも買て来たのか(千)ハ、此の衣服  
は或る古着屋で(與)買て来たぞ申すのか倍と然に違ひなひかヤシ偽はりを申すと最後、直  
さま尻が割るが宜か、其時は何くらひ痛い目も爲せなさやならず又其罪も重くなるが然を  
覺悟で偽はるなら偽はつて申しあげよ、サ、何じや其古着屋は何町の何邊で濃籠には何屋と

明 有たか突合せやうサツサと申せト灸所を開れて此方はギツくり眞暫時勘考居たるが思へば  
我身の罪科こそ敷へ盡せぬ程なるに此邊の事で餘れる罪を、塗匿さるゝもれならば却々に  
傳 傳伴なるゆゑ先云立て試みんと狡猾の思案胸を決め(千)實に恐れ入りましたが此綿入は盜  
た物で、拵らへた物では無いとせん(與)然れば何で盗んで来た又持主の何者だツた其邊が  
明 大事だ明瞭させ(千)ハ、此綿入は妙な譯で實の處ろ一昨年中、本郷の湯屋へ參つたとき、  
傳 俺ちが同類早稻田の吉が、仇敵の半介と云ふ、悪い野郎に出遇せたから、打つて遣ふと  
思つたが其半介と云ふ奴は旦那衆も御存じだらふ、先頃番場で土徳と云ひ俠客を售た野  
傳 郎だから惣じつか俺等風情が手出を爲たら反對に打られ襟と思ひ直玄切て其腹冷にと其奴  
の衣類を板間かせぎ盗んで来たは此綿入、それから以來二年ばかり襟の中に其手紙が這入  
て居たとも知らねへで昨今まで着て居た譯でも、是より外は塵ほども匿した事はムへや  
傳 せん願ぞ悲慈に板間たけの御處分で濟ますやうお斗ひを願ひます手紙は定て半介が縫込  
で置ましたか其邊は一向存じませんから宜しく願ひ申し升トの思ひ懸なき白狀を與力つ  
傳 らく聞果て暫時勘考の体なりしが何か心に懸頭けん、今日は右よて宜とて捕手共指圖  
しつ、先は千太を引立させて傳馬町の半舎へ送り我は件んの書簡を納めて時を移さず準備  
を整のへ町奉行の屋敷を指て只管急ぎ行しと云

百 打開きて讀んど爲れど一字も讀ねば舌打して書翰と引伸へ鼻を吐んと爲る處ろを豫々かれ  
を粗ひ居たりし捕手の壯俊兩三人、バラ／＼と走り廻りて驚ろき透つる千太が背中を濃  
の十手ふりわけ五ツ六ツ打さしめ蹴倒しあへず萬手小手も舞々ど縛しめて件んの書翰も把  
揚つ、既や立ませひノ聲諸とも土地の番屋へ引揚たるに予懸て巡廻の與力來りて一應千太  
の身元糺し又捕手が差出たる書簡を受とり讀下せしが讀も了らず大ひに驚ろき、是は之れ  
先年三月櫻田見附の傍に於て井伊中將を襲奉まつりし惡徒より、惡徒へ宛て通牒したる書  
翰なること隠語なれども疑がひ無し扱は此乞食ころ容易ならぬ曲者なりソレ引打ひて物て  
の事ども白状させよト焦燥にぞ捕手ども心得たりと右左りより立か、りて縛しめられたる  
千太を引据、紙糾棒を振舞して背尻の肉の碎くるばかりよハッ／＼と打懲せしかば千太  
こらへず息も絶々(千)ア、少々お待たせへ何も敷も少し上／＼と泣叫べば與力は點頭  
棒を止させ(與)ヨシ、然らば先尋ねるが其方向いふ次第が有て此手紙を所持して居たぞ(千)  
ハイ其手紙は實の處ろ、襟の中に這入て居たのを俺ちも今日まで知らずに居ました(與)ナ  
此手紙が襟の中、這入て居たとい何いふ譯だ(千)何いふ譯だか存じませんが先刻兩國  
の橋の下で武虫を驅ながら氣が附まして、襟を綻ひて見ましたら此手紙が出ました譯で(與)  
ハ、然なら其衣服は其方新らしく拵らへたのか古着物でも買て来たのか(千)ハ、此の衣服  
は或る古着屋で(與)買て来たぞ申すのか倍と然に違ひなひかヤシ偽はりを申すと最後、直  
さま尻が割るが宜か、其時は何くらひ痛い目も爲せなさやならず又其罪も重くなるが然を  
覺悟で偽はるなら偽はつて申しあげよ、サ、何じや其古着屋は何町の何邊で濃籠には何屋と

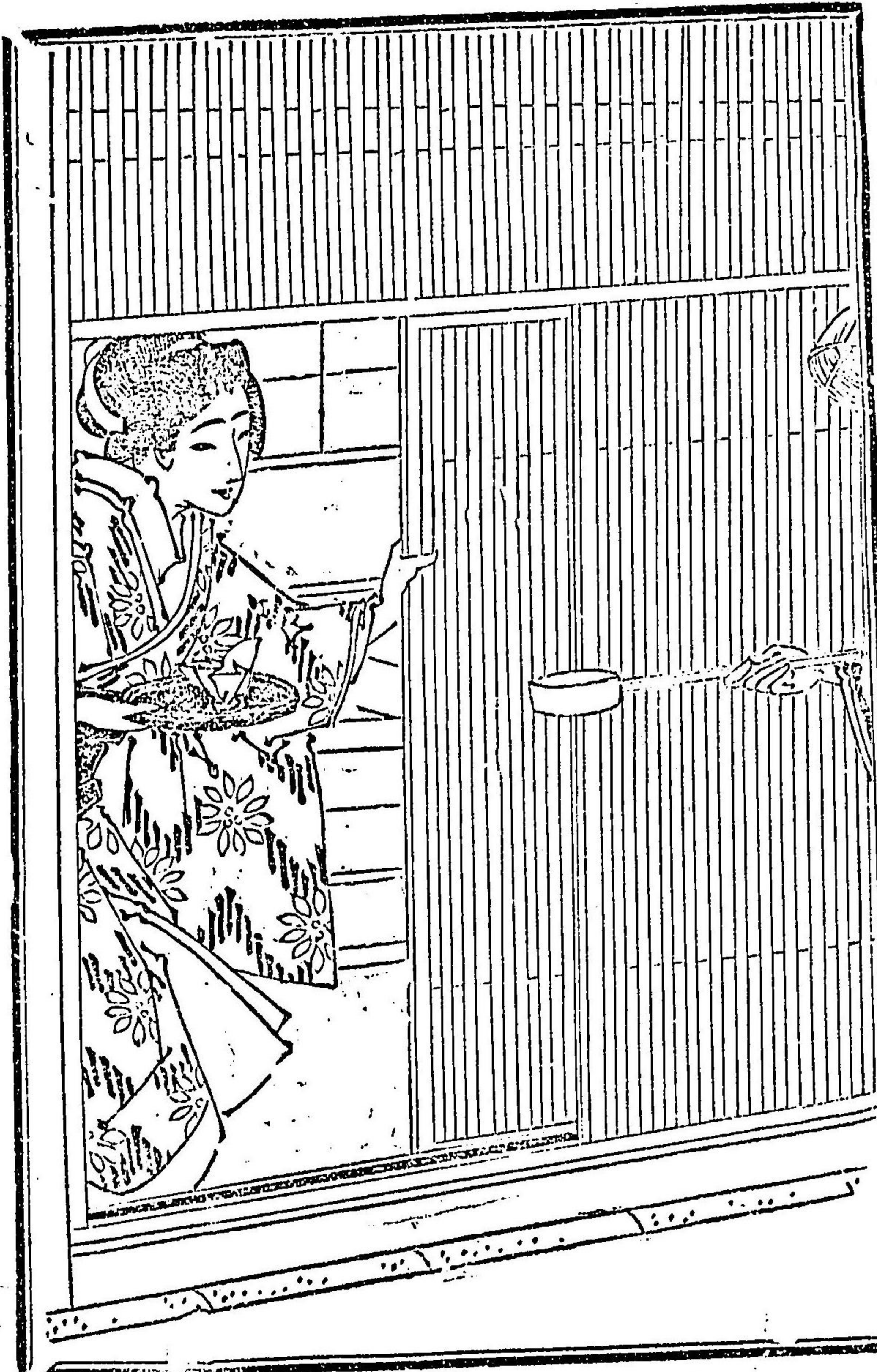


百すんば禍害眼下に起らんこと質し掌中を指より疾く況て吉田半介が如き脱れ難き男子の意  
地とて不易なる事上加担しつ其事の証據となるべき通謀の書を焼捨すして、彼奈なる心  
なりしかか之を襟の中に時はへ秘藏したる處より圖らずも、其書惡徒の手に渡りて其事遂  
公廳に聞ゆ急き半介を生捕との嚴命立地ろ下りしかば都下邊界の差別なく幾千百の同  
心與力等、其他捕卒と稱する者ども此嚴命を聞が否や我一番に彼を捕縛り功事を現せん  
思ひ競ひつ或ひは飴賣紙屑買と種々の姿装に變じて半介を捕へんどの手當一方ならざりし  
かば半介は隠れ家居て此事を聞き打笑ひ「ア、然もあらん、我首は櫻田事件に亡なふ  
可ものなりしかぞ、眞の仇敵市平をば撃てめんど思ふばかりに彼折は狗死せずして辛く虎  
口を脱れたり然るに先夜圖らずも件んの仇敵を打遂せ且其後密ひやかよる民へも復讐一職  
を、内通して事濟たれば今は既や何立でか役人共を腦ますべき疾く奉行所へ自首出て刑場  
の露と消べきなれと我幼年よして主家を脱走で父にも母にも是と謂、孝義を尽せし事もな  
く況て累代大恩受たる主君へ對し奉つり忠義らしき事もせず此儘空しく法廷へ拘れ縛り首  
を刎られんこと、生前の恥辱死後の殘念。之れに過たる物もなく君父へ對し參らせても恐  
れ多き限りなり、今熟々我邦を觀るよ朝廷幕府確執ありて遠からず日本國中、大騒動の起  
らんこと不日に在んと思ふが故に希はくは我れ世に在て其騷亂の起りしとき第一番に主家  
へ歸參し君が馬前よ戰死して年來重ねし不忠不孝の大罪の刃分が一ツも補ないんと云ふ  
神なれば脱る、だけは脱れたく又一ツはアノ葛城、我青年の些細なる恩義を思ひ身を捨  
て斯る遊里に沈み居こと不便の至り心苦し、幸はひ先頃市平を撃、夥多の金を奪ひたれば

此金を以て彼を受出し身の落附を計畫て遣らすは我も男子の甲斐なきなり、トハ思ふもの、  
昨日今日、出門も能ぬ日影の身なれば奈なる手術を施らして彼を救ひ出すべき人傳にては  
物たらずハテ奈にせんと腕を組み首を低て良暫時く思ひ煩らひ居たりけるが信と心に思ひ  
つく微妙の工風を得たりけん莞爾と笑つて小膝を打ち「昔しよりして有ふれたる葛城を  
紙物語りよ有べく思ふ趣向なれと今思ひ得し手術を以て兎も角も吉原まで紛れ入て葛城を  
ば受出す一事を果すへし然た、胸の中に分別辛やく決まりしかば豫て心腹まで調察  
きたる我子分を兩三人、内密に招き寄せて件んの手段を相談ふほどに子分どもは一議及  
はす皆心得て市中を經廻り一番形の早桶と細引其他華儀の器物を悉く買來りしにぞ、  
半介は金を用意し右早桶の内に入を子分が之蓋を掩ひ細引を以て八重纏纏其上白布  
の袋の被を打かけつ、棒を通し花を挿添亡者を寺へ送るが如く十二分に作り立て子分三  
人これを昇あけ然あらぬ休立出つ、難なく吉原へ到りしかば土手の蔭の草叢にて昇仰  
て蓋を除き半介密と抜出て驚て葛城が許へ到り身の危險の轉末を搔掴んで物語り彼市平  
より得たる處ろの五百兩の金を選し自から身放の事を計れと云捨て早立あがるを葛城は堪  
りかねて暫時くと衝はり隨るを辛ふして突除つ、土手下へ走り歸り、元の如く桶に匿れ  
其日は事なく歸りたるが半介は之に慣て其後右の如く準備ひお民が許と葛城が許へど、  
度々通ひ居たりしが斯と或日のこと町奉行の駒井相摸殿が此早桶と圖らずも摺れ違ひて何  
か心に不審けん其行先を突止來よとの腹心の家來に示すよ來家心得み隠れよ右早桶の跡  
を跟て何處までもと慕ひ行しと

又葛城は圖らずも半介より五百兩の金を得て悦ぶこと大方ならず遂に樓主佐野へ  
 掛合ひ身脱の事を相談したるは葛城が此年來、眞特を以て勤めたるゆゑ佐野も是が爲に  
 は既し莫大の金を離け且當時彼が身の借財も少々なるにぞ何ぞ之を拒むべき最心よく受引  
 て証文を返し其他萬端、見苦しからぬ様はからひしかば、葛城も感心して双方實情の感涙  
 を溢し一夕ゆたかに酒宴を設け留別の酒杯を廻らし樓婆若者惣ての者へも附渡り宜しく有  
 て其翌日葛城は辛やく苦界を脱出つ、例の壯俊作藏に吩咐かねて買入置しと云ふ、永代向  
 の河岸通り相川町の家に移りて先取あへず此事を半介へ知らせしかば半介も胸を撫で、ソ  
 レにて年來氣懸なりし一事を漸やく果したりとて悦ぶこと限りなく兎角するうち春も過  
 て靈祭る七月の星合の天と成し頃を以半介は久方ぶりよて葛城に會んと思ひ例の早桶に打  
 乗つ、腹心の子分に昇れて今永代の袂まで來か、りたる折しもあれ、何れよりして集まり  
 來にけん雲霞の如き衆多の捕吏等、橋の東西市街の口々、到らぬ隈もなきばかり舞々ど詰  
 かけつ、「吉田半介御用なるぞ神妙に細を受るト云かけバラ」走り寄や桶を昇たる子分  
 二人を矢庭に打据縛りあげ又早桶に群がり蒐りて其儘捕んと舞めく處ろを半介は桶の内よ  
 て事の始終を窺がい知りつ、絶て騒ぎたる氣色もなく例の金剛力を以て桶をハラりと笑破  
 り宗近の刀を左手に把つて、大喝一聲跳り出るは彼は當時有名の劍客、殊には今ぞ一生懸  
 命、覺悟を極めし顔色なるにぞ捕吏共アツと叫びて風よ木の葉の散る如く皆七方へ逃開き  
 手を下す者なかりしかば半介れもはす隙を得て裾を端折り袖を巻あげ手疾く準備を整の

ながら足場を搦つて大音あげ「捕吏の頭は何人なるや又いかなる罪あつて此方を召捕たま  
 ふぞ仔細を聞んと云せも果す捕吏の頭人進み出て擬勢の聲を振しほり「黙れ半介御用なる  
 ぞ、御用の筋を聞たくば法廷へ參つて承たまはれ、斯いふ場合に臨みては只神妙が緊要な  
 るぞト云せもわへす冷笑ひ（半）日本古來の弊習よて人を捕へんと爲るときは其事柄も演聞せ  
 ず只管に壓制して理非も辨せず拘引ゆき腐れ番家よ拘留して勿体なくも時の君の民安かれ  
 と布れたる宏愛仁慈の法律を破り、濫りよ人を鞭撻して枉て冤罪に陥入しむるは是其方等  
 が恒の事なりア、半介不肖なれども年來有志の猿彼と志念と相合せ厭制奸佞上を暗まじ下  
 を虐たげ世に立て虎の威を借り己を肥せる、狐狸狗盜にも優りたる大奸物を誅戮して以て  
 公廳を清めんと思ひ、千萬力を盡したれども運拙なくして遂に果さず今此場合よ陥たるこ  
 と遺恨何事か之よ過ん然れども阿容く」と手を束ねて縛に就き其方共が毒手よ死なんや、  
 帯する刀は宗近なり斯いふ我は吉田半介、今日ぞ日頃の手術を顯はし大刀折れ力盡るまで  
 思ふ存分働きくれんイザ奸物ども撃て滅れ、實我今の一言こそ二世を貫ぬく未來記にて我  
 死して是より以後、幾百年の年を重ね幾十回の變更ありて世は今日と變るども物て奸徒等  
 上よあらば愚民の之に壓仰され壯士は之が爲に斃れて國家の元氣衰退し敵國外寇これに乗  
 じ上下安堵の時なからんこと、鏡に懸て見るが如し其方共は斗筭の小人、其邊の大機は知  
 らずまじけれと熟耳底に覺ゆ居て要路の奴等へ傳言せよ、傳言せよト思ふ限り罵詈雑言を  
 罪を犯し身の措處ろに切迫して早桶の中に匿れ、密かよ市中を徘徊したれど明奉行は之を



二百三 脱さず其早桶の鼻ひ棒に充分手澤の染たるは山者ならんと思われ、極密探偵残る方なく  
遂に愛に到りしなり、論は無益なソレ者ども召捕めされト聲を振はれ、烈しく下知を傳ふる  
程は捕吏ども、今となり心憶せと詮方なきに多勢を懸み八方より御用の聲を力として手に  
く十手ふり騎し競ひ蒐れと擬勢のみ近づき難てぞ見たりける

第六十一回

明 豪邁不屈、義に齊し、捕吏共を物とも爲ずして思ふ存分罵しつたる半介が大胆不敵な物  
慣し捕吏共も容易には進みかねて、遑易猶豫の体あるより、捕吏の頭人何某等は、胸甲斐なき事  
に思ひ名々部下の捕卒を屬まし、怒り罵詈下知せしが、捕卒も今は黙止がたさに多勢を懸み  
擬勢を張て御用く、と呼かけながら、八方一時は半介へバラバラと、撃て掛るを待設けたる半  
介は足場を定めて、宗近の太刀を真額に探し、遠くまで騒がず呼吸を測り進退よろしく度を外  
さす右を襲ち左を拂ひ前後に當りて、真暫時く切まくり斬まくるに、刀は宗近撃手は、劍客、太  
刀風鋭とく空撃なきにぞ僅か二時三時よして撃る、其勢を知らず事不容易に見へたりしか  
ば、頭人共胆を冷し下知を傳へ、人敷を集め此上は只遠巻よして其勢をひの盡るを俟んと、稻麻  
の如く竹葉の如く四方嚴重に推取巻、衆目を注ぎ疾視つめつ、逃さじものぞと打目成たり、  
半介は一息ついて此爲体くを見廻しながら、太刀を拭つて冷笑ひ、「鼠も均しき者共を幾百人  
撃たりとて無益の殺生無味骨なり、最早此等で太概三年貢を納めて、往生せんと決心しつ、  
永代橋の中央に進み行て復大音を振し、はり「先刻拙者が演述したる言葉の趣むを逐一に熟  
要路の人に傳へ治國の道の大基とせよト云も丁らす欄干へ足踏かけて、宗近の刃に袖を添  
つ、左の肚へグザと刺し、徐々に右へ引廻して、懸て咽喉を搔切あへす俯伏し臥て息たたり  
とぞ實に維時文久四年六月某の日の事なりと云ふ」斯る處ろへ東西より、密探の捕吏の支ゆ  
るをも、捕れず性まを素足の儘まで狂氣の如く走來りしは、お民れとの兩人よて、双方一時は  
半介が血液に塗れし亡骸へ折重なり抱きつ、物をも云はず泣伏たる折から、外木由衛門も半  
葉を脊負て走來り此爲体くを見るが否や共音にアツと泣を見て、幼稚けれども半葉へ父の  
手を把り足を撫で只ナロくと徘徊つ、泣叫びて、是は始末は捕吏共目注せして、件々の四  
人よ打向ひ其方共は半介が由縁の者か他人なるか、豈夫由縁の者ならば斯る處ろへ踏込來り  
自から繩を受んとて、此舉動は致をまじ他人ならば疾く立去れグツツとして居て、連累くふな  
ト聲高し叱り退るは、是ぞ其筋の内命に據り半介が遺族の者へは別段の沙汰も爲すして、其餘  
類の激動を密かに押へんどの心なるか、特と言葉を曖昧にし之を去しめんと爲たれども、お民  
は更なり葛城も共言葉を打揃へ「イエ」私しは半介の妻、民と申す者で、私しも  
主が由縁の者よ何れも他人とやムりませぬ、願ぞ半介が死骸諸ども、お連なされて下さ  
りませト思ひ入て云ひ放すを、由衛門遠て、推止め、彼等二人は半介が遠縁の者で、御座りま  
すが、昨今少々狂氣の氣味ゆゑ何事を申すやら取止もなき申し條、何卒お聞免し下され此儘  
お免し下された、と云に、捕吏等黙頭て、然らば其方右兩人を召連て歸るべく又格別の儀を  
百 以て上思し死あるに依り半介が鼻首を免し死骸は此儘其方ども、下し賜はり、いはいと謝し  
三 んで引取申せ但し葬式一切の相成らずと心得べく、實に今日の御計らひ、古今無例の次第な  
三 れば其方ども有がたく思ひ、尙心得違ひなきや、精々神妙緊要なりト幾度か告示しつ、懸て衆

常下外水由衛門は永代の橋上にて立腹切て終を遂たる半介が亡骸よ、取着しま、泣入る  
 民も七の爲城を叱り罵し辛やく泣を止めさせて我は四下を走廻り一挺の釣臺と雨  
 人の入夫とを雇ひ来り、半介が死骸を昇せて濱松町の家に歸るに民も七も駕に乗て半葉  
 を抱き之に附従ひ諸共に歸り来りつ是よりして復た二時三時も、返らぬ愚痴を云もしつ云  
 れも爲つ、果しなきまで泣ては口説き口説ては更打泣こと限りなきよぞ、由衛門も此爲  
 休くに道理なりとは思へども特と聲を振立て種々に叱り懲り遂に半介が亡骸を菩提所へ葬  
 り丁り尋で跡々の事を圖るに民も七も是限り尼に成んと云けるを之も由衛門推止め  
 て心さへ尼に成れば強がち姿を變るに及ばずと説諭し、先はお七へも我家を盡せお民の  
 家に同居させて只管半介が追善の爲め念佛に日を暮せたりしと、斯て後は別段に記すへき  
 程の事もなく復幾干の日月を送りて世の中明治の御代と成しが是より先き由衛門は疾病よ  
 因て死亡なり尙月を積み年を累ねて半葉も既成人せしかは種々の事故に遭遇せしものち遂  
 に東京へ移るとみ神田進雀町の邊に於て一の講双紙屋を開きし處ろ思ひの外繁昌して母  
 とお七とを養ふに不自由の字も知らず半葉はますく商賣を勵み後神田を去り芝へ  
 移り呉服店を開きまが明治十五年の秋、相州横須賀へ引移り爰に熟々亡父の事を回顧して  
 所感ありしが算盤を捨て農に歸し姓名捨てを一變して未も妻を要る事なく三人今に暮し居  
 とぞ半介が墓は或人の説に本所の法恩寺に在よし又三吉と作藏とは其終りを詳ひらかに爲

す、次に本編の物語は最初より半介が虚無無手段を運用しけるを眼目として記すべき等な  
 りし處ろ差支ぬの廉出来せしゆゑ不本意ながら右を省きて爰に本傳を説納む但し其事と其  
 遺族は明治代に渉るを以て之を明治俠客傳とぞ題したるなり焉

明治二十三年三月十五日印刷

發行所 日吉堂

印刷者 龍雲堂

菅谷與吉  
神田區佐久間町壹丁目九番地  
大場沃美  
神田區柳原河岸第十一號地

大賣捌所

上田屋榮三郎  
大川屋銳吉  
辻岡屋文助  
山口屋藤兵衛  
春和書店  
共

金井勝五郎  
井上勝五郎  
明江進堂  
近江屋平吉  
大黒屋宗次郎  
木吉堂  
日吉支店

神田區田代町九番地

3